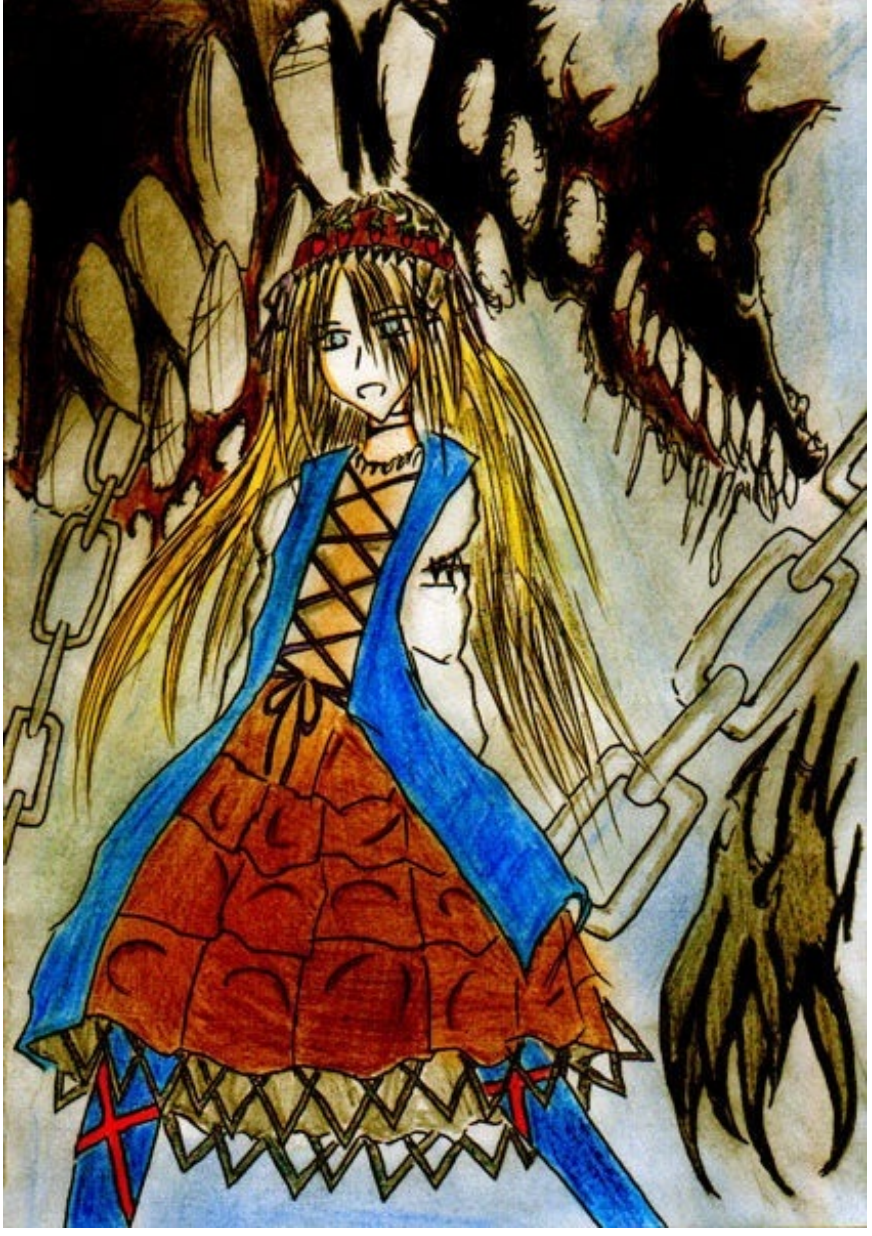

登場人物紹介

フェンリル　能力　フェンリル

　黒白のゴシック・ロリィタの美少女顔の美青年。白皙の肌に金銀の長い髪をしている。二刀流の剣士。

レイア　能力　エタン・ローズ

　黒白のゴシック・ロリィタの少女。

　萌黄色の髪の色をしている。

　人間では無い、何か。
　傲岸不遜な性格をしている。

ウォーター・ハウス　能力　エリクサー

極度の自由主義と無政府主義、マイノリティーの解放を望む青年。
そして、大量殺人鬼でもある。「暴君」というあだ名で呼ばれている。

元ランキング「Ｂ」の賞金首。
(実質の実力はＡか下手するとＳ。)

デス・ウィング　能力　ストーム・ブリンガー

闇の世界で骨董屋を開いている謎の女。人間で無い何か。
汚らしいニットの服に、くしの通っていない長い金髪をしている。
絶世の美女。

ランキング「Ａ」の賞金首である。
(実質の実力はＳの可能性もある。)

ケルベロス　能力　アケローン

能力者ギルド「ドーン」の派生組織、派生施設である「アサイラム」に勤める男。
精悍な筋肉質の男。

フレイム・タン　能力　シャドー・フレア

白黒の格子模様のようなパーカーに身を包んでいる女。
顔に火傷痕がある。
「目的の無い」テロリスト。
テロという行為そのものに意味を見い出している女。

ブラッド・フォース　能力　クラシック・ホラー

ランク「Ｓ」の最強の殺人鬼。
青色のロリィタ服に身を包んでいる美少女のような姿の少年。

ルサールカ　能力　ギヨティーヌ

真っ黒なワンピースに身を包んだ女。
ドーンの強力なハンターの一人。

第一章　ヴァンパイア・パロール　1

　此の世界には魔法、魔術、錬金術、呪術、陰陽道、マジック、ＥＳＰなどと呼ばれる力が存在し、暫定的に皆、『能力』と呼んでいる。シンプルにして単純な個々の個性よりなる能力である。魔法と呼ばれる事も多いが、個人によってその力の性質はまるで違う為、能力という呼称の方が定着している。『能力』を使える者は『能力者』と呼ばれている。
『能力者』は大概、一能力しか持っていない。稀に複数の能力が発現する者がいるが、あくまで例外である。複数の能力を持っていたからといってそれが強さに比例するとは限らない。また、能力者は身体能力が飛躍的に成長するケースが多く、不老、不死、肉体強化、自己治癒能力強化なども発現する。
　能力はその能力者の性格に現れた形となって、才能が開花する。また、その能力は成長すると共に様々な形に進化する。
　この世界は多次元世界となっている。複数の世界が重なりあって、互いに干渉し合っている。

†

　青い悪魔の伝説。
　……。
　あるところに、一人の男の子がいました。
　男の子はもうすぐ五歳の誕生日を迎えようとしていました。
　男の子は暖かい家庭に生まれて、仲の良い十歳近く離れた姉がいました。
　姉はいつも赤い服を着ていました。少女趣味をした赤い服でした。
　姉は男の子にいつも不思議の国のアリスの絵本を読んで聞かせていました。
　懐中時計を持った兎に、チェシャ猫。赤の女王に芋虫。ハンプティ・ダンプティにジャバウォック。とても不思議な世界を語って聞かせました。
　五歳の誕生日を迎える数日前。
　姉は男の子と一緒に買い物に行っている途中。
　走ってきた泥酔中のトラックには撥ねられて、死んでしまいました。
　その時の光景を、男の子は色鮮やかに覚えています。
　姉は空高く飛び上がり、四肢が砕けていきました。
　地面に落ちる途中、姉の身体は綺麗に撒き散っていったのです。
　男の子は、落下していく瞬間の姉と眼が合いました。
　姉は恍惚としたような顔を浮かべているように、見えました。
　まるで、天界から舞い降りた天使が地上に落ちていくような光景。
　回る、回る、天使の舞踏がそこにはありました。
　それから数年後、男の子は十歳になっていました。
　男の子には、姉の他に、弟と妹がいました。四人兄弟だったのです。

弟が誕生日を迎える前日の日でした。
男の子と弟と妹の三人は隠れ鬼をしていました。
両親は、弟の誕生日プレゼントとケーキとチキンを買って帰宅しました。
けれども、両親の事をよく思っていない男がいました。
両親がチキンを買おうと、最初に足を運んだ肉屋で、肉から変な臭いがして、その肉屋のチキンを買うのを止めてしまいました。
それに怒ったのか、肉屋の主人は両親を次のターゲットに選んだのでした。
肉屋の主人は連続殺人犯でした。
趣味で、強盗殺人と強姦殺人を繰り返している犯罪者でした。
その男は、殺した人間の肉を店頭に混ぜて売る趣味もありました。
男は男の子の両親を尾行して、家まで付いていくと、中に入って男の子の両親を鉈と大型ナイフで殺してしまいました。隠れ鬼をしていた男の子はその光景を、食器棚の中から見ていました。そして、鬼をしていたお風呂場にいた妹は、思わずその光景を見て、飛び出してしまいました。殺人鬼の男に見つかった妹は、その場で首を刎ね落とされてしまいました。男の子の位置からは、その光景を全て見えてしまいました。そして、一時間半かけて、男は両親と妹をぐちゃぐちゃに解体していきました。母親と妹に対しては、性的な悪戯もしていましたが、当時の男の子には、それが何なのか分かりませんでした。
殺人鬼の男は散々、殺した人間をぐちゃぐちゃにして気が済んだ後、今度は金目の物を探そうと戸棚やタンスを漁り出しました。その際に、クローゼットに隠れていた弟も見つかってしまいました。弟も殺されてしまいました。
男は気が済んだのか、金目のモノを奪って、シャワーで身体を洗った後、何処かへと行ってしまいました。食器棚の隠れていた男の子を見つける事はついにありませんでした。
数年後、男は警察に捕まりました。
三十七名を殺した罪で、終身刑の判決を受けましたが。男が殺した三十七名の中に、両親と妹、弟の名前はありませんでした。おそらくは男が起こした事件で、発覚していないもの、証拠が挙がっていないものは、更にあったのでしょう。
その三年後、男は刑務所内で他の囚人の怒りを買って死んでしまいました。
男の子は永遠に復讐する対象を失ってしまったのです。
それから、長い年月が経過しました。
男の子は、闇を見て自らも闇に染まり、男の子もまた人殺しの殺人鬼になっていました。
……。
「何故、僕と戦う？」
血液礼賛、ブラッド・フォースは静かに言った。
彼は『青い悪魔』と呼ばれている。
水色の、サックス・ロリィタの衣装を身に纏い、その上から大量のナイフが生えた針金を全身に巻き付けた、金髪の美少年。
それが、ブラッド・フォースという名前の少年だ。

　彼は、おそらくはこの世界で一番、沢山、人を殺している。
　彼らがいたのは、何の変哲も無い街中だった。
　彼の周りには、数名の男女がいた。
「『ドーン』の長年の願いだからだよ。お前はこの世界にいてはいけない存在なんだよ。なあ、青い悪魔、Ｓランク賞金首の殺人犯ブラッド・フォース？」
　ブラッドの周辺に、金属の網が回転しながら回っている。おそらくは彼を逃さない為だろう。何らかの攻撃が、すでにブラッドに仕掛けられていた。
　ブラッドは哀しそうに言う。
「人殺しは止めたんだ。それに僕は人殺しをしたくてしていたわけじゃない。僕は他人が怖いんだ。傷付けてくる他人が怖くて、僕の『能力』は発動する。だから、僕自身ですら僕の力を止める事は出来ない」
「知るか、ほざくぜ。お前は何人殺した？　何人って数じゃないな。何万人？　ひょっとしたら、億に達しているのかもなあ。お前が生きているだけで、この世界にとって害悪なんだよ。お前は生きていてはいけない存在なんだ。だから、お前は死ぬべきだ」
　ブラッドの目の前にいた男は長身の剣使いだった。
　日本刀とも西洋の剣とも、どちらにも見える形状の刀を二本構えて、彼の前に立っている。
「……死ぬよ？　今までもそうだった。どんな『能力者』でも僕を殺す事なんて出来はしない。ドーンって言ったよね？　僕は散々、ドーンのバウンティ・ハンターから狙われてきたんだけど、何百人、ひょっとしたら何千人が僕の能力で死んだ。君も止めた方がいい。それ以上、戦意、敵意を見せると、僕の『クラシック・ホラー』は自動的に発動する」
　ブラッドは淡々とした声で述べる。
「お前の情報は散々、聞かされている。俺は四日前、Ａランク賞金首を二人倒した。お前を殺せる自信はある。俺の名前はディー・ロード。俺の『能力』の前では、幾らお前の能力でも勝てるわけがないぜ？」
　ディー・ロードと名乗った男は、構えている剣をブラッド・フォースに向けた。
　刹那。
　余りにも、馬鹿馬鹿しいくらいの刹那の時間だった。
　……。
　男は、何も出来る事は無かった。
　男は、ただ喋る事しか出来なかった。
　男の頭半分が消し飛び、顎だけが残った。
　ディー・ロードは地面に倒れた。
　彼は自分が死んだのだという事実すらも、理解していないのだろう。
　地面が真っ赤に染まっていく。
「……君がどんな能力者なのか分からないし。強いのかもしれない。けれども、駄目なんだ。僕のクラシック・ホラーの前では、どんな能力者のどんな能力でも無抵抗になる」
　それを見て、彼と一緒に同行していた、周囲に隠れていた仲間達も、次々と紙屑のように全身

の至る場所が崩れ落ちていく。
　それを見て、ブラッド・フォースは項垂れた。
「……君達まで殺すつもりは無かったのに……」
　寂しそうに、ブラッドは言う。
　彼は何事も無かったように、これから行こうと思っていた場所へと歩く。
　彼は映画を見に行く途中だった。新作のホラー映画だ。生々しいスプラッター描写が映し出されていると聞いて、いつものように映画館に向かう予定なのだった。
　後ろから、手を叩く音が聞こえた。
　街灯に寄り掛かり、くすんだ外套を被った女だった。
　どうやら、ブラッドの攻撃を何らかの手段で避けたみたいだった。
「すごいな。青い悪魔。やはり間近で見ると、笑えてしまうくらいにお前は強いんだな」
　女の顔は隠れて見えない。
　けれども、その声をブラッドは覚えていた。
「『フレイム・タン』……」
　女は被ったフードから顔を出す。
　くすんだ飴色の茶髪。心の中を覗き見るかのような両眼。よく見ると、メイクで隠しているが、禍々しい顔の火傷痕。
　彼女が存在するだけで、一面が虚無と暗黒が満ち満ちていくかのようだ。
「おひさしぶり。『アイス・エイジ』以来だな？」
　ブラッド・フォースの周囲に、一瞬にして、大量の刃物が現れた。
　彼の能力、『クラシック・ホラー』だ。
　彼は今、彼自身の意思で、その能力を発動させたようだった。
　明確な殺意の意志。
「君ならいつでも殺せるよ。僕に何の用？」
「……お前が今、殺した奴ら。ドーンの新入りでな。私がちょっとばかり、アドバイスをしてみたんだ。“お前達の能力は神も魔王も、きっと殺せるだろう”ってな。そうすると、身の程知らずにも、お前に挑んだ。馬鹿な奴らだな、倒したＡランクも雑魚ばかりだよ。Ｄランクの私にすら劣る連中だ。ドーンのリストは本当に当てにならない」
　くっくっ、とフレイム・タンは薄ら笑いを浮かべる。
「……君の首を落としていいかい？」
「まあ、聞け。私はこれから、世界を滅ぼしてやろうと思っているのだけども。お前にはその証人になってもらいたい。最強の殺人鬼、青い悪魔ブラッド・フォース。今、現在の世界では、お前こそが最悪の存在って事になっているらしいが。私はこれから、人類の災厄として、お前以上の存在になろうと考えている。それを宣言しに来た」
　しゅん、と。フレイム・タンと名乗った女の首に何かが走った。
　ブラッドの作り出した刃物が、彼女の首を過ぎ去る音だった。
「無駄だよ。この私は幻覚、立体映像を作り出せる能力者の力を借りて、お前の前に現れている

。……まあ、どの道、お前に私は殺せないだろうから、本物の私が来てもよかったんだが。念の為にな。話の腰を折ったが、私は世界をこれから引っくり返そうと考えている。お前が殺人鬼であるように、私はいわば“テロリスト”だ。これから、世界の秩序を引っくり返して、革命を起こす。その為に一度、世界に滅んで貰う。お前はそれを見届ける。まあ、近々、楽しみにしているんだな」
　そう言うと、フレイム・タンの姿は靄になり、徐々に消滅していった。
　後には、周りに散らばった、彼女の甘言によって陥れられた、数名のバラバラ死体だけが散乱していた。
「……何を考えて。いや、そうじゃない。映画館に行かないと。そろそろ、上映時間が近い……」
　青い悪魔、ブラッド・フォースは何も無かった、起こらなかった、誰にも出会わなかったかのように、その場を去る事にした。
　後に、この二人の邂逅が、様々な者達を巻き込んで、無尽蔵の死者が出る事を知らずに。

†

　アイス・エイジ崩壊から、約二ヶ月後の事だった。
　青い悪魔ブラッド・フォースを前にして、フレイム・タンはまるで勝者のように去った。彼女は死んだ筈だったが、不死のインソムニアの血を生前に奪う事によって、死の淵から再生したとの事だった。
　死に際の炎猫は、ブラッドに対して、何を云ったのかは分からない。
　炎猫の言葉がどれ程、ブラッドに何らかの打撃を与えたのかも分からない。
　けれども、言葉ごときでブラッドを傷付ける事が出来るのならば、とうの昔に、何者かが言葉でブラッドを倒していただろう。実際、言葉そのものが能力である者達だって、何名もいるが、それらの者達もブラッドに挑み、殺されてきた筈だ。
　とにかく、フレイム・タンは在る意味において勝者としてアイス・エイジを離れた。
　甘名の前で、擬似自殺。そして復活。インソムニアから奪った血。
　不死である、インソムニアの能力はフレイム・タンの肉体に染み渡り、今、過剰なまでの変化を遂げようとしている事が分かった。
　インソムニア、否睡はおそらく、フレイム・タンと近しい魂の形をしているのかもしれない。
　フレイム・タンは放浪の赴くまま、朽ち果てた民家の中で眠っていた。
　炎猫の狂気によって、リフリジレイターという能力の暴走によって出現する魔物が現れて、世界が宇宙へと飲み込まれた。あの宇宙空間は、おそらくは炎猫のイメージそのものだったのだろう。
　そして、炎猫の世界の中で、両性具有の大剣使い、男にも女にも変身出来る能力者である、新約言語ネオ・ロギスムは死亡して、肉体も消滅した。
　世界の均衡を守る世界そのものである『メビウス・リング』に。

それに、対極する『リフリジレイター』。
　リフリジレイターは、狂った道化師の姿をしていると聞く。
　秩序と混沌を司る者。
　メビウスとリフリジレイターは、所謂、神と呼ばれるものなのだろう。
　おそらくは、二人以外にも神と同種の存在は近いのかもしれない。
　その下位存在、神に近い存在が殺人鬼『ブラッド・フォース』。
　リフリジレイターを呼び込んだ炎猫は、ブラッド・フォースに両手の指や腕の骨をへし折るという快挙を成し遂げている。
　フレイム・タンは笑う。悪意の齎す、闇の炎が周囲を焦がしていくかのようだった。
　影の炎、闇の炎。フレイムは自身の事をそのように思っている。
　そして、吸血鬼。
　フレイム・タンは哂う。
　もしかしたら、ブラッド・フォースを倒せるかもしれない。誰もブラッドに傷を与える事など出来なかった。全ての者達は、ブラッドに細切れにされてきた。
　今のフレイムは、自由を勝ち取った事になる。
　炎猫が死に、ブラック・スペルが死んだ。
　憎悪の対象でしかなかった、母親のような炎猫。
　自身の歪んだ鏡像のような黒い呪文。
　彼らが死んで、フレイムから発せられたのは驚く程の愉悦でしかなかった。
　メビウス・リングが繋ぎ止めているであろう、近接するあらゆる次元。
　その中のアイス・エイジに似た場所は全て滅ぼしてやろうと思った。
　フレイム・タンは、誓う。自身は純粋なテロリストである事を。
　フレイム・タンは、考える。自分以上に悪意を持つ狂人はいないのだという事を。
　フレイム・タンは、考える。自分は世界を滅ぼす為に生まれてきたのだろうと。
†
　否睡は、数日間、呆けたままだった。
　結局、ネオ・ロギスムが死んだ事が否睡の酷い空虚を作り出しているのだろう。
　甘名は、否睡の元からしばらくの間、去る事にした。
　そして、彼はドーンの支部へと向かう。
　否睡から聞き出した、インターネットの空間。
　様々なコードを得て、辿り着ける場所。
　ドーンのサイトへと辿り着く。
　そして、彼はそれに登録した。
　これを機に、甘名も晴れて、ドーンのバウンティ・ハンターとなった。
　あまりにも簡単過ぎる、入会だった。
　名称と顔を認識されるだけで、身元など聞かれずに登録する事が出来た。
　さっそく。

賞金首の名前を見ていく。
ブラッド・フォースの名は無い。
ＡからＨまでの、八種類のランクが並んでいる。
まずは、Ｈの項目を開いてみた。
大量の顔写真が並んでいる。
その下に、世界各国の通貨で書かれた賞金額が並んでいた。日本円の表示もある。
Ｇ，Ｈは、能力者と呼べる程ですら無い弱小な能力者の名前が書かれていた。
Ｈの中には、能力者ですら無い連続殺人鬼やテロリストの名前すら載せられている。
日本赤軍や東アジア武装戦線のメンバー、はてはカルト教団のメンバーの写真まで見つけて噴出してしまった。警察署のポスターにはよく見る面子だ。
最近、新聞で読んだ事のある名前すらあった。
けれども、世界中の警察を悩ませている彼らの賞金リストを見ると、煙草や缶ビール一本程度の値段しか付けられていなかった。一般人。普通の人間の世界。世界の裏側を知らない人間の世界でならば、警察が頭を抱えて探し回っている奴らだ。名前こそ記載されているが、ドーンのバウンティ・ハンターはこのランクの標的は、好き者や何かのついででもない限り狙わないと聞く。
次に、Ａランクの賞金首を見た。
検察機能が付いていたので、炎猫の名前を検察する。
炎猫。
日本円にして、その賞金額は４２３８兆円。
つまり、一国の国家予算を遥かに上回る懸賞金が掛けられているという事になる。
複数の者が懸賞金を掛けているみたいだった。それも、５桁近くの者が。
炎猫は事実上、あらゆる世界、あらゆる次元の目の上の腫れ物のような存在らしかった。
それを、甘名達は、ブラッド・フォースは倒した事になる。
炎猫を倒した賞金は、誰に入るのだろうか。
それは、否睡やブラッドと話し合って、結論を出した。
フレイム・タンは、去り際に、彼らの賞金は全部、お前らにやる、私もお訪ね者だから、と口にしていた。
なので、三人で考える事にした。
甘名は、否睡が貰えばいいと思った。否睡の性格ならば、服やＣＤ以外に使う金以外は全部、その場で燃やすかもしれないが。
ブラッドには、アイシクル・ナイツのメンバー達の賞金を渡す事になった。ブラッドに金は必要無いかもしれないが、彼は否睡と一緒に、今度、新しいホラー映画を日本の映画館で見に行く為に金が必要になる、との事だった。
甘名は、ブラック・スペルの賞金を貰う事になった。
ブラック・スペルの名前を検索する。
同じＡクラスでも、賞金総額はまるで違うみたいで、黒い呪文に掛けられた賞金は、日本円に

して、６億と云った処だった。特に何の不満も無い。武器や防具、アミュレット・コーティング系の道具を買う為には心許無いが、普通に生活していく分には一生分の大金だろう。
　それよりも、苦笑してしまったのが、黒い呪文は同じＡランクの賞金首よりも、明らかにその賞金額が、下回っていた。調べてみると、Ｂ級やＣ級ランクの賞金首には、彼の賞金額を上回る者が何名もいた。当て付けに、Ａランクにされたと聞いていたが、実際、その通りだったらしい。賞金を掛ける側の方は、彼の本当の力量をちゃんと見抜いていたようだった。
　そして、フレイム・タン。
　検察すると、Ｄクラスの中に名前が入れられていた。
　その賞金額は、８２０万円。
　炎猫の親衛隊フロスト・マンサーの一人、ヘイト・クライムという仮想の人物を創り上げていた、アイス・エイジの影の実力者。誰もフレイム・タンの実力を正確に知っている者はいなかった。実際、戦ってみて、強かったどうか分からない。
　とにかく、彼女は謎めいていた。
　オレはインターネットを閉じる。
　さて、黒い呪文の賞金を受け取った後、これからどうしようか。
　結論はすぐに出る。
　オレは、フレイム・タンを追う事にした。

†

　よくよく考えてみると、６億円という賞金は、武器を購入する為には余りにも心持たなかった。
　オレのツイン・ソードを強化する為に、六千万以上。
　ファッションを防具として魔力でコーティングする為に、一億三千万も掛かってしまった。
　他にも、何かしら入用が出てくるかもしれない。
　それに、フレイム・タンを追う為には、現在の武器、防具では心持たないかもしれない。
　ドーンの実力者のバウンティ・ハンターは、大体、ライフワークとしてＤクラスとＥクラスの、数十万から数百万程度の獲物を狙うらしい。
　Ｃクラス以上になると、死を覚悟する事になるからだ。
　Ｃクラス以上の能力者の場合は、大抵、Ａランクとでも刺し違える可能性を秘めている能力者が多いからだ。
　いつものように、ゴシック・ロリィタ・ファッションに身を固める。
　否睡からの情報を頼りに、オレは日本におけるバウンティ・ハンターの集まる場所へと行く。そこは新宿歌舞伎町だった。
　新宿の混沌とした空気を掻き分けて、歌舞伎町に着く。
　そして、地図を頼りにある高級バーへと向かう。
　それは、歌舞伎町の中にあるビルの地下にあり、普通の人間には辿り着く事の出来ない場所だ

った。
　エレベーターに入る。
　地下二階までしかない。
　オレは、何回か地下一階へ続くボタンと地下二階へと続くボタン。地上へと続くボタンを、規則通りに押した。
　普通の人間が偶然だけで、行ける確率は天文学的に低い。
　エレベーターは、地下二階を通り過ぎて、ある筈の無い地下深くに下っていく。
　扉は開いた。
　Ｂ６Ｆと書かれている。どうやら、此処は地下６階という設定らしい。
　そこは、何処にでもあるような何気ないバーだった。
　酒瓶が大量に置かれており、マスターが客の注文を聞いている。
　この店にいる者は、全部で六名。
　オレはマスターに質問した。
「此処にいる、能力者の数は何名だ？」
　マスターはグラスを拭きながら告げる。
「全員です。貴方も含めて七名ですね」
「なるほど。全員、ドーン関係者」
「ええ、貴方は新規のハンターですか？　見かけない顔ですが」
「ああ。此処で情報を買いにきた。貴方が情報屋か？」
「違います。まだ、お越しになっていません。情報屋なら、私が電話で呼びますよ。それから」
「それから？」
「今日は、ハンターの中でも、かなりの実力者が二人お越しになっています。ご挨拶になられてはいかがでしょうか」
　マスターは指を差す。
　一人は初老の男だった。小柄ながらも筋肉質で、度数の強そうな酒を口にしている。
　もう一人は、煙草を吹かしながら、水割りを飲んでいた。
「レッドラムさまと、ウォーター・ハウスさまです」
　オレは、興味を持てなかったので、そのまま情報屋を呼んで貰おうと思った。
　酒は酒を飲む気が無かったので、ノンアルコールのカクテルを注文する。
　……。
　横に人が立っていた。
　ウォーター・ハウスと云う男だった。
「オマエ、かなり強いな。魔人レッドラムや俺の相棒のゴブリン・ヘッドは無関心だったみたいだが。俺はオマエに興味が湧いた。試しに戦ってみないか？」
　オレは馬鹿馬鹿しくなったので、適当に返す。
「本当にあるんだな。……酒場に行ったら、絡まれるっていう状況。馬鹿じゃないのか？　こういう場所は静かに酒を飲む場所で、他の客同士は無関心だというのがマナーじゃないのか？」

　ウォーター・ハウスは苦笑する。
「じゃあ、これならどうだ？　俺はオマエが気に入った。同性愛者じゃないが。容姿も好みだ。最初、本当に女と思った。だから、俺はオマエをナンパしている。これから、二人で外に出ないか？」
「オレは同性愛者じゃない。性同一性障害でもない。この格好も誰にも文句を云わせない。そして、何よりもお前に興味が無い。オレは此処に情報を聞きに来た」
「情報？　俺も情報屋だ。マスターが呼ぶ車椅子の彼も情報屋だが、俺も情報には詳しい。それに、お前の目的に協力する。だから、一度、俺と戦ってみないか？」
　オレは面倒臭かったが、仕方なく承諾した。
　マスターに入れて貰ったカクテルを飲み干す。

†

　バーの更に地下にある場所だった。
　そこは小さな闘技場だった。
　バウンティ・ハンター同士が情報交換するバーは、ハンター同士の個人的な決闘の申し込みの場所としても使われているみたいだった。
　普通は、金の分配などで揉めた場合、此処を使うらしい。
　その闘技場は、余り整備されておらず、草や小石が所々に生えていた。
　そして、壁には血の染みのようなものも当然のように付着している。
　ウォーター・ハウスとゴブリン・ヘッドの二人が、オレの前に立っていた。
　ウォーター・ハウスは、全身に包帯を巻いた痩せ気味の男だった。
　ゴブリン・ヘッドは、屈強そうな男で、拳闘家といった感じだった。
「まず、最初に謝りたいんだが。此処にいるゴブリン。彼もお前と戦いたいらしい」
　オレは呆れた。
「約束と違うだろ……」
「すまんな。さっき店で、俺達に眼もくれずに酒を飲んでいた、魔人レッドラム。伝説の殺人鬼ブラッド・フォース程に有名ではないが、彼は最強の殺し屋でな。触れるだけで、人を殺せる。ゴブリンは彼に挑戦したくて、今日、此処に来た。俺のオマエに対する好意とは別に、フットワークになって貰えないか？」
「オレが練習台ね。随分と舐められているようで」
　ゴブリンの全身から、水蒸気が上がっていた。
　彼はボクサーのように、拳を構えている。
「叩きのめせばいい。……彼を止めてやってくれ。身の程知らずにも、魔人に闘いを挑むそうだ」
　ウォーター・ハウスは淡々と云った。
「よく分かった。掛かってこい」

　オレは取り合えず、彼の真似をして適当に構える。
　ゴブリンは容赦が無かった。
　オレの鳩尾にアッパー・カットを入れる。
　オレは、気付けば数メートル浮いていた。
　上を見ると、ゴブリンがいた。
　オレはそのまま、地面へと思いっきり叩きつけられる。
　オレは地面に半分、めり込んでいた。
「能力を出してこいよ。てめえ。ふざけやがって」
「お前が能力を出してきたら、出すよ」
　オレは、服が汚れるのが嫌なので、次からかわす事に決める。
　オレは立ち上がって、ゴブリンの延髄に強い蹴りを入れた。
　綺麗に決まって、彼の上半身は転倒する。
　ついでに、オレは顎に跳び蹴りを入れた。
　そして、もう一つの足を背中に叩き付ける。
　ゴブリンは大きく右アッパーを放った。
　オレは軽々と避けて、彼の腿にも蹴りを入れる。
「お、お前、武道を……？」
「少年期の頃に少しね。足技のみだけど」
　もっとも、彼に対して両手を使うつもりは無かった。
「綺麗な足だなあ」
　ウォーターは嬉しそうにオレを見ていた。
「早く、能力を使え。ちなみにオレの能力は身体を強化するだけだ。足から衝撃波のカマイタチが出て、それで人を殺せる。お前は何か隠し持っているんだろう？」
　オレは数度、ゴブリンの顎に蹴りを入れた。
　彼の拳が、震えている。
　来る。……。
　オレは全部、それを受け止める事にした。
　まるで、マシンガンの弾のように、振動波を連続して放ちながら、ゴブリンの拳が、何度もオレの胸と腹に命中する。
　オレはそのまま、壁に激突する。
　何か、物が投げ付けられてきた。
　それは、小石だった。
　それも、同じように振動し、衝撃波を纏いながら向かってくる。
　中には、鋭い草も混ざっていた。
　オレは身体をひねって、それらを避ける。
　気付くと、目の前にはゴブリンがいた。
　再び、拳をオレの胸に当てる。

　オレは地面に倒れた。
　オレは、しばらく起き上がるのを止めた。
　ウォーター・ハウスが近付いてくる。
「俺の見込み違いか。すまなかったな。ハンターの洗礼だと思って受け止めてくれ」
　そして、ゴブリンにではなく、オレにだけ聞こえるように、俺と戦う時は本気を出してくれ。と囁いた。
　二人はエレベーターを上がっていく。
　二人が去ると、オレは起き上がった。
　ゴブリンの攻撃のエネルギーは全部、消し飛ばしたので無傷だった。
　しばらく、どうするべきか考えた後、オレもエレベーターでバーへと向かう。
　バーの中では、すでに闘いが始まっていた。
　マスターが嫌そうな顔をしながら、闘いを見ている。
　ゴブリンが、レッドラムと呼ばれる男に攻撃を仕掛けていた。
　酒瓶、グラス。様々な物が弾丸となって、レッドラムの元へと向かっていく。
　レッドラムは、それらを巧みにかわしていた。
　ウォーター・ハウスは、腕を組んで、呆れたように壁にもたれかかっていた。
「身の程、知らずだよ彼は。そこに好感を持って、取り敢えず相棒にしていたんだが。今日から、俺の相棒はやはりオマエにする」
「勝手な奴だな、お前、我侭だろう」
　椅子やテーブルが、次々と壁に刺さっていく。
　見ると、レッドラムの身体に数箇所、傷が付いていた。
　ゴブリンは無傷だ。
「負けるな、あいつ」
　オレは呟く。
「あれでも、一緒にＡクラスの首を狩りに行った事があるんだぜ。苦戦したけど、勝ったよ」
「Ａクラスなんて対した事ないな」
「そうかもしれない、ドーンのランキングなんざ殺害数と被害数、規模も含まれるからな。隠れた能力者は沢山いて、下のランクの奴の方が強かったりするケースも多いからな」
　ついに、レッドラムが片膝を付く。そして、片手を上に上げて指をぴくりぴくりと動かしていた。まるで、それは謝罪を扱いて、助けを懇願しているかのようだった。
　ウォーター・ハウスは指で十字を切った。
　ゴブリンは、バーの中で奪ったナイフを一気に、投げ付ける。
　彼の攻撃は、相手の攻撃の一切を、封じ込めようとしているように見えた。
　レッドラムは、巧く身体を捻って、致命傷を避ける。
　しかし、彼はぼろぼろだった。
　止めを入れるように、ゴブリンは酒瓶をテーブルに叩き付けた。
　鋭い刃物が出来上がる。

　ゴブリンは、それをレッドラムの方へと向けた。
　おそらくは、酒瓶を割るという行為が隙に繋がったのだろう。
　魔人レッドラムは、ゴブリンの足の方に、指先だけ触れた。
　決着は一瞬だった。
　ゴブリンの足が異常な速度で腐敗、消滅していき、見る見るうちに彼の片足は無くなる。そしてそのまま、腐敗は腹、胸、腕、顔へと向かっていき。
　ゴブリンの肉体は砂のようになって、崩れ去ってしまった。
「あれが、レッドラムの能力『イエロー・ダーク』だ。手や指で触れたモノを、一撃で腐敗させ死へと至らしめる」
　老人は呻き声を上げながら、起き上がった。
「ウォーター・ハウス……」
　レッドラムは血塗れで云う。
「お前の相棒だろ。お前も死にてえのか？」
「ちょっと待てよ。勝手にそいつがやったんだぜ」
「お前、俺を何だと思っている？　殺人鬼ブラッド・フォースと比肩したとまで云われた、魔人レッドラムを何だと思っているんだ？」
「……ゴブリンと戦う相手は優しいよなあ。みんな、手加減して相手して」
「そうだぜ。此処までぶちのめされてやったのも。相手が一瞬にして、勝敗が逆転したという絶望を悟らせる為だ」
　見るからに、レッドラムはウォーター・ハウスを殺すつもりだった。
　オレは見かねて、立ち塞がる。
「オレの名は、ブラック・スペル。能力の名前はアイアン・ランスって云う。今から、お前を倒す者だ」
　レッドラムは吟味するようにオレを見ていた。
「ブラック・スペル……？　この前、リストから消えていた奴か。おい、新入り。お前も同じ目に合いたいらしいな」
　レッドラムは完全に逆上して向かってきた。
　オレは能力を使う。
　レッドラムは足を止める。
　オレは彼が気付いた事によって、殺人者にならなかった事を喜ぶ。
　彼の首には、大量のナイフが突き刺さっていた。
「首の動脈付近に刺さっている。能力の正体は教えてやらない。取り合えず、少しでも動いたら、お前は死ぬ。オレが動いていいって云うまで動くな。次は心臓に入れてもいい。オレが店を出るまで、動くなよ」
　レッドラムの顔は怒りとも悲しみとも付かない表情に揺れていた。
　ウォーター・ハウスは、畏怖するかのようにオレを見ていた。
　マスターが申し訳無さそうにウォーター・ハウスに云った。

「私の店ですよ……他でやって欲しかった……」
　ウォーターは、財布を彼の手元へと放り投げる。
「ゴブリンのものだ。オレと彼の酒代も含めてくれ」
　マスターは中身を見て、笑みを浮かべる。
「ええ、毎度、ありがとう御座います」
　オレとウォーター・ハウスは、バーを出て歌舞伎町の夜を歩いていた。
「なあ、まだ聞いてなかったな。名前はなんて云うんだ？」
「だから、ブラック・スペルだって」
　ウォーターは苦笑した。

†

　あれから、一日経過した。
　既に、此処は新宿ではない。新宿の歌舞伎町にある次元と次元の裂け目を抜けた地帯にある異世界の中だった。此処には、様々な魔人達が訪れるらしい。
　歌舞伎町よりも華やかな場所で、夜闇の中に光り輝くビルが並んでいる。
　オレとウォーター・ハウスは高級ホテルにいた。
　ホテルのラウンジで、食事をしていた。
　彼は今から、もう一人、仲間を呼び出すとの事だった。
「あのレッドラムに勝てるとは。やはり気に入った。ドーンのハンターをやるらしいというが、誰か狩りたい相手でもいるのかい？」
「Ｄクラスの。フレイム・タンって奴」
「Ｄクラス？　仇討ちか何かかもしれないが、Ａクラスを狙おうぜ。お前ならやれる。お前ならドーン最強の戦士になれる」
「そうかも……。でも、オレは賞金稼ぎが目的じゃない。フレイム・タンに会って、どうしたいかも考えていない。ただ、会話がしたいだけかも」
　オレは挽肉のパイを口に入れる。
　ワインではなく、オレンジ・ジュースを頼んだ。
「勿体無いな。最強の能力者を目指してる奴だっているのに。ドーンってのは何だかんだで、強さの張り合いでな。協定が無ければ、互いに殺し合っていてもおかしくない関係だ。みんな、自分よりも上がいる事が許せないんだろう。俺にだってそういう部分はあるさ、しかし、あのレッドラムをコケにしてやったのは最高だった。何が青い悪魔と対等だ？　自惚れるのもいい加減にして欲しいものだな」
　オレはブロック・チーズに生ハムを巻いて食べる。
「オレは何も望んではいない。強さだとか。賞金だとか。名誉だとか。下らないって思っている。最強。無敵。馬鹿馬鹿しい」
「ほう？　じゃあ、お前の生きている意味って何だ？」
「オレは自分自身のエゴイズムの為に生きている。それはこの世界に屈しない事、それだけだろうな。誰かと競っているわけじゃないんだよ」
　ウォーター・ハウスはますますオレに興味を持ったみたいだった。
「ドーンは非個性的だよ、あれで。退屈な張り合いばかりだ。けれども、俺だってその張り合いが面白くて仕方が無い。その張り合いの頂点に立ちたい。Ａクラスを狩り尽くせば、みな、俺達に一目置くだろうなあ」
　話にならない、と思った。
　少しだけ、この男は自分自身に酔っている。
「ウォーター・ハウス。オレは人を殺した事が無い」
　それを聞いて、彼は眼を丸くした。

　本当に驚いているような顔をしていた。
「殺した事が無い……？　また、冗談を……。お前程の能力者ならば、人を支配したいとすら思った事がある筈だ。あらゆる人間を自身の支配化に置きたい。俺達は犯罪者とスレスレなんだ。犯罪者を狩る事によって、俺達は欲望を昇華している。
　心底、呆れてしまった。
　ドーンの価値観は少しズレている。あるいはこの男の頭が酷く御目出度いだけなのかもしれない。
「いいか、ウォーター・ハウス」
　オレはハンカチで口元を拭う。
「殺人は罪悪だ。殺人は無しか生み出さない。人は人を殺すべきじゃない。汝、殺すなかれ。という箴言をオレは信じている。殺された者の友人や家族、恋人の事を考えるべきだ。犯罪者や殺人者だって、殺されるべきじゃない。命以上の価値なんて無い。愛を持って、答えるべきだ。分かり合えないかもしれない。傷が深まるだけかもしれない。けれども、仇討ちや復讐、報復からは何も生み出さない。人は神を信じるべきだ。存在しないかもしれないが神とか愛を信じるべきだ。それこそが、人間が正しく生きる事なんだ」
　ウォーター・ハウスは噴出して、腹を抱えて笑い転げた。
　狂った世界観を持つ相手に対しては、正常な事を云っているこちらの方が狂っているらしい。つまり、彼にとってオレはニヒリストなんだろう。
　オレはチョコレート・ケーキを注文した。
「オレは悪人だから、人を殺さない。だから、復讐も否定する。オレは弱いから、人を殺せない。オレは人間には愛や平和が必要なんだと思っている。思いやりとか。だからこそ、オレは狂人でいい。ドーンだとか、この世界だとか。人を殺さなければ成り立たない世界なのは分かっている。殺さないとより被害者が増える相手が存在する事も。けれども、オレは人を殺さない。相手が大量殺人鬼でも無差別テロリストでも。オレは殺さないし、殺せない。この世界は戦争によって成り立っている。オレは非暴力を訴える。おそらくオレは間違っている」
　そしてまくし立てた後、水を口にする。
「本気で云っているのか……？」
「本気だ。ずっとそう自分に言い聞かせてきた」
「そうか、本気なのか。だとすると傑作だ」
　彼は何故か、喝采を浴びせ、両手を叩く。
「これから、俺の友人が来る予定なんだが。会ってくれるか？」
　俺の言葉を結局、どう受け取ったのか分からないが、ウォーターは無感動に、口の中にシャンパンを流し込んだ。
「折角、此処まで来てやったんだ。会うさ」
「それに、いい誘いがある。ビジネスの誘いだ」
　こいつは本当に人の話を聞いていない。
　オレがドーンに入る目的は只、一つ。フレイム・タンを探す為だ。

　会う理由は分からない。けれども、とにかく会わなければならないと思った。
　それから、十数分くらいした経過した。
　ラウンジへと、一人の男が入ってきた。
　その男は、身長１８５センチくらいだろうか。オレよりも頭一つくらい大きかった。見るからに、引き締まった肉体をしており、細身の筋肉質と云った処だった。
　縦縞の黒いコートを付けていた。髪の毛は茶髪で、整髪料でよく整えた、ウルフカットをしていた。
　首にはトゲ付きのチョーカーを巻いている。
　眼も、獰猛な獣を思わせた。
「彼の名はケルベロスと云う」
「君の名は？」
「フェンリルと呼んでくれ」
　ウォーター・ハウスは苦笑した。
　オレは先ほどまで、頑固にブラック・スペルを名乗り続けていたからだ。
「ケルベロスにフェンリルか。それは傑作だな。ギリシア神話の冥府の番人をしている三つ首の魔犬に、ゲルマン神話の最終戦争で主神オーディンを喰い殺す神殺しの狼か」
　何が楽しいのか、ウォーターはげらげらと笑い続ける。
「なあ、ミスター・ウォーター」
「ウォーター・ハウス」
　オレとケルベロスは同時に喋っていた。
「彼はかなり強いな」
「こいつ、かなり強いよな」
　その言葉は自然と出てきたものだった。

†

　オレはビルの前に止まっていたヘリに乗せられた。
　数時間程、海の上を飛んでいた。
　聞く処によると、新宿から入れる次元の裂け目の場所は島状になっており、他は延々と海が続いているらしい。
「ミスター・レッドラムを倒したんだってな」
　ケルベロスは関心したような顔をしていた。
「何でも、最強の殺人鬼と比肩していたんだってさ。オレはブラッドと会った事があるんだけど。あんな奴、まるで比較にならなかったぜ」
「おい、会ったのか？　よく殺されなかったな？　どういう機会で会ったんだ？」
「一応、友人というか何と言うか。知り合いくらいの関係かもしれないけど」
「素晴らしい」

　ケルベロスは素直に笑った。小さく両手で喝采を贈っている。
　ウォーター・ハウスは訝しげな顔をしていた。
「俺の同僚は何人も殺されてる。話がまるで通じない相手だと聞いてるんだ。フェンリル、お前にしてはあんまり面白くない冗談だぜ？」
「オレはお前に対して冗談を喋った事は無いんだが」
　ウォーター・ハウスは、話にならない、といった風に、別の話題に切り替える。
「これから、もう一人くらい誘ってパーティーを組む。今回の賞金首は一人で倒すには不意を付かれて負けそうで。二人でも心許無い。だから、四人くらいでやる。フェンリル。ドーンにおけるパーティーの組み方ってのは聞いた事は？」
「さあ？　賞金の山分けで揉めそうだな。くらいしか」
「教えよう。バックアップに頼るんだよ」

†

　ヘリで数時間くらい寝ていただろうか。
　一面の海上の中に、割れ目があった。
　それは巨大な穴として、滝壺のように水が下へと流れていた。
　まるで、中世の頃に、人間がイメージした地球の端のような光景。
　ヘリはゆっくりとその滝壺の中へと降下していった。
　それから、更に一時間程、経過した頃だろうか。
　オレが連れてこられた場所は、島だった。
　空を見れば、燦々と太陽が照り付けられている。
　そこは、高級リゾートのような場所だった。
　その島の中に、大きな砦が建てられている。
　ヘリは、砦の付近にある飛行場に降り立った。
　そこには、スーツ姿の一人の男が待ち受けていた。
　高そうな香水の匂いを放っている。オレの嫌いなタイプの匂いだ。
　オールバックにした頭髪も整髪料の匂いを撒き散らしていた。
　男の名はリレイズと云うみたいだった。
　彼はオレ達三人を、砦の中へと案内した。
　巨大な門が開かれる。
　全身パワードスーツを着込んだ、機関銃を持った最新装備の男達がオレ達に敬礼する。
　門の中へと入ると、庭園が広がっていた。
「なあ、ウォーター。此処は一体……」
「ああ、云ってなかったっけ。そう、此処は」
　まるで天国の光景そのままのイメージが広がっている。
　並べられたギリシア彫刻。おそらく模造品だろうが有名な画家の絵画。

噴水が置かれ、動物の剥製なども置かれている。
オレ達はＶＩＰルームらしき場所へと案内された。
そこには、二人の男女が既にソファーに座っていた。
巨大なテレビ。透明な鉱石のテーブル。何かの動物の絨毯。小型冷蔵庫も置かれている。
大きな窓があり、そこからは海と砂浜が見えた。テーブルの上には、既にワイングラスとドリンクが置かれていた。部屋の中ではジャズ・ミュージックが流れていた。
悪趣味だな。とオレは素直な感想を述べた。
君らしいな、とケルベロスは苦笑した。
「庭園の様相だが、オレだったらもっとこだわりを入れて作り込むな。庭園を見せて貰ったが、アール・ヌーヴォー芸術もミッシャも無い。オマケに、此処で流れている音楽が気に入らない。モーツァルトを流すべきだ。此処を作った奴はセンスがよほど悪いらしい」
「仕方が無いさ。此処には色々な人種が来る。なるべく凡庸な状態にしておく必要があるんだ」
ケルベロスはそう云った。
「なっ？　相変わらず、コイツ、変だろ？」
とウォーター・ハウスは云った。何が変なのかまるで理解出来なかった。
オレ達もそれぞれソファーに座る。ケルベロスも何だか落ち着かなそうに、腰掛けた。
「いつもは、立ち仕事をやっているから性に合わないな」
「いつも？」
「ああ。俺は、いつもはボディー・ガードをしている。要人の隣でずっと立ちっぱなしだからな」
彼らはそれぞれグラスに手を掛けた。
ウォーター・ハウスはスコッチか、と舌打ちしてグラスを置く。
ケルベロスは冷蔵庫を開く。ビール瓶とストレート・ティーがある。と告げた。
オレとケルベロスはストレート・ティーを口にする。
誰も酒に手を付ける者はいなかった。
先に部屋の中に入っていた男女は、オレが云うのも何だがそれぞれ奇抜な服装をしていた。
男の方は、透き通るような青い髪の美青年でマントを羽織って、薄緑色の薄着を身に付けている。傍らには竪琴が置かれていた。彼はソファーに横になるように眠りこけている。
女の方は、汚れたアスファルトのような灰色のドレスに、漆黒の黒髪を腰元まで伸ばしていた。何よりも、何処か陰気な雰囲気を漂わせている。両手の爪にも、灰色のマニュキアを塗っていた。胸元には絞首刑にされた人間を象ったペンダントを付けている。彼女は黙々と入ってきたオレ達に眼もくれず、手にしていた外国語で書かれたハードカバーの本を読んでいる。
オレ達も人の事は云えない。ウォーターは、全身包帯だらけで、包帯の上からＴーシャツとズボンを穿いている。顔の下半分にも包帯が巻かれていた。ケルベロスは黒い上着を脱ぐ。すると、黒いＴシャツの上から、隆起した筋肉が浮き上がっていた。
オレはオレで、相変わらず白と黒の全身ゴシック・ロリィタの服装だった。ブランドはイノセント・ワールドを着ている。パニエとドロワーズによって膨らんだ足元。胸には十字架のネック

レス。髪の毛は金髪に近いオレンジで、頭には小粒のクリスタルをあしらったヘッド・ドレスを身に付けていた。
……オレが一番、奇抜だ。女ならまだしも、オレは男だし。
当然のように、誰もオレの服装を気にする者はいない。
しばらく、三十分近く待機する羽目になった。
オレはその間、待っている間、飽きてきたので灰色のドレスの女に話しかける。
彼女は、ドイツ語で書かれたブロンテの嵐が丘を読んでいるらしかった。
彼女はオレに訊ねた。服は原宿で買ったのか？　とそれとも、『裏・原宿』で買ったのかと。オレは原宿で買った後、裏・原宿で魔力コーティングして貰ったと答えた。
彼女の名はルサールカと云うらしい。
ずっとソファーで寝ている男はミューズと云うのだそうだ。ちなみに彼女は昔、エミリー・テンプル・キュートが好きだったと答えた。
今はアリス・アウアアをよく着ると云う。
しばらく彼女とだらだらと話していると、部屋の中に一人の男が入ってきた。
彼は先ほどのリレイズのように、高級そうなスーツを纏っていた。髪は白髪交じりで、黒眼鏡を掛けていた。背は高く、体格はかなりいい。
「わたしの名前はチェラブと云います。お初の方もいらっしゃいますようなので、申し上げます。此処の能力者専用刑務所ネオ・アーカム・アサイラムの副所長をしております」
彼はファイルをテーブルの上に置いた。
そして、オレ達に礼をした後、部屋を出て行った。
そう、此処はどうやら刑務所の中らしかった。それも能力者専用の。
オレ達は、云わば警察みたいな仕事をしなければならないらしい。
ファイルの中には、数枚の写真が入っていた。
この写真に写っている人物を、此処にいる五人で協力して捕獲らしい。
写真はそれぞれ、ランクが振られていて、ＡとＢの賞金首の名前が記されていた。
オレはこの誘いに満足している。フレイム・タンの情報は皆無だったので、こういう仕事をしていければ、情報の片鱗くらいは見つかるかもしれない。
ターゲットの一人を見ると、マフィア組織のボスのようだった。
オレはその写真に釘付けになる。
ウォーターがさっそく、オレに話を振る。
「写真を見た処、Ａランクは三名。そのうちの一人がコイツ、ベスティアリーか。そうだな、まずこいつから倒しに行くか。『ＺＯＯ』という組織のボスだ。構成メンバーは二千名、準構成メンバーは街中の住民も含まれていると云われる。所長はついにコイツを塀の中に入れる事に踏み切ったらしい。巨大組織の殲滅だから、此処にいる全員で倒しに掛からないと大変かも」
「側近の写真に入っているのか？」
ケルベロスは聞く。
「ああ。……ベスティアリーは何でも、名うての殺し屋などを最近、雇っているらしい。ボテ

ィス。マルファス。プルソン。……。いずれもＢランク指定されている。今回はゲストが凄い。特に、プルソン辺りは虐殺者なのは分かるが、能力がまだ解明されていない。所長め。俺達ドーンを試していやがるんじゃないのか？」
「かもしれないわね」
　ルサールカは云った。
「此処にいるメンバーって。そこの新入り君は分からないけれど。ドーンの上位実力者ばかりじゃない。ウォーター・ハウス、貴方にしろ。ケルベロスにしろ。そこで未だに寝ているミューズにしろ。私にしたってね。そうだ、レッドラムは呼ばれなかったの？」
「生け捕りにしたいんじゃないか？　所長の事だから」
　ケルベロスが云った。
「俺は此処、アサイラムのボディー・ガードをしていた事もあるが、所長は此処の刑務所に入れる為に、ドーンの生け捕り制ってのを推奨している。ドーンの歴史は長いが、能力者を入れられる刑務所を作れたのは此処の所長くらいのものだろう。ドーン以外にも、歴史を調べてみれば、能力者を刑務所に入れる事はしばしばあったが、大抵、失敗している。歴史上、強力な能力者専門の刑務所の作成もしばしば行われていたらしいが、ここを除いて全部、破壊されている。それもすぐにだ。能力者を縛り付ける事が出来ないんだ。だから、いつも戦って殺していた。此処、アサイラムは作られて数十年くらいしか経っていないが、かなりの能力者を収容出来たし。かなりの能力者を矯正出来たと聞いている」
「生け捕り制か」
　オレは口を挟んだ。
「確か、賞金総額が落ちるんじゃなかったっけ？　賞金を掛けているのは大抵、民間人や色々な組織の連中だから、どうしても生きていて貰っては困るっていう人間が多いから。単純に犯罪者がこの世にいないってだけで、心から救われる人間がいるみたいだし」
「今回は署長が補って支払ってくれるそうだ」
　ネオ・アーカム・アサイラムの署長に会いに行く事になった。
　副署長、アンブロシーと直接会う事は出来なかった。
　音声のみの会話だった。
　どうやら、病に侵されている為、人前に触れる事を止めているそうだ。
　彼から、任務に関して聞かされた。
　アサイラムには、賞金首の中でも、署長や副署長が目に付いて、指定した者だけ収容する事になっている。実際、ドーンにランクインされている賞金首の数を数えていくと、とてもじゃないが、一つや二つの施設に収まりきれる人数じゃない。
　つまり、犯罪者としても特別扱いのＶＩＰだけが、アサイラムに収容される権利を有している。表向きは、施設の建設、完備の不足、いずれは全ての賞金首を収容出来るような広さにする予定らしいが、どうなのだろう。
　そして、数時間後、早速、オレは、最初の任務に付く事になった。
　……。

　裏・新宿の次元から、北東の海を約７キロ離れた場所に浮かんだ島。
　そこは、武器貿易組織『ＺＯＯ』の中枢部だった。
　此処は、人口２万名程だが、その大半はＺＯＯの構成員か準構成員であると云ってもよかった。
　スラム街はなく、街の住民全体が一つの共同体を形成しており、貿易業によって、生計を成り立たせていた。貿易の内容は、表向きは、この島で収穫される魚介類や香辛料であるが、実態としてはＺＯＯという組織によって、作られた武器が市場によって取引に使われていた。
　ネオ・アサイラムの監獄所長は、此の組織を総べる武器商人であるベスティアリーの拘束に踏み切ったとの事だった。
　賞金は懸けられていたが、巨大組織のボスとしての地位が存在している以上、中々、他のハンター達も討伐に踏み切れない相手だ。マフィアと云っても、大都会においてドラッグの密売や売春組織の結成など、分かりやすい悪を行っているわけではなく、地域の住民と密接に関わりあいながら、住民同士を共犯として、組織を成り立たせている為に、リストに入れられていない住民との対立及び殺害は、そのままハンター自身が賞金首対象として入れられかねないリスクを伴っているからだった。
　裏・新宿にて、多大な影響と権限を持つネオ・アサイラムの所長は、ドーンにも強い影響力を持っている為、多少の市民の殺害を許可して、ベスティアリーと彼の幹部その組織の壊滅に踏み切ったのだった。
　リレイズいわく、所長はそれでも市民の殺害は可能な限り避けるべきだと念を入れて忠告しており、仮に市民を虐殺したとしても刑罰対象にはしないが、あくまで君達の良心の元、殺害と市民への暴力は可能な限り、避け。今回のターゲットに関しても、殺害ではなく拘束をつねに念頭に入れて置いて欲しいとの事だった。
　オレ達は、この島を船で上陸する。
　海岸には、綺麗な砂浜が広がり、子供達がボールなどで遊んでいた。
　夜まで、適当に時間を潰して遊んでいよう、とウォーターが云った。
　オレは海辺の売店で売っているピーチ味のカキ氷を食べた。
　ケルベロスはコーラを飲んで、ウォーターはスナック菓子を食べていた。
　三人共、砂浜の子供達を見ている。
　ケルベロスが呟いた。
「オレ達は彼らの生活を守らなければならない。そうだろう？」
　ウォーターは少し考えて、頷く。
「そうだろうな。戦闘狂でも殺人鬼でも無い。俺達は存在しないかもしれない法の番人なのかもなあ。此処にいる住民。今、目に映っている住民の全員を気分次第で皆殺しにする力を俺達は持っている。……もっとも、彼らも実は能力者かもしれないが。彼らが一般市民に擬態した能力者ではなかったとして、普通の市民だとしてだ。俺達は彼らを好きなように蹂躙する事が出来る。

俺は分かっている。俺は人間を殺す事を何とも思っていない事にな。けれども、俺が無闇に人を殺さずに、ドーンという枠に収まっているのは法の力を信じているのと、法の力が怖いからかもしれん」
「そうか。俺は純粋に、人間を信じているんだ。愛を信じている。友情を信じている。平和。善。俺は人間の根底は善だと思っている。おかしいのかもしれない。だから、俺は悪人が赦せないのかもしれなく、アサイラム寄りのハンターをやっているのかもしれない」
「何だ。ケルベロスとフェンリルは似たような考え方の持ち主かもな。フェンリルも俺に言ったぜ。殺人は罪悪だってさ」
　オレは少し考えて云った。
「いや、オレはあの時は皮肉で云ったつもりだ。というよりも自嘲かな。オレは、殺人は肯定されるべきだとも思っている。人が人を殺せる世界は健全なのかもしれない。だからこそ、オレは殺害を拒む。オレは人を殺せない。人を殺せないという十字架を背負って生きるつもりだ。命は価値がある。愛には価値がある。人間には価値があると。でなければ、オレは空虚の中で死んでしまうのだろう。ケルベロスは多分、当たり前のように愛とか善とかを信じているんじゃないのかな？　オレは違うよ」
「その通りだけど、どう違うんだ？」
　ケルベロスは純粋に疑問に感じたみたいだった。
「君は人間を信じているから、非殺や平和を願っている。オレは人間を信じていないから、非殺や愛が大切なのだとでっち上げるしか無いと思っている。云っている内容は、表面的には同じかもしれないけれども、実質、オレ達の人生観は違うんだと思うよ」
　ケルベロスは続けた。
「でも、俺も人を殺す。平和の為にな。たとえば、あそこにいる子供達の笑顔を守りたい。それは純粋な俺の感情から出てくるもんだろうな」
　ケルベロスはマルボロと書かれた箱を取り出して、煙草に火を付ける。
「俺が持つ意思。おそらくはそれは、正義感と呼ばれるものかもしれない。笑ってくれ」
　ウォーター・ハウスはくっくっと笑った。
　オレは笑わなかった。
　ただ、考え込んだ。
　結局の処、この世界において公式な機関など存在しない。故に、最大規模を誇る刑務所であるネオ・アサイラムですらも、ドーンと同じように民間組織のようなものだった。
　法治国家をこの世界は作り出す事が出来ていない。それでも市民の安全を守らなければならない、平和、非暴力を望んでいる者の方が大多数を占めている為、監獄や精神病院、警察機関の存在は作り続けられていった。
　もし、表側の地球や日本ならば、人間単体の持つ腕力、力量、生命力、生存力などに露骨なまでの格差が存在していない為、法治国家を作る事に成功しているのだが、人間が進化の上で、歴史の上で、一部の人間のみに『能力』という得体の知れないパワーを手に入れてしまった事によって、その均衡が完全に崩れ去ってしまった。

能力の事は、魔法、魔術、黒魔術、錬金術、陰陽道、など様々な呼ばれ方をしており、世界、地域によって、その呼び方は異なるが、『能力』とシンプルに名付けられたのが、もっとも定着した。
『能力者』は一般市民から見れば、神、悪魔、魔人、化物、怪物、魔王、そのような呼ばれ方をする事も多い。一般市民からすると、能力者とは人外である外側の存在であり、超人以外の何者でもないからだ。
オレ達能力者は市民社会とどう関わるかによって、その人生が決定されるとも云われている。市民社会に混ざる者、マフィアや傭兵、暗殺者になる者、大量殺人を行う者、世界の規範を覆そうと組織的なテロリストに回る者、擬似的にでも法治国家を存在させようと警察機関のような組織を結成しようとする者。
能力者が能力者としての所以は、おそらくは『人を殺せる』という事なのではなかろうか。人を殺す、という行為は普通の人間ならば、怖しく避けたがるものらしい。戦争という極限状態においてすら、やはり人殺しは難しい。戦場帰りに、ＰＴＳＤを負った兵士の多さ。戦場で人を殺した事により、罪悪感に苦しめられる者。
能力者はヒューマニズムが欠損している者が多い。他者に対する痛みが欠損している者も多い。罪悪感が根底から喪失している者。
まるで、彼らにとって一般市民は捕食の対象でしか無いかのような。
オレは能力者でありながらも、非殺を望んでいる。
それは、オレがオレ自身に決めたルールのようなものなのだろう。
オレは人を殺すのが単純に怖い。
それでも、この世界には殺さなければならない相手がいる。それは分かっている。
オレは殺人そのものを概念化したかのような存在、ブラッド・フォースと交流した。
オレが衝撃だったのは、彼はまるで普通の市民社会に何処にでもいるような感性を多く持っていたという事だろうか。勿論、所々に感情の欠損は多い。喜びや悲しみ、怒りが何処か欠損しているのだと、ブラッドは哀しそうに云った。
それでも、オレが耳に聞いていたブラッド・フォース像とはまるで違っており、まるで機械のように人を殺す事のみによって、存在し続けているのだという印象を持っていたし、実際、ブラッドをそのように思っている人間は他にも数多い。
ブラッドは云う。自分はおそらく、相当、弱い人間ではなかろうかと。
ブラッドの持つ矛盾。人を何とも思えない程、簡単に殺せる。それも大量に。圧倒的に。こちらが一切、傷付く事無く。
それが、酷く悲しいのだと。
ブラッドは能力者が云う意味での強さなんて求めていない。
彼が望んでいるのは、おそらくは当たり前のような友人との交流。
オレはそのように感じた。
けれども、感情の欠損したブラッドは、殺人行為を何とも思っていない。人を殺す事はただ、彼にとっては呼吸する事。食事する事。そのようなものなのだろう。それと同時に、まるで自身

の欠損を埋めるかのような。

†

　ウォーター・ハウス、ケルベロスの二人と一緒にオレは行動する事になった。
　オレ達は、ベスティアリーの館であるカルネイジへの侵入を試みる事になった。
　夜襲だ。この島の住民達は、皆、寝床に付いている。
　ミューズは待機していた。もし、リストに入っている賞金首及びベスティアリーを連れて来る事が出来れば、彼が封じ込める事が出来るらしい。
　それに、万一、島の外部に標的が逃げた場合、ミューズが捕獲するとの事だった。
ルサールカは、カルネイジの別ルートから侵入するらしい。
　カルネイジは六、七つの建造物が融合したような形をしていた。建物の所々に橋があり、建物の所々がくっ付いている。
　情報によれば、内部は迷宮になっていると聞く。
　カルネイジは何らかの研究施設なのだが、その実態はまだ分かっていない。その調査も兼ねての侵入だった。ランキングされた標的を拘束する他、ベスティアリーの研究を潰す。それがオレ達の目的だった。
　オレ達が試みた侵入ルートは空からだった。
　船に積んでいた、黒い塗料を塗られたヘリから、オレ達三名はカルネイジの最上階へと飛び降りた。
　屋上だ。
　おそらくは、此処のビルの何処かにベスティアリーがいる。
　彼を拘束出来ればそれでいいのだが、他にも仲間がいるだろう。ベスティアリーの配下が大きな障害になるかもしれない。
　オレ達が降りた屋上から、屋上のドアを、抉じ開いて中へと侵入した。
　二人にはまだオレの能力は明かしていない為、無駄に手間を掛けて中へと侵入する事にする。
　ちなみに、オレは未だにウォーター・ハウスとケルベロスの能力を聞いていない。彼らも聞かれないと答えないのか、あるいは聞いても答えてくれないかもしれない。
　ドアを開けた先は、まるで建設途中のように鉄骨を組んだだけの螺旋階段になっていた。
　オレ達三名は慎重にそれを降りていった。
　階段は途中から、岐路に分かれていた。
　階段が途中で、二つに分かれている。
　オレ達三名は右の方へと向かった。
　しばらく降りていくと、オレは舌打ちする。
　階段が途中で、途切れており、下一面に暗闇が広がっているのが見えたからだ。
　左だったのだろうか。戻ろうとする。
　ケルベロスは云った。

「下調べによると、カルネイジは迷宮で、部外者を閉じ込めて処刑する事が目的らしい。ビル六つ半はある要塞だが、実質上、使われているのはビル一つ分くらいだそうだ。後は全てフェイクらしいな」
「よくそんな手の込んだ事をやるよなあ」
　ウォーターはぼやく。
「何でも、建造物を自由に変形させる事が出来る能力者がいるらしい」
　さて、どうするか、と三人で首を傾げたところ。
「普通に、飛び降りないか？」
　オレは提案する。
　二人はそれもそうだな、と云った顔をした。どうせ、この面子なら多少の高さなら無傷だ。
　三名とも、階段から暗闇へと向かって跳躍した。
　十数メートル程、落下した頃だろうか。
　地面へと着地した。
　足場を確認すると、絨毯のようにふかふかな足場に当たった。
　しばらく歩く、すると明かりが見えてきた。
　そこは回廊になっていた。
　道が十字路に着き、三つに分かれている。
　少しだけ、地面が傾いているのか正面の先が見えない。
「三人ずつ、別の道を行くか？」
　オレは訊ねた。
「いや、三人固まって行こう」
　ケルベロスは云った。
　そのまま真っ直ぐ行く。すると、行き止まり、左右の通路に別れていた。
　地図のようなものがあればな、とウォーターがぼやいた。
　オレはしばらく考えていた。オレの能力を使えば、簡単に迷宮なんて潜り抜ける事が出来る。今、彼らに自分の能力を明かすべきか否か。
　オレ達は左側の通路に行った。すると、また十字路に突き当たった。
「どうする？　ケルベロス。もしかしたら、この通路自体がトラップの可能性があるぜ」
「かもしれん。侵入者を永久に迷わせる場所になっているのかもな」
「壁でも壊すか？」
「そうだな。壊す壁を選ぶか」
　ケルベロスは壁に触れていった。
「……床を壊して、下の階へ向かった方がいいかもしれん」
「そうだな。頼む」
　ケルベロスは床をこつりこつりと叩いた。
「なるほど。空洞になっている。確かに下にも階がある。ぶち抜くか？」
「そうしてくれ」

　ケルベロスの筋肉が肥大化する。
　彼は勢いよく地面を殴り付けた。
　穿ったコンクリートと鉄骨。
　地面の下にも、同じような通路が続いていた。
　歩いても、歩いても十字路ばかりが続いている。
　オレは溜め息を吐いた。
「二人共、聞いてくれ。本当はチームを組んでいるから、真っ先に協力するべきだったんだけど。オレはお前らがまだ能力を出していない事が嫌でさ。黙っていたんだけれども、このビルはオレの能力で突破する事が出来るぞ」
　二人はオレの方を見て苦笑する。
「なら、早く云えよ」
「すまない。俺達の能力も後で見せる」
　オレは人差し指を立てて、くるくると回す。
「まず、オレは視界に映らない空間が把握出来る。どれくらいの空間を把握出来るかは秘密だが、とにかく把握出来る。此処は地上、２５０メートルくらいで。この階は縦に１３０メートルと横に２２０メートル。上に３メートル４５センチの空間だ。ちなみに、この階に下へと続く階段らしき場所は無い。エレベーターらしき場所も無い。つまり、此処はトラップだな。先ほど螺旋階段から落下してきた場所、そこは何故か、今、天井が作られて塞がっている。何者かが既にオレ達の行動を把握しており、オレ達をこのビルの中で倒そうと考えているようだ」
　二人はそれを聞いて考える。
「敵は何名だ？　今、何処にいるか分かるか？」
「勿論。敵は二人。一人はこの空間を作っている能力者だろう。もう一人もおそらく、能力者、オレ達以外にこのビルの中にいる人間は二人しかいない。現在進行形で、このビル自体が変形していっている。その能力者を倒さなければ、永久に迷わされると思う」
　二人は眉を顰める。
　ウォーター・ハウスが聞いた。
「どうすれば出られる？」
「……敵の方から、どうやらオレ達を始末しに来たらしい」
　オレは振り返った。
　後方の壁だった。
　ずずっ、と何かを引き摺る音が聞こえてきた。
　ウォーターとケルベロスは振り返る。
　十字路の一つから、長い影が伸びている。
　壁の向こうには敵がいるのだろう。
「どうする？」
　オレは二人に訊ねる。
　なら、俺がやろうか？　とウォーターが云った。

彼の言葉が終わる前に、十字路から人が現れた。
大男だった。身長２メートル前後くらいだろうか。禿頭の頭に髭を生やしている。
ワインレッドのスーツを着ていた。肉体はおそらく筋肉質だろう。
「わしの名はボティス。まとめて相手になってやろう」
よく通る声で、男は云った。
ウォーターは面倒臭そうにお前にやるよ、とケルベロスの肩を叩いた。
ケルベロスが高いんでな、と云ってコートを脱いだ。
よく鍛え上げられた筋肉質の身体だった。鋼の刃でも通りそうにない。
ケルベロスは地面を蹴る。
大男に拳の一撃を向けていた。
大男は、数歩後ろへと下がる。
一瞬にして。
大男が現れた十字路の陰から、巨大な蛇が現れて、ケルベロスを丸呑みしてしまった。
蛇はオレ達に目を向ける。
「……。あっけなかったな」
オレは呟いた。
ウォーターは腹を抱えて笑う。
「次は誰が来るかね？」
大男は不敵に笑った。
「蛇風情が、この俺を倒せると思っているのかよ？」
ウォーターはげらげらと笑い転げる。
蛇はオレ達の元へとゆっくりと近付いてくる。
ぴきり、と蛇の額が割れる。
次の瞬間、蛇の顔面が破裂した。
中から、両指から爪を生やしたケルベロスが現れる。
「お笑いだったぞ」とウォーターは云う。
「不意を付かれた」とケルベロスは返した。
ボティスはぽかん、としたような顔をしている。
ケルベロスはボティスへと爪の伸びた拳を向ける。
「次はお前がやるか？」
ケルベロスは大男に歩み寄る。
ボティスは気を取り直して、哄笑した。
「その蛇はわしの能力だ。名前は『ディープ・ドゥーム』。貴公は闘いの最中に余所見し過ぎだぞ？」
舌だ。
顔を破壊された蛇の口から、巨大な舌が現れてケルベロスを締め付けた。
嫌な音が響く。

蛇の舌がバラバラに切断された。
ケルベロスの全身から刃物が生えている。
肩や、腕、胸や腿から、大鎌のような刃物が生えていた。
「ケルベロスは分かりやすい武闘派だ。殴り合いや刺し合い、斬り合いの勝負で右に出る者はいない。レッドラムなど、一部の人間を除いてだけどな」
ウォーターは楽しそうに眺めている。
大男は慌てたのか、走って逃げる。
ケルベロスは追い掛ける。
大男は、十字路の横へ曲がった。ケルベロスもそこへ向かっていく。
そして、すぐに彼は此方側へ戻ってきた。
「行き止まりだ。ボティスも消えていた」
オレとウォーターは顔を見合わせる。
「フェンリル、ボティスが今、何処にいるか分かるか？」
「壁の向こうを殴れよ。まだ此方を伺っているぞ」
「そうか、それは……」
ケルベロスは生えた刃物を更に伸ばしていく。
蛇の死骸が動いた。粉砕された頭部で、ケルベロスを床に叩き付ける。
その際に、刃物が刺さり、盛大に血液が吹き上がっていた。
蛇の傷口が見る見るうちに再生していく。
蛇はケルベロスを押し潰したまま、此方を眺めていた。
また、蛇の頭部が吹っ飛ばされる。ケルベロスが起き上がった。
そして、瞬く間に蛇は再生して、鈍器のようにケルベロスを床に叩き付けた。
蛇は大口を開ける。
「ウォーター。加勢しないのか？」
「仲間の間抜けさを堪能して何が悪い」
「ゴブリンの時といい……お前って……」
蛇の大口から、何かが放たれる。
オレとウォーターはそれをかわした。
オレ達がいた場所には、大穴が開いていた。
どうやら、胃酸か何かを飛ばしたみたいだった。
「あのな、ウォーター」
オレは云う。
ケルベロスが起き上がり、蛇の頭をナマス切りにした。数秒で、蛇の頭部は復活し、ケルベロスの肉体から生えた刃の一部を咥えると、遠方へと放り投げる。
蛇は再び、此方に向いて大口を開ける。
どろっとした、胃酸が滲み出てきた。
「オレ達は敵を舐め過ぎだ！」

胃酸が洪水のように、此方に押し寄せてきた。
オレはウォーターの首に触れると、二階分、上の階へと飛ぶ。
ウォーターはぽかん、とした顔をして頭を掻いた。
数メートル先の床を見ると、ぽつりぽつりと焼け焦げて、孔が開いている。
おそらくは、数階分は溶かし尽くしたのだろう。結構な威力だった。
「フェンリル。お前の能力は」
「そう。瞬間移動だ」
なるほどなあ、とウォーターは頷く。
「意外といないんだよな。空間を飛び越える力を持つ能力者って。超スピードの類は結構、いるけどな。それよりも、なあ、フェンリル。腕は大丈夫か？」
「腕？」
「俺の首を掴んだだろ？　先ほどは助かったが、次からは止めてくれ。お前の命に関わる」
こきこき、と彼は自分の首の関節を鳴らす。
「お前の包帯の下に秘密がありそうだな。でも、オレがいなければ、お前は死んでいたぜ」
ふん、と彼は喉を鳴らす。
「まあ、今の攻撃ごときじゃ、俺は死なないだろうが。俺はな、お前が能力を出すのを待っていたんだ。ずっと気になっていたからな、教えてくれないし」
拗ねたように彼は云う。
「まあ、ボティスはケルベロスに任せて。この迷宮を作っている奴を俺達は倒そう。何処にいるか知っているか？」
「ああ。このビルの地下一階にいる。そこまで飛ぶか？」
「やってくれるか？」
「瞬間移動って云っても。一気に飛び越えられるわけじゃない、数歩地面を歩くみたいに。何回か、着地する必要がある。敵までは四回ってとこかな」
「頼む。ああ、オレの額に触れてくれ。額は無害だ」
オレは彼の額に指先を当てる。
そして、空間を飛び越えて、敵の元へと向かった。
そこは、暗い湿った洞窟のような場所だった。鍾乳石が幾つも生えている。
そこには、全身、黒いローブを纏った小男が立っていた。
彼は後ろを向いている、オレは不意打ちを打つ事にした。
もう隠す必要も無いので、オレは剣を転移させて男の背中に振り翳した。
オレの攻撃に気付いたようで、裂かれたのはローブだけだった。
数歩離れて、よれよれのシャツとズボンを着た老人が現れる。
「ボティスに殺されなかったのか。いつの間に、此処に？　どうやって？」
老人は云う。
「なあ、ウォーター・ハウス。オレも見せた。お前も見せてくれないか？　お前の力を」
「嫌だね」

　ウォーター・ハウスは舌を出して、笑った。
「俺が能力を使ったら、お前も死んじまう」
　何がチームだ、とオレは悪態を付いた。
「どういう能力だよ？」
「皆殺し系だ。俺以外の人間がどかーんって、爆発して死んじまう。もうメチャクチャに強いんだぜ？」
「お前が一人で此処に出向けばよかったんじゃないか。お前みたいなふざけた奴は、過去に何人か見た事がある。たとえば、オレの友人とかだ。だから、オレから先に能力を見せるのが嫌だったんだ。お前の能力を見るまで、見せてやりたくなかったのに」
「いいから、闘え。俺は観戦しておく」
　オレは剣をウォーター・ハウスへと向けた。
　正直、本気でこいつには苛々し始めていた。
「今、此処でチーム決裂するか？　今からお前が標的だ」
「人の一人も殺せない癖に。やれるもんなら、やってみろ」
　完全に本来の敵を無視して、オレ達は一触即発の状態になった。
　敵の方はというと、付き合いきれないといったような顔をしていた。
「ルサールカと云ったな、あの女……」
　ぽつり、と敵が呟いた。
　オレ達はすぐに敵の方へ向く。
　老人は苛立たしげに、此方を見ていた。
「今、『ブレス・チャイルド』のアミィが戦闘中だ。私の名はマルファス、覚えが無いかな？」
　老人は胸ポケットから煙草の箱を取り出すと、火を付ける。
「マルファス？　『マリオネイター』か」
「マリオネイター？」
「ランクＢ。死体損壊者の殺人鬼だな。死体がこう、吊り下がっているんだ。糸も無いのに。全身の関節がぐるぐる捻じ曲がっていて、口から吐き出した腸でぶら下がっているんだよ、天井から」
　マルファスはかっかっと笑った。
「建物も人間も構造は似たようなもんじゃな。骨組みがあって、部分、部分にスペースがある。どちらも操り人形のように、回転させる事が出来るんじゃよ」
　オレは先ほど、切り裂いたローブを見た。
「ウォーター・ハウス。オレは動いている存在を把握して、この建物内の敵の数を把握した……。だから、最初、二人いた。けれども、間違いだった」
　マルファスが纏っていた、ローブの中に確かに何かが蠢いていた。
　ウォーターはマルファスを睨んでいた。
「ベスティアリー以外で、カルネイジの中に能力者は何名いるんだ？　お前とボティスと、ルサールカと戦っているアミィって奴だけか？」

「私はサービス精神が旺盛じゃなあ。教えてやろう。私とボティスとアミィ。それにブエルとプルソンの五名じゃな」
「成る程。予め調べていた調査と同じか。元々、みんなベスティアリーの部下だったのか？」
「私は雇われた。他の者はどうなのか。アミィも有名な殺し屋だった筈じゃったかな」
「アミィ、『ブレス・チャイルド』か。また厄介な相手を」
　そう云いながらも、ウォーターは笑っていた。
　どうやら、有名な賞金首らしい。オレもリストを一通り見たのだがよく覚えていない。
　それよりも、オレは不安げに、剣をローブの方へと投擲する事にした。
　オレの手から剣が消えて。ローブの上に瞬間移動し、そのままローブへと突き刺さる。
　ウォーターはオレのその行為を訝しげに見た。
「何かいるのか？」
「いる。何か妙な物に刺さった。オレは何か知らないが、アレを触りたくない」
「そうか、なら俺がやろう」
　オレはマルファスの方を見据える。
　ウォーターがローブを捲る。
　彼は顔を苦痛に歪ませた。
　ローブの中からは、植物の蔓が生え出て、ウォーターの手首に根を張っていた。
「ああ、プルソンが種を仕込んでいたんじゃよ」
　マルファスがしてやったり、といった顔をする。
　オレは剣をマルファスの胸元へと飛ばした。
　マルファスはオレの攻撃をあっさりと避ける。
　ウォーターは手首に張った根を引き千切り、投げ捨てる。
　ウォーターは呻き声を上げた。どうやら、根がもう片方の手にも根付いてしまったらしい。地面へと投げ捨てた根っこは、土を掘り進んで見る見るうちに巨大化していく。それは、樹木へと成長していった。
　それと同時に、ウォーターは膝を付く。
　見ると、彼の肉体中に根が浸食していっているらしい。
「ふざけやがって、赦せん」
　ウォーターの目付きが変わる。
　先ほどまで、へらへらと人を小馬鹿にするような雰囲気から、殺意剥き出しの人殺しのような眼へと変わる。
　彼の全身に張った根は、いつの間にか消えていた。
「今すぐ殺してやる。てめぇら、生かして返さない。ベスティアリー諸共、もう殺してくれって哀願するまで弄んで殺してやる」
　完璧に元々の目的を忘れてウォーター・ハウスは怒り狂っていた。
「今のは痛かったぞ。虫ケラが」
　完全なまでに漫画の悪人のような台詞を放って、ウォーター・ハウスはマルファスの前へと

向かっていく。
「いいのか？　私よりもよっぽど、強敵が近くにいるぞ？」
　樹木が更に巨大化していた。樹の幹の所々が顔の形になり、枝が刃状に変わっていく。
　ウォーター・ハウスは右手の包帯を解いていった。
　毒々しいまでの、甲殻が現れる。彼の包帯で隠された部分は人間の皮膚をしていなかった。
「マルファス……。プルソンやアミィにも伝えておけ。俺の名はウォーター・ハウス。そう、暴君ウォーター・ハウスだ。能力の名は『エリクサー』。本来ならアサイラムの地獄に封印されている筈の犯罪者だ」
　プルソンの樹木がウォーターを襲った。彼はそれを難なく避けて、樹木に掴み掛かる。
　触れられた樹木は、枯れ始めて、そのまま崩れていった。
「マルファス。てめえは只で殺さない」
　マリオネイター、マルファスはいつの間にか両手にナイフを持っていた。彼はウォーターへと突進していく。
　ウォーターは左手の包帯も解いた。彼の左腕は右腕とは別の甲殻をしていた。
　彼はマルファスの首に、左手で触れる。
　そして、ナイフを避けて、マルファスから離れた。
「なんじゃ？　私を撫でただけじゃないか？」
　そういった瞬間。
　マルファスは口から、嘔吐して地面に膝を付く。
　顔色が酷かった。全身が痙攣しながら、口から胃液を吐き出している。
「お前は……」
　ウォーターは老人の腹の部分を勢いよく蹴り飛ばした。
「俺はなあ。お前らよりも犯罪者の先輩なんだよ。マルファス。てめえの賞金よりも、俺に掛けられた値の方が上だったんだよ。俺はハーデスのカスにやられる前は、てめえらなんざ足元にも及ばない魔人でなあぁ。配下だって何人もいた。Aになれなかったのが今でも不満なんだよ。当時のドーンの奴らもコケにしやがって。ブラッド・フォースが全盛期だった頃のドーン……、俺をそれなりの悪人にしやがって。俺はベスティアリーが気に入らない。奴は俺に比べれば、只の屑だ。マルファス、てめえは何人殺した？　百名か？　千名か？　俺は国家を叩き潰した事がある。てめえらなんざとハナっから、ランクが違うんだよ。屑が」
　ウォーターは喋りながら、何度も彼を蹴り続けた。彼の眼には深い憎悪が宿っていた。
　気が済んだのか、ウォーターは右手の指を鳴らす。
「すぐには殺さん。取り敢えず、他の連中の居所やら能力やらを吐いて貰おうか」
　殺さずに拘束するのが目的だぞ、とオレは云おうとしたが、彼はオレの言葉に耳を貸してくれそうになかった。
　マルファスの指がウォーターの足元に触れる。
　ウォーターの全身が、異様な形に捻じ曲がった。
　彼は悲鳴を上げて、マルファスの元から離れる。

「ぐぐっ、……この痛みは……。全身の骨が折れているのか？　胸元が灼熱している。腕と足も巧く動かない……てめえ、……」
　ウォーターは捻じ曲がった腕と足を、異様な音を立てて戻す。
　マルファスは立ち上がって、懐から沢山の種を取り出した。
　そして、それを地面に放り投げていく。
　種から根が出て、それは見る見るうちに怪物へと変わっていく。
「フェンリル。お前、どっかに飛べ。俺なら平気だ。自己再生能力がある。それよりも、今から“腹”を解放する。さっき云っていた虐殺タイプの技だ。これで国を滅ぼした。俺の能力は“毒”だ。右手は壊死。左手は嘔吐、眩暈、頭痛を引き起こす。腹はガスを出す。包帯には封印のアミュレット・コーティングが施されている。俺にだって自分自身の能力のコントロールは出来ない。此処にいる俺以外の全員が死ぬ」
　そういいながら、彼は腹の包帯に手をやった。
　オレはすぐに、空間を移動した。

†

　洞窟の向こう側が、別のビルへと繋がっていた事には気付いていた。
　暗い通路の中だ。洞窟ではなく、コンクリートの壁と地面に変わっている。
　やろうと思えば、ベスティアリーの場所へはすぐに辿り着けるだろう。
　只、オレ一人ではベスティアリーを倒せるかどうかが分からなかった。
　敵の能力がまるで分からない。
　ウォーターやケルベロス達も、彼の能力は知らなかったし、リストにもベスティアリーの能力は記されていなかった。
　ウォーター達の戦いが終わるまで待つ。それが結論だった。
　オレは能力を使って、カルネイジ中の空間を探る。
　カルネイジには、数十名、数百名くらい、動く者が存在していた。
　彼らは能力者ではないのだろうか。マルファスいわく、ベスティアリーを除く能力者はマルファス自身を含めて五名しかいないらしい。
　しかし、この迷路状のビルの中には、得体の知れない相手が何名も存在しているみたいだった。数メートルの大男もいる……。ひょっとすると、怪物の類かもしれない。
　まず、ケルベロスと合流する事を考えた。
　ケルベロスはボティスという男に苦戦しているみたいだった。
　彼は先ほどの場所で戦闘を繰り広げているみたいだった。
　先ほどの蛇が、何があったのか更に巨大化している。ケルベロスは続けて、蛇を切り伏せているみたいだった。
　オレはケルベロスの場所へ飛ぶ事を考える。一度では距離が足りない。それから、下手に戦闘の中に突っ込んでいくと邪魔になる。沈静化を待つ事にする。

ふと。
背後に気配を感じた。
小さな気配だ。
それは赤い光を放っていた。すぐに、その光は遠のいていく。
そして。
何者かが此方に近付いてくるのが分かった。
監視カメラか何かに見られたのだろうか。
とにかく、オレの存在は敵に伝わっている。
オレは敵を迎え撃つ事に決めた。
ゆっくりと鼓動が近付いてくる。心臓が脈打つ音だ。
足音。静かに床を移動している。
オレは両手に、剣を召喚した。
暗闇の中から、一人の男が現れる。
青年だった。オレと同じくらいの年齢だろうか。
前髪が目元を覆っている。だぼだぼのセーターを着ており、手には大きなクマのヌイグルミを抱えていた。
「君達の仲間なんだろう？　彼女は。プルソンと交代した。僕の能力がすぐに見抜かれるなんてね。とってもやっかいだったよ」
「お前は？　……」
気のせいか、ヌイグルミが話しかけてきているような感覚。
「僕はブレス・チャイルドのアミィ。この子の名前はオブジュ。君は誰？」
「オレの名は。フェンリル。よろしくアミィ、オブジュ」
アミィは嬉しそうな顔をしていた。
「マロニーが君とお友達になりたいんだって。マロニーとお話しない？」
なんだか、幼い印象が強いが、とてつもなく不気味だった。
腹話術かと思ったが、話しているのはヌイグルミだろうか。そのようにも見える。
「ひょっとして……、ヌイグルミのお前がアミィで。そっちの男がオブジュ……？」
「そうだよ」
ヌイグルミは哂っている。男の口を通して、ヌイグルミが此方に語り掛けているのだ。
「オブジュはとっても内気だからね。僕を通してしか話せないんだ。それよりも、ほら、マロニーが君に話しているよ。マロニーを無視しちゃ可哀相だよ」
「マロニー……？」
オレとアミィ達の距離は３メートル以上、離れている。
何かが動いた形跡は無い。
肩に何かが触れていた。
それは、オレの首に息を吹き掛けている。
オレはそれを、剣で傷付けないように、ゆっくりと叩き落とす。

　それは、首の無い人形だった。
　掌に収まるくらいの小さな人形が、地面に落ちている。
　エプロン姿の少女の身体をしていた。
　今までの経験から分かる、この人形はかなりヤバイ。……。
「マロニーが君の事、気に入ったみたい。君はとっても綺麗だからだって。髪の毛が綺麗だし、顔も可愛いね。僕は最初、君が本当に女の子だと思ってたんだよ。マロニーもだって」
「なんで人形に頭が無い？　こいつは何なんだ？　いつから、オレの肩にいた？」
「そうそう、グリックも君の事が気に入ったんだってさ」
　足首に異物感。
　足元を見ると、腹から綿が出て、顔半分を切り裂かれた小鳥のヌイグルミがオレの左足にもたれ掛かっていた。オレは気持ち悪くなって、それを蹴り飛ばす。
「ブレス・チャイルドか。……意味は祝福された子供？　こいつらはいつの間に、オレの傍にいたんだ？」
　気付けば、マロニーが何処かに消えていた。
　オレのフェンリルでは、彼らの動きが掴み取れなかった。
　いつの間にか、人形がいる。やっている事はそれだけだが、気味が悪かった。
　オレは、取り敢えず、アミィを切り裂いてみる事にした。
　クマのヌイグルミに剣撃を入れる。
　ヌイグルミは、頭を裂かれて、青年の手から転げ落ちる。何故だか、人間の肉を抉るような感触を覚えた。
「お前の方も切るぞ？　攻撃を止めろ」
　オレは剣の先を、青年へと向ける。
「人も殺せない癖に」
　どこからか、声が聞こえた。嘲るように哂っている。
　何者かに勢いよく、腹を殴られた。
　オレはのめり込む。
　そして、顎を強く打たれた。頭が割れるように痛くなる。
　そのまま、オレは地面に倒れていた。
　青年は無感動のまま、オレを見下ろしている。
　人形がオレを殴ったのは間違いない。けれども、攻撃がまるで見えなかった。気付けば、クマのヌイグルミもどこかに消えている。
「此処は僕の力が出し切れない。ベスティアリーの処まで辿り着いたら、また遊ぼう？　彼の部屋の前に、僕の部屋があるからさ」
　耳元で何者かに囁かれた。顎のダメージが頭にきているのか、酷くクラクラする。
　オレはこの場から逃げる為、飛ぶ事にした。
　距離は二階上。通路らしき場所がある。
　オレは瞬間移動する。

そして、一息付く事にした。
まだ、攻撃された場所が痛い。腹と顎にダメージが残っている。
静かに、ダメージが回復するのを待つ事にした。
……。
敵に気付かれたみたいだった。
大量の足音が此方に向かっていた。
オレの能力が瞬間移動というのも既にバレているだろう。
オレは覚悟を決めて、全員を切り伏せる事に決めた。
そいつらは、どうやら心臓が動いていない。生きていない人形か、動く死体なのか。
十数秒後、敵は姿を現した。
まず、現れたのは身の丈、３メートル以上の大男だった。
筋肉の付き方が異様だった。腕の太さがオレの両肩よりも太い。その癖、バランスが悪く、足の方は細かった。
オレは試しに、剣をブーメランのように投擲して、大男の腕を切り付けた。
大男は悲鳴を上げる。切った断面図から、血が流れていない。生き物ではないみたいだった。
大男は切られていない、もう片方の腕で殴り掛かってきた。難なく、オレはそいつの頚椎に蹴りを入れる。骨がへし折れる音がした。
大男は地面に倒れる。
他にも、足音は近付いてきた。
また、同じような姿の大男が三名。オレは難なく、そいつらを倒す。
……集まってきている。オレはこのフロアも脱出するかどうか考えた。
ルサールカ辺りと合流するべきだろうか。
そんな事を考えている間にも、敵はやってきた。
今度は、細い極端に痩せた男が二人だった。
オレは剣を振り回す。一人の上半身と下半身を分断した。
もう一人にも切り付ける。
すると、剣を白刃取りされた。
オレはそのまま、蹴りを男の腹に入れる。
男の眼は異様だった。まるで、オレの行動を分析しているような。
オレは、今度は男の頭を狙った。
すると、オレの蹴りを痩せた男は避けた。
そして。
オレの動きを真似て、痩せた男はオレに蹴りを入れてきた。
オレは紙一重でそれをかわす。
そして、痩せた男の足を踏み折った。
男の両足がへし折れて、皮膚からコードのような物が飛び散る。
確かに、今、オレの動きは真似られた。

　オレは剣で、男の首と胴体を切り離す。
　何かが不自然だった。
　気付けば、敵に囲まれていた。
　大男が二人。痩せた男が一人。
　彼らの眼は、オレをじっくりと観察しているようだった。
　オレは彼らと戦わない事を選ぶ。
　すぐに理解した。
　彼らはオレの動きを読み取っている。おそらく、仲間にオレの攻撃の情報を伝える事が出来るのだろう。
　彼らから、離れる事、数百メートル。
　逃げられない事だけはすぐに分かった。何処もオレは監視されている。
　何者かが此方に近付いていた。
　オレは戦闘態勢に入り、そいつを迎え撃つ事にした。
　暗闇の中、ゆっくりと新たな敵は近付いてくる。
　オレは二本の剣を構えた。
　見ると。
　ルサールカだった。
　血に濡れた右腕を押さえながら、壁伝いに歩いてくる。
「ルサールカ……？」
「やっぱり、フェンリルか。ケルベロスは苦戦して、ウォーターはあの技を出したら、しばらく動く事を止める。私は私でこのザマ。一度、みんな合流した方がいいかもしれないわね」
　よく見ると、ルサールカは太腿も鋭く切り裂かれていた。他にも外傷があるかもしれない。
「フェンリル。貴方が戦っていたのは、この施設で作られている強化人間よ。貴方のデータを観察していき、戦うたびに別の個体が強くなっていく」
「成る程、道理で」
「此処は対能力者研究の施設でもあるのよ」
　彼女は意味ありげな事を言った。
「確か、プルソンと戦ってたんじゃ？」
「樹木使いなら、バラバラにしても死なないわ。切断面から、新たな身体が生えてきた。此処にいる能力者は、みんなＢランク以上なのよね。このメンバーなら戦えると思ったのだけども。ウォーター・ハウスもマルファスを殺せなかったみたいよ」
「みんなの戦況が分かるのか？」
「ええ。私の『ギヨティーヌ』なら。貴方の場所も、能力で見つけた。それにしても、貴方達、馬鹿じゃないの？　三人共、心の中で互いに張り合って。三人がまとまっていれば、敵に勝てたんじゃないの？」
　しっかりと、見抜かれていた。
「仲間に能力を教えない。仲間の強さを監察し合っていたからな。そんな事まで、見抜いていた

のか？」
「アサイラムにいた時も、貴方とウォーター・ハウスときたら。お互いを牽制しあって。ケルベロスが一番、マシね」
「男同士の悪い癖なんだよ。相手に負けるようで、癪だからな」
　と言いながら、ふと疑問に思った事を口にする。
「心が読めるのは、能力か？」
「違うわよ。そんなの、貴方達の態度を見れば分かるじゃない」
　本当にじれったそうで、うんざりしたような顔をしていた。
「じゃあ、位置を知る事が出来るのは能力なんだな？　お前のギヨティーヌは、どんな力を持っているんだ？」
「それは、……」
　十数名に囲まれている。
　先ほどの男達だ。大男と痩せた男。その中にオレの足までくらいしかない小男も混ざっていた。ルサールカはオレにウインクする。
　彼女の身体が二つに分かれた。
　彼女は二人いた。
「フェンリル。私は私のドッペル・ゲンガーを作り出す事出来る！」
　ルサールカの半身は、オレの能力で存在を認識する事が出来ないみたいだった。そこに存在している筈なのに、存在していない。
　彼女は自身の幽霊を作り出す能力なのかもしれない。
　彼女の分身は男達に纏わりつく。男達は殴打や蹴りを入れるが、全てそれらは彼女の分身をすり抜けていった。
「ふふっ、私のドッペるゲンガーは、一撃でショック死させかねない攻撃を与えないと、消滅しないわ」
　ドッペル・ゲンガーは、男達の肉体に触れる。
　すると、男達の身体は動きが停止して、そのまま地面に倒れていく。
「……強いな……」
　オレは素直に感嘆した。
「ええ。まあ、プルソン相手は相性が悪かったから逃げてきたけどね」
　あっという間に、全ての奇妙な男達は倒れた。
「どうする、これから？」
「どうせなら、ベスティアリーを拘束しに行きましょう。ベスティアリーを先に倒せば、他の面子に逃げられるかもしれないけど。Ａランクを優先したいわ。それに、外にはミューズも待機しているし」
「そうだな。ベスティアリーが何処にいるか分かるか？」
「分かるわよ。先に私の分身で、カルネイジ中を把握している。だから、そこまで、連れていってくれない？」

　オレはルサールカの肩に触れる。
「分かった。位置を教えてくれ」

†

　ベスティアリーのいる階は、普通のホテルの中のようになっていた。
　空き部屋ばかりだが、中にはベッドとシャワールームが設置されている。
　階の奥に、ベスティアリーがいるのは分かっていた。
　そして、もう一人、動いている人間がいる。
　アミィだ。
　ベスティアリーがいるだろう寝室の隣の部屋。
　アミィらしき人間が確かにいた。
「……やっかいだな」
「……ええ」
　ベスティアリーはオレ達を待ち受けている。
　どんな攻撃を仕掛けてくるか分からないが、間違いなく罠に嵌めようと考えている。
　オレが瞬間移動して、着地した瞬間は無防備だ。
　だから、何か重い一撃を与えてくるかもしれない。
　オレ達は覚悟を決めて、歩いて進む事に決めた。
　ベスティアリーの部屋の前まで来る。
　ドアノブに手をやる。
　何かがおかしい。
　ドアノブが動かない。いや、何か強い力で左手を握られている。
　人間の気配が確かにあった。
「ブレス・チャイルドのアミィ。おそらく彼の能力は……」
　ルサールカは呟く。
　隣の部屋の扉が静かに開いていく。
　強い勢いで、オレは隣の部屋の中へと引きずり込まれていく。
　ルサールカも見えない何かによって、弾き飛ばされていた。
　だぼだぼのセーターの青年がソファーに座って、オレを見つめている。
　この部屋は気味が悪かった。大量のヌイグルミや人形が飾られている。
　……おそらく部屋中にいる。
　オレはいつでもアミィを戦闘不能に出来るように身構えた。
「君達じゃベスティアリーに勝てないよ。蛇使い君も人形作り君も君達よりもずっと強いからね」
　相変わらず、青年は腹話術を使ってヌイグルミに喋らせていた。
「知らんけど。ウォーターはマルファスを追い掛けているみたいだな。ケルベロスは何だあ

れは……？　ビルが半分瓦礫している。いつの間に？　……お前達は相手が悪過ぎる。観念する事だな」
　クスクス、とアミィの哄笑は響く。
「それでも、ベスティアリーには勝てない。彼の力は強大だ」
　絶対的な自信。盲目すら灯るような瞳。
「ベスティアリーに勝てるかどうかは分からないが、お前には勝つつもりでいるぜ」
　オレもまた、自分自身の力に対する自信を持って答えた。
　アミィはクスクスと余りにもおかしそうな顔をしていた。
　彼はヌイグルミの中に詰まれていた絵本を取り出す。
　そして、それを開いた。
「三匹の山羊のがらがらどんっていう本なんだけど。この本は僕の子供の頃からのお気に入りでね。怪物トロルを山羊がばらばらにしちゃうんだ。僕はこの大きな山羊が大好きで」
　彼はぶつぶつを呟く。
「フェンリル、攻撃される！　こいつは幽霊を操れるのよ！　それも無生物の幽霊を！」
「遅いよ……」
　目の前を何かが横切ったような気がした。
　オレの両手に何か重みを感じる。オレはそれを凝視する。
　視覚出来ない。けれども確かな質量を伴って存在している、触った形で分かる。
　俗にパイナップル型と呼ばれるそれ。
　ピンの外れた手榴弾だった。それも大量に両手に絡まっている。
　それはどうやら、オレの頭にも引っ付いているみたいだった。
　手榴弾は炸裂する。
　アミィがせせら笑っている。
　空間移動すれば、手榴弾ごと引っ付いてくる。避けられないタイミング。
　手榴弾は爆発していた。部屋中に破壊音が鳴り響く。
　何故か、部屋にあるものにダメージは無かった。当然、爆発の射程範囲にいたアミィにもダメージは無い。
「へえ、やるじゃない」
　オレもまた、ダメージを食らってなかった。
　そのつもりだったが、両手の骨の何本かは亀裂くらいは入ったかもしれない。指から血が滴り落ちている。
　オレは無傷の顔で、アミィと対峙していた。
「何をしたの？」
「お前も何をした？」
「君が言うなら、僕も言うよ？　それでいいかな？」
「いいだろう」
　オレは他にダメージが無いか調べる。ルサールカが気付けば居ない。

「オレは爆発のエネルギーを瞬間移動させた。ついでに破片もな」
「へえ、そういう事も出来るんだ。中々、強いじゃない。君の能力も」
「お前の能力、ブレス・チャイルドを教えろ」
「うん。僕の祝福された子供達、ブレス・チャイルドは。無機物の幽霊を作り出す事が出来る。君に今、手榴弾の幽霊をプレゼントした。幽霊だから、何度でも爆発させる事が出来る。僕と部屋へのダメージは煉瓦と鉄板の幽霊を出現させて防いだ。爆弾も防御壁も幽霊だから、何度でも出現させて君を攻撃出来るよ？」
「やってみろ。もう一度、同じ事をすれば。今度は爆発のエネルギーをお前の元へと瞬間移動させてやる」
　がしゃがしゃと、彼は何も無い空間から何かを取り出して、口の中へと放り込んでいた。スナック菓子を噛み砕く音のようだ。
「なるほど。じゃあ、これはどうかな？」
　アミィはパントマイムのように、存在していない筈のコップを掴んで、存在していない筈の飲み物を口に入れる。喉が脈動している。
　オレの肩が勢いよく抉られる。
　この衝撃は銃弾だ。
　次は足だった。足の腿の辺りを射抜かれた。
「さて、君のフェンリルは銃弾に反応出来るかな？」
　ぽりぽりと、なおも彼は見えないスナック菓子を食べ続ける。ドリンクも持っているようで、何かを飲んでいる仕草を見せ、喉が動いている。
　オレは有無を言わせず、アミィの隣へと瞬間移動した。
　オレが先ほど、立っていた場所を挟んだ壁に、幾つもの弾丸の痕が現れた。
「危ない、マシンガンの幽霊か」
　オレはアミィの頭部へ勢いよく、踵落としを入れた。
　硬い物に命中して、悲鳴を上げたのはオレの方だった。
「鉄骨の幽霊」
　アミィは余裕の表情を浮かべている。
　……こいつは強い……。攻撃がまるで通らない。
「流石、Ｂランクって処だな？」
「そう？　それはありがとう。でも、君も凄いね。普通は最初の一撃で死んじゃうんだけどなあ」
　アミィは余裕の表情を浮かべている。
　彼はペンギンのヌイグルミと梟のヌイグルミを抱き締めて、それらを撫でていた。
　完全に勝利を確信している顔だ。
　オレの足に何かが触れた音がする。スイッチ音だ。
「地雷の幽霊」
　このままではオレの足が吹っ飛ばされる。

けども。
「爆発物は見切った。……お前の負けだ」
アミィの元へ、爆発のエネルギーを瞬間移動させる。
地雷による爆発は、三分の二くらいがアミィの処へと向かっていた。
彼は焦った顔をしながらも、ノーダメージだった。また何かの幽霊で防御したのだろう。
オレ自身も既に瞬間移動していた。ノーダメージのまま、壁を蹴り上げる。そして、そのエネルギーを飛ばした。
それをアミィの顔へと叩き込む。
「無駄だよ。遅い」
また、彼は何かで防御していた。
瞬間。
アミィの顔面で何かが炸裂する。彼は絶叫した。
オレは床に転げ落ちる。
彼の顔面はぐしゃぐしゃだった。
地雷が爆発して、０・５秒以内の行動だった。
オレは地雷のエネルギーの三分の二をアミィの元へと移動させた後、残り三分の一を部屋の外へと移動させた。その後、再び三分の一のエネルギー、衝撃波となっているエネルギーをアミィの元へと送り付けたのだった。
「……フェンリルの瞬間移動能力の限界だな。……爆弾だったら見切れた。銃弾の乱射だったらキツかったけれども。お前の負けだ。……処で生きていて欲しいんだけど。オレを人殺しにするんじゃないぞ？」
オレは部屋から出る事にする。
部屋の中は、綺麗だった。奥でアミィがうつ伏せに倒れて、顔からは黒煙が噴出している。彼の手からナイフが現れる。
ナイフは近くにあった、ヌイグルミを幾つか切り付けていった。
ヌイグルミの幾つかが首を切られて、腹を裂かれる。
ヌイグルミの死骸。ヌイグルミの死体。
「まさか……」
腹だった。
腹を何者かに切り裂かれる。
早い。剃刀のような攻撃で、銃弾のように向かってきた。
オレは再びアミィの元へと飛んだ。今度は首筋を何かが切り裂いてきた。
オレはアミィの背中へと、止めの打撃を入れる。
空中で見えない何かにガードされる。足が折れそうな程、痛い、鉄骨の幽霊だ。
オレは再び、距離を置く。今度は腕を切り裂かれた。
ヌイグルミの中から、一際、大きいクマのヌイグルミを見つける。
先ほど初見で会った時に、抱き抱えていたヌイグルミだ。

オレはそいつに向かって、勢いよく蹴りを命中させる。
クマのヌイグルミは、綿をいっぱい出して、弾け飛んだ。
「あ、あ、ああああああ、ああああああああっつ、か、彼がいなければ、僕は、ぼ、僕は僕は！　あああっ」
ブレス・チャイルドのアミィは顔を上げる、顔面は重症だった。
そして、彼は再び顔を地面に付けて、それ以来、起き上がらなくなった。
それから、オレへの見えない攻撃も収まった。
オレは今度こそ、部屋を出る。
ダメージは、肩と足に受けた銃の攻撃が酷い、腕、首、腹に裂傷。両手も酷く痛く、剣を握れそうにない。正直、足と手のダメージだけでもう帰りたい。
ルサールカを探す。
壁に文字が書かれていた。即興で書いたのだろう。
ープルソンに見つけられた。戦ってくる。ー
オレはベスティアリーの元へと向かう事にした。
ルサールカは何処かへと消えた。そういえば、先ほどもいきなり現れたような気がしたが。
オレはベスティアリーのいる扉に手を掛ける。
何かがおかしい。右手の指が巧く動かない。
……いや。
手に何かが巻き付いている。それが視認出来ない。
ぷつり。と、腕から血が噴き出していく。
気付くと、背後に壁にもたれながらアミィが立っていた。
顔面はぐちゃぐちゃだ、鼻と口の裂傷が酷い。すぐにでも病院に連れていかなければならない状態だ。それでもなお、アミィは精神力だけでオレに攻撃を与え続けている。
彼は何かを手にしていた。何かを握って、オレに向けているのだが、オレは彼が右手を前に突き出しているだけにしか見えない。彼の手の中には何かがある。
おそらく、拳銃。見えない拳銃を彼は握り締めている。
アミィとオレまでの距離は、数メートル。オレの攻撃は通常届かない。オレの右手は固定されている。
一瞬だった。
オレは思い切り、蹴りを空中に入れる。彼の脇腹に向けて、蹴りのエネルギーを瞬間移動させた。ドアに銃弾の跡が刻まれる。アミィはそのまま仰け反る。攻撃の瞬間移動のエネルギーは見えない為に、見切れずに、何かの幽霊でガードする事が出来なかったみたいだった。あるいは、防御用の幽霊を作り出す精神力は、もう尽きていたのかもしれない。
追撃として、オレは即座に彼の顔面に蹴りのエネルギーを撃ち込んだ。盛大な悲鳴を上げて、彼は地面に倒れ込む。
普段は、直接、蹴ったり斬ったりするのは、自身の攻撃のエネルギーを瞬間移動させると、エネルギーが何割か転移中に消滅してしまうのか、威力が格段に落ちるからだ。しかし、まあ、重

症のアミィを倒すには充分な威力だったようだ。
　オレの右手から、何かが外れて、そのままドアノブが開いた。
　オレはベスティアリーの部屋へと入る。
　部屋の中は明るかった。
　夜景が見える。床には獣の皮を剥いだ絨毯が敷き詰められていた。
　窓の近くにある椅子に腰を下ろして、その男は立っていた。
　写真に写っていた顔と同じだ。
　ベスティアリー。
　高そうなブランドのシャツにネクタイ。スーツ。離れていても匂ってくるキツい香水。
　ヘアクリームで撫で付けた頭。年齢は五十代前半といった処だろうか。白髭を生やしている。
　男は缶ビールをグラスに注いで、部屋に入ってきたオレに興味を示そうともしない。
「……ベスティアリーだな。……？　もう分かっていると思うが、オレはお前の城に侵入して、お前を捕獲しにきた。抵抗しないなら、暴行しないと誓う」
　ベスティアリーはグラスに注いだビールに口を付ける。
　よく見れば、高そうなビールだった。
　部屋の中にはクラシックが流れている。ワーグナーだ。余りオレは好きじゃない。
　彼に攻撃を与えていいのだろうか？　そう考える事が拙いのか？
　ベスティアリーはオレを無視して、まるでシャワーを浴びてきて、寛いでいるかのように自然な体勢をしている。
「オレは見えていないのか？　……無視はオレに対する敵意と受け取る。従って、攻撃させて貰う。何、ちょっと手足の骨をへし折るくらいだ。死にはしない」
　オレは空中に向かって、蹴りを入れる。そして、そのエネルギーをそのまま彼へ向けて飛ばした。
　ベスティアリーは何事も無かったかのように、二本目の缶ビールを開ける。
　何かがおかしい。オレはもう一度、蹴りを入れようとする。しかし、身体が重い。蹴りを入れようと、右足を高く伸ばす。すとん、と地面に尻餅を付いた。
　オレは動転しながら、肉体に起こっている異常を確認する。
　全身が異様な程に重い。何かを背負っているみたいだ。
「『イモータル・ホワイト』と名付けている。私は自身の力の名を」
　ベスティアリーは二本目のビールを注いだグラスに口を付けながら言う。
「重力だな？　全身が重い。お前の能力は重力を操るのか？」
　全身の骨や筋肉が痛み出してきた。どんどん重くなっていく。
「……まあ、そのようなものかな。重力なのかどうかは私にもよく分からないが」
　オレは瞬間移動して、ベスティアリーの隣へと向かう。
　此方も重い。それも先ほどよりもだ。このままだと肉体が潰れていく。
「気付かないのか？　部屋中の空間を圧縮している。私以外のね。だから、君が私を倒そうとするだけ無駄なんだよ」

　見ると、部屋が縮んでいっている。窓ガラスにヒビが入り、絨毯が捲れて萎縮していく。クラシックを流していた蓄音機が音を立てて小さく圧縮されている。
「私のイモータル・ホワイトは物質がゼロになるまで圧縮し、縮小する。幾らでも小さくなるぞ。君もそのまま縮んでいくといい」
　部屋がどんどん狭くなっていく。ベスティアリーだけが平然とビールを喉に流し込んで寛いでいた。
　オレは窓枠へと向かう。
　そして、瞬間移動した。移動速度がいつもより明らかに縮んでいる。オレのエネルギーまで萎んでいる。
　窓枠に手を掛けた。ついに、皮膚が裂け始めた。骨も異様な音を立て始めている。
　窓枠まで来れればいい。
　オレはそのまま、外へと飛ぶ。
　何も無い空だった。
　オレはそのまま、数十メートル上空から地上へと落下していく。
　ベスティアリーの能力が届かない処まで。

第三章　白の怪物

　カルネイジの外までオレは逃走した。
　地面に落下する瞬間、オレは飛んで、体勢を立て直す。
　全身の皮膚や骨が痛かった。オレはもう、闘えないかもしれない。
　カルネイジのビルは相変わらず、巨大だった。
　オレ達が侵入した場所は無残に巨大な破壊の痕が残っている。
　ミューズが外で待機していた。
「おや、フェンリルさん。どうしたんですか？」
「ベスティアリーから逃げてきた。勝ち目が無さそうだったからさ」
「そうですか。よく御無事で。他の皆様は？」
「ルサールカはプルソンと戦闘中。ウォーター・ハウスはマルファスと戦闘中。ケルベロスはボティスと戦闘中。あのビルの一角の破壊痕、あれはケルベロスが戦った後だな」
「そうですね。彼は一番のパワー・タイプですからね」
　ミューズは住民がカルネイジ内の戦闘に気付いてやってきた場合、押し返すのと、もし敵が外に逃走した場合、倒す為に此処で見張りをしている。
　数分くらい経った頃だろうか。
　ビルの中から、一人の男が現れた。
　ウォーター・ハウスだった。
　ズタボロのマルファスを抱えて、ほぼ無傷でやってきた。
　彼はマルファスを此方へ投げ飛ばす。
「ほら、殺さず瀕死のまま連れて帰ったぜ。褒めてくれ」
「ウォーター・ハウスさん、あなた、何度も彼を殺すつもりで攻撃してましたものね」
「こいつの執念には呆れたよ。しかし、よく俺の腹や右手を耐え切ったよな」
　プルソンの種に付けられた傷を彼は弄くる。
　マルファスは顔を何度も殴られ、顎の骨が砕かれて、両瞼が腫れていた。おそらく、両腕はへし折れている。右手の指が全て異様な方向に曲がっていた。足は大腿骨を綺麗に折られているみたいだった。内臓も痛めつけられているだろう、肋骨も何本か砕かれたかもしれない。ウォーターは退屈な戦いだった、としれっとした顔で呟いた。
「おお、フェンリル。何でこんな場所にいるんだ？　誰か倒して連れてきたのか？」
「いや、ベスティアリーに会って。一人で勝てそうに無いんで戻ってきた。お前も一緒に来てくれないか？」
「情け無いな？　ベスティアリーごとき一人で充分だろう」
「なら、一緒に来てくれないか？　簡単に倒せるんだろ？」
「いや、俺は、今日は止めておく。戦線離脱させて貰う何故なら、」
　彼は全身に巻き直した包帯を、とんとんと叩いた。
「昔の俺が戻りそうになった。殺してしまうかもしれない。今度こそ」

　ビルの一角が大きく裂ける。
　中から、両腕から円月刀のように曲がったＴ字型の刃物を生やしたケルベロスと、数十メートル程の頭部へと成長した蛇が現れる。
　ケルベロスは腿の辺りと膝からも刃物を生やす、そして蛇の顔面を落下しながら切り裂いていく。ケルベロスが地面に着地した。
　蛇の頭部は見る見るうちに再生して、以前よりも巨大化していく。
「相性が悪いかもな。あの蛇はおそらく、ダメージを受けるたびに巨大化していくんだろう。操っているボティスを叩かないと駄目だな」
「まあ、腐ってもＢランクと云った処なのだろうな」
「どうする？　一度、撤退するか？　一応、マルファスは倒したし。アミィも戦闘不能に追い込んだ。ルサールカを連れて戻るか？」
「いや、……」
　ウォーター・ハウスは大蛇の元へと向かった。
　そして、右手の包帯の封印を解く。
　バネのように跳ねると、彼は露になった右手を、大蛇の胴に叩き付けた。
　蛇はしゅうぅぅうと泡を吹き出す。
　そして、地面に倒れ込んで痙攣し始める。
「おい、ケルベロス。俺がボティスを片付けようか？」
　ぼろぼろになったケルベロスは肩と腹の傷付いた箇所を撫でながら答えた。
「ああ、……頼む。俺はベスティアリーを倒しに行く……」
「そうしてくれ。俺はボティスを片付ける。ベスティアリーが相手なら、勢い余って殺してしまうかもしれん。俺は実力も伴わないのにＡを名乗る奴には深い恨みがあるからな」
　何となく、ウォーターはやる気が無さそうだった。
　心の底から、この任務が馬鹿馬鹿しいといった態度が滲み出ているみたいだった。
　ウォーターはボティスを探しに行くと言った。
　オレとケルベロスで、ベスティアリーを倒す事になった。
「でも、オレはもう全身が痛い。戦闘不能だよ。ひょっとすると、全身の骨に亀裂が走ってるかもしれない」
　そう言って、オレはベスティアリーの能力を三人に教える。
　ウォーター・ハウスはオレの全身を舐めるように見る。
　そして、肩に手を置く。そして、人差し指をアミィの拳銃で出来た孔に突っ込んだ。
　オレは悲鳴を上げる。
「てぇてめぇ、な、何するんだぁ？」
　オレは思わず、剣をウォーターへと向ける。殺してやろうかと思った。
「まあまあ、見ろよ。肩の傷、治ってやがるぜ？」
　オレは言われて、肩に手を置く。
　血が止まり、傷口が塞がっていた。

「まあ、あと数時間もすれば。傷跡も綺麗に無くなる。他にも傷口があれば言え。全部、治してやるから。それにしても、酷くやられたもんだな。普通は痛みで動けないもんだぜ？」
　ウォーター・ハウスはけらけらと笑う。
「お前は人体の回復も出来るのか？」
「毒と薬は何とやら。俺は人間の人体を修理する事も出来る。神経組織や血管などを弄ってな。骨折もすぐに治せるぜ。特殊な菌を埋め込んで、細胞を修復させるんだ。量を間違えると、肉体が壊死していくけどな。それと流石に、死んだ人間を生き返らせる事は出来ない」
　結局、オレの肉体を次々と修理していった。
　そして、次はケルベロスの肉体に出来た傷を塞いでいく。
「じゃあ行って来い。死体になるまで、俺が面倒見てやる」

†

　再び、ベスティアリーの部屋へと向かった。
　しかし、彼の姿はいない。酷い破壊の後だけが、ベスティアリーのいた部屋に残されていた。
　オレは自身の能力で、空間を探る。しかし、すぐに諦めた。
「ケルベロス。オレの空間把握は集中力がいる。肉体の機能が不全の状態だと、すぐに使えなくなる。先ほど酷いダメージを受けたショックで巧く空間が把握出来ない。……、役に立てなくてすまない」
「いやいい。俺達は、まずはルサールカを探した方がいいかもしれん。何処にいるのか」
「彼女の能力は何なんだ？　すぐに出たり現れたりしたように見えたが」
　少し話し合ったが、ルサールカよりも、まずはベスティアリーを倒す事を考えるべきだ、という結論に達した。
「もし、ベスティアリーがいるのだとすれば、おそらくは此処かもしれんな。どの道、此処は向かわなければならない。カルネイジの秘密がある」
　ケルベロスは簡単に書かれた地図を俺に見せた。
「部分部分では違うかもしれないが、此処で働いていた者から吐かせた簡単な地図だ。といっても、この場所へと続く道が書かれているだけだが。此処にいって、カルネイジで行われている研究を手に入れる。それも任務の中に入っている」
　オレ達二人は、その場所を目指した。
　そこが何なのか、すぐに気付いた。
　工場だ。
　妙な動力炉が唸り声を上げている。
「此処で何の研究を行っているのか教えよう。ベスティアリーは対能力者用の兵器を作り出そうと考えている。アンブロシーはそれが欲しいのだろう。アサイラムの研究に必要だと考えている。アサイラムはベスティアリーのような人材が欲しいんだ。だから、彼を屈服させる必要がある」

「聞いていいか？」
「何だ？」
「オレ達のチームは何をさせられているんだ？　渡された賞金首は何らかの繋がりがあるんだろう？」
「いい事を聞いたな。ベスティアリーは、アサイラムにとって重要な存在の者だ。他にも、これから狩る予定にある『アヌビス』と『デス・ウィング』。彼らもアサイラムにとって、重要な存在なんだ。アンブロシーは言う。この世界の秩序を取り戻す為に必要な事だと。俺達は法の番人をさせられている」
「法の番人か……」
　聞いていない。
　いや、聞いたかもしれないが、ウォーター・ハウスがぽんぽんと勧めていったので、正直、やる気なんて出ない。やるつもりなんて無い。
　だが、今はその問題はどうでもいい。
「あと、ケルベロス。此処、先ほどよりも蒸し暑くないか。何だか呼吸をするのもしんどくなってきたんだけど」
　飲み物が欲しい。喉が渇いてきた。それに、身体中が汗だくだ。
「そうだな。一度、出ようか」
　オレ達二人は、動力炉から出る事にした。
　別の部屋に移動する。温度が戻っていない。もう少し、動力炉から離れる必要がある。
「やはり、暑いな。水は無いのか？」
「我慢しろ」
　ケルベロスもキツそうな顔をしていた。
　オレは口の中に唾を溜めながら、壁に寄り掛かる。
　焦って、オレは壁から身体を離した。
　壁を触った手が水脹れをしている。
　火傷だ。
　気付けば、気温はどんどん上昇している。
「ケルベロス……。討伐しようとしている能力者は後、何名だ？　空間圧縮のベスティアリー。見えない幽霊のアミィ。大蛇を使うボティス。植物使いのプルソン。マルファス。それから、もう一人いなかったか？」
「ブエルか……」
「そいつの能力は何だ？」
「知らない。情報が入っていない」
「なあ、このままだとオレ達、焼け死ぬぞ？」
　ヤバイ。
　気のせいか、床も既に熱くなっている。今、気温は何度くらいなのか？
　オレの能力が瞬間移動でよかった。この部屋は本当に拙い。

　オレはケルベロスの肉体を掴む。そして、数階上へと飛んだ。
　この部屋の温度も熱い。先ほどよりもだ。熱気が空中に浮かんでいる。
　何度も移動して、オレは敵の能力の届いていない涼しい部屋を探した。
　何回か移動するうちに、蒸し風呂のような場所から離れる事が出来た。
　そこに来て、落ち着くと。考え直した。
「倒さないといけないんだ。おそらく、一番、熱い場所に敵がいる。そこに向かわないと」
「マグマの中に突っ込むよりはマシか。行くぞ……」
　オレ達は覚悟を決めて、灼熱の中へと入っていった。
　瞬間移動で、より熱いフロアへと向かう。
　暑さで、通路の所々から煙が上がっていた。
　構わず、オレ達は向かう。どんどん呼吸するのも苦しくなる。
　ドアの金属部分は溶け掛かっていた。
「……そろそろ辛い。どうする？」
「いや、このまま行く」
　ケルベロスは上半身の上着を脱いでいた。恥ずかしいのでオレはやらない。
「なあ、ケルベロス。……少しだけ感覚が戻ってきた。空間把握の能力が使える。敵はこの先、三十メートル程向かうといる。一人だ。けれども、その前にやっかいな相手がいる」
「……？」
「近付いてきている。結構、でかい。何メートルだ？　壁を壊しているのか？」
　オレは思わず、しゃがみ込んだ。暑さで感覚がまたシャットダウンする。
　空間把握の能力が使えない。この能力は精神、体調が悪くなるとすぐ使えなくなるのだ。
　しかし、ある意味でもうそれは必要が無かった。音だけで近付いてくるのが分かる。
　機械音だ。先ほど戦った人型のアンドロイドと近しい足音。しかし、今回はかなり巨大だ。
　前方、五メートル程先の壁が抉れた。
　そいつは巨大だった。
　ノコギリ状のタイヤが生えており、頭がトカゲのような形をしていた。
　化物だ。
「何だ？　こいつ……？」
　拙い。暑さで動きが鈍っている。ケルベロスはオレの前に盾のように立ちはだかった。
「フェンリル、……来るぞ……」
　トカゲの怪物はどうやら、戦闘メカのようだった。
　背中から、何かが飛び出す。ショットガンのようだ。
　撃たれる前に避けるべき、オレはその場を移動した。
　怪物は、実際の自然界にいるトカゲと同じように、滑らかな動きをしている。
「テュポーン・ドレイクと名付けている。対能力者用に作ったクリーチャー型アンドロイドだ。君達はドーンのバウンティ・ハンターだろう？　こいつは、ドーンのハンターに対抗する為に創った奴だよ」

何処から現れたのか。
黒いＴシャツに、白衣を纏った男が立っていた。
熱を帯びている筈の壁に寄り掛かり、平気そうな顔で煙草を吹かしている。
「ちなみに僕の能力の名は『ノース・デザート』。空間の気温を自由に操作する事が出来る。そろそろ、気温は８０度に達する。人間が生きられる温度じゃない。君達が耐えられるわけが無い。此処で死ぬか、逃げるかだ」
付けた黒斑眼鏡がやけに似合う男だ。
「一撃、必殺って程の威力は勿論、無い。けれども、肉体がまるで持たないだろう？　呼吸するのも苦しいんじゃないのか？」
男は、服の中から何かを取り出す。
アイスクリームだった。
彼は、美味しそうにそれを口にする。
「本当に苛立つ奴だ、お前の名は？」
「ブエルだ。よろしく、といっても、君達はあれに殺される予定だけどね」
装甲を纏った怪物、テュポーン・ドレイクは、此方に近付いてくる。
「お前がブエルか。あれは何だ？」
「だから、対能力者用の兵器なんだ。炎、冷気、電撃、カマイタチ、衝撃、斬撃などに強い耐性がある。並みの戦闘タイプの能力者じゃ勝てないよ。試してみるといい」
つまり、能力者に対して解答した結果、創り上げた怪物か。
「俺達は、賞金首だけ倒せばいい。お前とベスティアリーと、残りの能力者を拘束させて貰うぞ」
「そうはいかない」
オレは彼に向かって、蹴りを入れる。
どうやら、ホログラムか何かだったようで、彼の肉体は透き通り、オレは壁を蹴っていた。靴越しだが、壁が物凄い熱を帯びていた。
「フェンリル、何か来るぞ」
ケルベロスの目は険しくなる。
トカゲ型の戦闘マシーンの目から、何かが発射された。
ケルベロスは、肉体から剣を出して、それを叩き落した。激しい爆発が巻き起こる。
「大丈夫か……？」
「ああ、銃弾よりは遅い。あれなら叩き落せる」
一瞬の出来事だった。
ケルベロスの刃が、敵の肉体を斬り付けていた。
嫌な衝撃音が走る。ケルベロスの腕の刃が砕け散っていた。
「まるで効かない……」
戦闘マシーンの背中が開いた。何か尖ったものが、光る。
オレは、それが何かを理解する。

「ケルベロス！　避けろ！」
　オレはケルベロスの背中を蹴った。
　ライフル弾だ。いや、撃たれたら勢いよく人体が弾け飛ぶダムダム弾かもしれない。
　強烈な衝撃音と共に、それは発射されていた。
　何とか、オレ達二人はそれを避ける。
　壁には、大きなクレーターが生まれていた。とても刃や剣で弾き返そうになかった。命中すれば、胴体が吹っ飛ぶだろう。
　オレ達は、切ったり殴ったりして敵を倒すタイプだ。
　このような敵は、それこそ触れただけで消滅させるレッドラム辺りが戦っていればいい。
　対能力者用の兵器というのも、あながち嘘ではないみたいだった。
　確かに、こいつを倒せる能力者は限られてきそうだ。
「俺が戦う。先ほどの蛇よりはよほどやりやすい」
　彼の能力は、自身の肉体から刃を生やす事だ。どうやって勝つつもりなのだろうか。
「俺の能力の本質を教えてやる」
　彼は全身に生えていた刃物を仕舞っていた。
　ケルベロスは、跳躍すると、怪物の装甲に触れた。
　すると、ぐしゃり、といった音がして。怪物の装甲が変形していく。前足がぐしゃぐしゃと変形していき、関節部分が露出し、装甲の隙間から刃物が生えてくる。
「俺の能力『アケローン』は、骨格のある物の骨格を刃状に変形させる能力だ。肉体から、刃を生やすのはその派生に過ぎない。装甲がどんなに硬かろうが、俺の能力から逃れる事は出来ない」
　ぐしゃぐしゃと、大トカゲの全身が捻じ曲がっていく。
　しかし。
　ケルベロスの手が焼け爛れていく。彼は咄嗟に距離を離す。
　怪物の全身が熱を帯びている。所々から火花が噴出していた。
　怪物は口を開いた。何かが飛んでくる。
　オレはケルベロスに身体に触れると、怪物の背後へと回った。
　怪物の口から放たれたものは、どうやらグレネード弾だったらしく、オレ達がいた場所は爆破炎上した。熱風で更に温度が上昇していく。
　まるで埒が明かない。
「ケルベロス。オレが指示する場所まで向かえるか？」
　オレはケルベロスの身体に触れる。
　そして、オレはケルベロスを連れて、瞬間移動した。
　敵はオレ達を追ってきている。カルネイジ中を這っている蜘蛛型の機械が、オレ達の位置を把握しているみたいだった。
　オレの能力は、レーダーのように敵の居場所を察知する事が出来る。
　空間を手に取るように、構造を分析する。

頭の中で、形が浮かび上がってきた。
そこは、大量のカプセルが設置されていた。中には、様々な形をしたアンドロイドが入れられている。
中央のコンピューター・ルームに、ブエルとベスティアリーが佇んでいた。
オレとケルベロスは、瞬間移動で、二人の元へと向かう。
「先ほどは遅れを取ったけれど、再び、お前を始末しに来たぜ」
ベスティアリーは面倒臭そうな顔をしていた。
首の骨を、ぽきりぽきりと鳴らす。
「ふうむ」
振動音が響く。
部屋の中に、オレ達を追ってきたのか、先ほどの大トカゲが侵入してきた。
そして、無尽蔵にレーザーを地面へと照射し始めていた。肉体が変形して、動力炉が壊れているのだろう。見境が無く、設置されているカプセルが破壊されて、中に入っていたアンドロイドが次々に残骸になっていく。
ベスティアリーとブエルは、不快そうな顔をしていた。
テュポーン・ドレイクの装甲が縮んでいく。
ぐしゃりっと、小さなボールへと形を変えていく。
「駄目だな。ブエル。新作の戦闘兵器は失敗だ。私のイモータル・ホワイトの能力で、簡単に破壊出来てしまう」
「ですね。まだまだ改良の余地がある。しかし、ボスのような世界の法則自体を捻じ曲げる能力者にレスポンス出来る科学なんてありません、それに、元々はあの筋肉質の男の能力で、コンピュータ回路を破壊された為に、暴走してしまった。対能力者には、まだまだ私達の科学は通じそうにない」
「そうか、やはり能力者は神に近しい存在なのかもな」
「かもしれませんね……」
培養液の音がする。
沢山、人工的に機械生命体が作られていた。
先ほど、戦った人型の奴らも、培養液の中に入っている。
「二対一か。さっきのトカゲよりは遥かにやりやすい」
ケルベロスは、ベスティアリーとブエルの前へと向かった。
「援護しようか？」
「いや、一人でいい」
ケルベロスは、両方から生やしているＬ字型の刃物をベスティアリーへと向ける。
そして。
ケルベロスは、瞬時に切り付けるフリをして、ベスティアリーの鳩尾を蹴り上げる。
ベスティアリーの肉体が、吹き飛んだかと思うと、どうやら彼は自身の存在している空間を圧縮して、攻撃を避けたみたいだった。

　なおも、ケルベロスが連撃を続ける。ケルベロスの腕から、足から、ナイフが生え出て、ベスティアリーに猛攻を繰り広げていた。
　オレの前には、ノース・デザートのブエルが立っていた。
　気温が高くなっていく。先ほどよりもそれは早い。
　オレは両手にツイン・ソードを召喚する。
「まず、貴方の周辺の気温を上げますか」
　オレは鼻で笑った。
「お前の能力じゃ、近距離の敵には勝てないぜ？」
　オレはブエルに剣の一本を突き付ける。
「これはこれは。何かを勘違いしていらっしゃるようで。僕の能力を舐め過ぎだ」
　立ち眩みがしてきた。早めに倒す事に決める。四十度、五十度、いや、大気が蜃気楼で歪んでいる。早めに倒してしまった方がいい。
　オレはツイン・ソードを振るった。
　ブエルの胸元に命中する。
　しかし。
　攻撃が当たっていない。
　オレは地面に膝を付いていた。酷い眩暈に襲われている。気分が悪い。
　そういえば、視力の方も何だか覚束ない。目の前が霞がかっている。
「脳が誤作動を起こしているんですよ。このまま温度を上げていけば、貴方は焼け死にますが。その前に、脳が正常な判断力を失う。まず、暑さで視力がおかしくなる。聴力も。立っているだけで気分が悪いでしょう？　眩暈もしてくる」
　オレは地面に手を置いた。熱さで、掌が焼ける。
　オレは、ブエルの顔面に蹴りを入れた。
　足に衝撃が走る。電流のようなものだ。
　見ると、ブエルの手にはスタンガンが握られていた。
　オレはそのまま昏倒して、地面に倒れて、熱で思わず小さな悲鳴を上げる。
「僕の能力。弱いと思われますよ。確かにそうだ。だから、敵は油断する。でも、仲間の補助には向いているし。それに。……」
　オレはブエルの手から、スタンガンを弾き落としていた。
　そして、もう一度、彼の胸元に飛び蹴りを入れる。
　足に鋭い痛みが走った。
　彼は白衣を広げて、胸元を見せる。
　彼の胸、腹には、刃物の付いた防弾チョッキが仕込まれていた。
「攻撃してこればいいんですよ。頭でも首でも、やってみればわかりますよ」
　オレは彼の顔に、剣を振るった。
　金属音がして、剣が弾け飛ぶ。
　彼の皮膚が切れて、中から鉄の皮膚が現れた。

「顔にマスクを被っています。防御はしっかり考えてますよ。僕は能力は補助だと考えています」
　彼は拳銃を握っていた。大型のマグナムだ。弾丸を浴びれば、脚がまるごと吹き飛ぶかもしれない。
　全身が酷く重い。酷暑の余り、肉体がどうにかなってしまいそうだ。
　オレは何も無い場所に回し蹴りを入れた。
　そのエネルギーを瞬間移動させて、ブエルの肉体へと命中させようと試みる。
　ブエルは、一瞬、よろめいたが、気を取り直して、銃口を此方へと向け直す。
　駄目だ。攻撃のエネルギーの瞬間移動では威力が足りない。加えて、彼は装甲を身に付けている。それに、正確に命中しなかったのだろう。
「撃てるものなら、撃ってみろよ……」
　オレはそれだけ告げた。
　オレは彼に見えないように、あるものを握り締める。
「では、遠慮なく」
　オレは握り締めたスタンガンを、ブエルの持つ拳銃の銃口へと瞬間移動させた。
　スパーク。
　拳銃が弾き飛んで、ブエルは手首を押さえた。
　オレは彼の脳天へと、勢いよく蹴りを入れる。
　彼は昏倒しながら、もう一本、拳銃を取り出して、オレの額に向ける。オレは額を押し当てた。発射音。既に、中に詰まった火薬と弾丸は消し飛ばしていた。オレは彼の顔面に肘鉄を入れる。ブエルは殴られながらも、もう一本、拳銃を取り出す、オレは彼の手から拳銃を瞬間移動させた。もう一撃、頭に入れる。
　少しずつ、温度が常温へと戻っていく。彼はどうやら失神したみたいだった。顔のマスクが取れて、元の顔が露になっている。
「やっぱり、大した能力じゃなかったな……」
　気付くと、服を脱いでしまいたいくらい、汗だくだった。
　いや、それよりも、水を供給しなければ、熱射病で倒れてしまいそうだ。眩暈がする。立っているだけで気持ちが悪い。
　見ると、ケルベロスはベスティアリー相手に善戦していた。
　オレはツイン・ソードを収納している『ある場所』から、コーラのペットボトルを瞬間移動させて手に取ると、それを口に入れた。生き返る。
　いや、そのまま、その場所へ瞬間移動してもいい。
　しかし、それは逃げる事だ。
　実を言うと、オレは誰にも認識されていないならば、誰にも干渉されない、『ある場所』へと瞬間移動する事が出来た。そこからは、いつも双剣や食べ物などを、両手に移動させたりしている。
　見ると。

　ケルベロスは、やはり苦戦しているみたいだった。
　ベスティアリーの空間圧縮によって、部屋中の至る所が押し潰れていく。
「どんな能力も私の不死の白の前では無力化される。炎は縮み、ナイフや銃弾は届かず落下していく。既に、君達に勝てる可能性など無い」
　ケルベロスの肉体が裂け始めた。彼は慌てて、ベスティアリーから距離を取る。そして、再び、腕のナイフで切りかかる。ケルベロスの動きは早かった、ベスティアリーの背中から、血液が勢いよく噴出した。
　設置されていたカプセルが次々と割れて、中のアンドロイドが丸く縮小していく。
　二人の強者は一歩も譲らなかった。
　ケルベロスのアケローンが部屋中を駆け巡る。
　部屋中から、刃の樹林が生えていた。
　そのどれもが、ベスティアリーにダメージを与える事が出来ないみたいだった。
　圧縮された場所は、メチャクチャにクレーターのような孔が開いている。
　気付いたが、ベスティアリーの能力は、ある一部分の空間にしか作用出来ないみたいだった。オレが始めてベスティアリーと対峙した部屋の中。それくらいのスペース。
　オレは少し試してみる事にした。
　オレの瞬間移動の能力は、ベスティアリーの空間圧縮が行われている部分を、瞬間移動させる事が出来るのだろうか？
　ケルベロスは、しつこく、ベスティアリーに攻撃を命中させるべく、刃物の刃を向ける。そして、それはまた圧縮されていく。
　オレは能力を発動させた。
　地面から突き出した刃。
　それは、ベスティアリーの肩先を鋭く抉り取っていた。
　彼は、一体、何が起こったのか、分からないように呆けている。
　攻撃を放ったケルベロスの方もだ。
　オレは叫ぶ。
「ケルベロス。攻撃を続けろ。オレが奴の『イモータル・ホワイト』の空間圧縮の防御を瞬間移動させる。今みたいに、タイミングを巧く合わせられれば、攻撃が届くぞ！」
　ベスティアリーはオレを睨み付ける。
「瞬間移動の能力者！　お前、いい加減にしやがれ。先ほども始末するつもりだったのに。まず、お前から死ぬ必要があるみてぇだな？」
　言葉が荒っぽくなっている、余裕が無い証拠だ。
「お前の攻撃は攻略済みなんだよ」
　全身が軋む。此方に攻撃が向いている。
　オレは即座に、今いる場所から飛んだ。
「この部屋は広過ぎる。お前の攻撃はオレに届く事なんて無い」
　ツイン・ソードを振るう。

　攻撃のエネルギーを、彼の両腕の辺りへと飛ばした。
　ベスティアリーの両腕から、勢いよく血液が流れる。
「どうした？　空間圧縮で防御しないのか？　攻撃手段があるのは、ケルベロスだけじゃないぞ」
「てめぇええ！！！」
　ケルベロスが、勢いよく彼の胸元を右腕のＴ字型の刃物で切り裂いていた。
　続いて、オレは空中を勢いよく蹴り上げる。
　そのエネルギーを瞬間移動させて、ベスティアリーの背中へと直撃させた。
「空間圧縮は一度にしか行えないみたいだな。まあ、幾らそのフィールドを作っても、オレが消し飛ばすけれども」
　ベスティアリーは、切り付けられた胸の傷口を押さえる。
　そして、オレ達二人を憎しみに満ちた目で睨んでいた。
　そして。
　ベスティアリーは笑っていた。
　狂ったような笑い。
　ケルベロスは、鉄柱を刃物化させて、ベスティアリーの顔へと叩き付ける。
　彼は、地面に倒れ込んだ。
　そして、気絶してしまったのか、起き上がる事は無い。
　一息。
「後は、ルサールカがプルソンを倒して。ウォーター・ハウスがボティスを倒して終わりだな」
「ああ」
　ケルベロスは全身の傷を確認しているみたいだった。
　その時。
　ベスティアリーの手が伸びて、ケルベロスの胸を握り締める。
「油断だらけだ、馬鹿が！　入った！　心臓を圧縮されて生きていられるのか？」
　初老の男は勝ち誇ったような顔をしていた。
　だが。
　ケルベロスは、溜め息を吐き出す。
　彼の胸元は、大きく抉れていた。
「ああ。別に俺達は油断していたわけじゃないさ」
　ケルベロスは、右手を掲げていた。
　彼の右手は、ナイフ状になった肋骨に囲まれた心臓が、脈打って動いていた。
　彼は、自身の肉体の骨格を変形させて、心臓を右手に持ってきたみたいだった。
　床から、長いナイフが突き出て、ベスティアリーの右腕と、左足を切断する。
　ベスティアリーは、崩れ落ち、今度こそ、気絶してしまった。
「さてと。こいつの出血を止めなければ。生きたまま拘束しないといけないんだよな。傷はウォーター・ハウスが治してやれるだろう」

「ああ。一端、戻るか？」
「そうしよう」
　ごうっと、冷風が吹き抜ける。
「この、研究機関は僕が開発したものの結晶だった。しかし、君達にはまるで通じない。ベスティアリーにもだ。能力者は一体、何処まで行くのか。……神に近付く存在なのかもしれない。僕はその先が知りたい」
　部屋中の温度が急速に冷凍されている。
　まるで、吹雪の雪山にでもいるかのように、異様に寒い。
　ケルベロスの身体から流れている血が凍り付いている、液体が固体となっている。
　こいつの能力は、温度を上昇させるだけじゃない。……。
「ベスティアリーはあくまで、ＺＯＯという組織のマフィアのボスだが。この研究施設の主は僕だ。ドーンの奴らには触れられたくなかった。こうなれば、この施設ごと、君達を始末するしか他にはない」
　ブエルは部屋を出て行き、何処かへと向かっていった。
　おそらくは、この施設全体を破壊する起爆装置でもあるのかもしれない。
　ドアに近付く。氷で固まっており、開きそうにない。いや、それ以前に素手で触れれば、手の皮膚が剥がれてしまうだろう。
「もし、オレが相手でなければもっと、凶悪な能力だったんだろうな……」
　オレは瞬間移動能力者だ。
　オレの能力は、能力者の中でも異質だと言われている。
　機械音が酷い。戦慄いているように耳をつんざく。
　ブエルの持っていた切り札が一体、何なのか。
　空間把握を行うと、建物全体が早い速度で変形しているのを理解した。
　おそらく。
　この建物自体を、怪物へと変形させているのだろう。
　ブエルの能力のせいで、気温が徐々に下がってきている。霜柱に覆われて、地面が凍っている。今、零下何度くらいなのだろうか？
　だんだん、身体の動きが鈍くなっている。熱い、寒いという攻撃は、想像以上に肉体にダメージを与えるみたいだ。
　奇妙なエリアに入った。
　零下の中で、植物が生まれるのだろうか。
　シダ植物に覆われた世界だった。
　地面には湿気も無いのに、キノコ類が生えている。
「此処は？」
「プルソンの『クラーケン』の世界よ」
　全身にシダ植物が絡み付いて、瀕死のルサールカが横たわっていた。
　腹や首の辺りから、植物が生えている。

「それは本体？」
「ええ……ドッペル・ゲンガーじゃない……。それよりも近くにプルソンがいる」
　しゅぅるるる、と音がする。
　シダ植物の陰から、動く者がいた。
　下半身が植物に巻き取られた、短髪で漆黒の黒目の男が姿を現す。
　そいつは、ナイフ状の葉っぱを此方へと向けてきた。
　オレはそれを難なく避けると、空中を蹴って、その攻撃をプルソンの腹に瞬間移動させる。短髪の男は仰け反った。
　この男がプルソンだろう。
「フェンリル、この植物使いは俺が倒す。お前はブエルを追いかけろ」
　ケルベロスは叫ぶ。
　オレは彼の案を飲んで、ブエルの向かった方角へと向かう。
　彼の動きはオレの能力で手に取るように分かった。
　空間把握の能力で、ブエルの元へと瞬間移動する。
　オレがいつの間にか、目の前にいて、彼は拍子抜けしたように驚いているようだった。
　ブエルは追い詰められながらも、嘲笑っていた。
「実は、この迷宮自体が一つの巨大兵器なんだが、君の瞬間移動の能力さえなければ、君達を閉じ込める事も出来たのにな……残念だ」
「ああ、そうかよ」
　オレは彼の腹に蹴りのエネルギーを叩き込む。
　彼は再び、失神した。
　温度は、常温へと戻っていく。
　念の為、オレは彼が爆弾か何かを隠し持っていないかを確認する。
　そして、城の外へと彼を連れて飛んだ。

†

　ウォーター・ハウスは、既にボティスを鎮圧して背中に手錠を嵌めて拘束していた。
　マルファス同様、全身の骨をへし折られたようで、抵抗する素振りすら見せなかった。
　それから、十数分後、ケルベロスが瀕死のベスティアリーとアミィを右肩に、左肩にプルソンを背負って出て、ルサールカと一緒に出てきた。
　敵、六人全員を、オレ達は生かしたまま、拘束する事が出来たのだった。
　ウォーター・ハウスは、まずルサールカの首と腹の傷を治して、その後、重症のベスティアリーとアミィの傷を、抵抗されない程度に治していく。
「皆様、お疲れ様。さて、任務完了ですね」
　ミューズは満面の笑顔をオレ達に向けた。
　確か、彼はハーデスの側近だと聞く。

　万一、標的が外部に逃げ出した時に、始末する事を請け負っていた優男。
　後ろで、叫び声が上がった。
　ベスティアリーだった。
　彼は傷を治されて、即座にウォーター・ハウスの首根っこを掴んだ。
「貴様ら、舐めくさりやがって。全員、纏めて挽肉にしてやる……」
　ウォーター・ハウスは平然としている。
「面倒臭い。こいつ、今なら俺が殺してしまいそうだ。ミューズ、頼む。お前も、一度くらいは仕事しろ」
「ええ、いいですよ」
　優男のミューズは、指をくるりと回転させる。
　すると、一瞬にして、ベスティアリーは突如現れた、丸い形の鳥篭に閉じ込められる。
　鳥篭の中は、入っている住民に向けて、幾つものトゲが向いていた。
「なっ……！？」
　ベスティアリーは叫ぶ。
　そして、無理やり鳥篭を引き千切ろうとする。
　すると、鳥篭は縮まって、内部のトゲが、ベスティアリーの皮膚や肉を次々と刺し貫いていく。彼は数分くらい、抵抗し続けるが、全身にトゲが深く刺さっていき、徐々に暴れる事を止めていく。
　マフィアのボスは、今度こそ、抵抗する事を諦めたみたいだった。
「すごいな」
「もっとも、フェンリルさんには無力でしょうけどね。敵で無くてよかった」
「ああ」
　オレは相槌を打つ。
　拷問器具へと閉じ込める能力と言うべきか。
　ひょっとすると、彼はこの中で、一番強い能力者なのかもしれない。
「僕の『エンペドクレス』はどのような怪物も静まります」
　優男は、笑顔をオレ達に向けた。
「……ベスティアリーは駄目だったか。じゃあ、次は僕が」
　ぼそり、と近くで、ブエルが呟いた。
　ミューズは、彼も鳥篭の中へと閉じ込める。
　鳥篭の出現は、一瞬だった。たった一瞬で敵を鳥篭の内部に閉じ込める。
「無駄だよ。戦うのは僕じゃない」
　ブエルは嘲笑う。
　カルネイジが揺れる。
　大きな人型の怪物へと変形していく。
　それは、さながら神話の巨人のような姿をしていた。
　一体、全長何百メートルあるのだろうか。

怪物は、オレ達に向かって歩き出す。
ミューズは、一瞬だけ、サディスティックな笑みを見せた。
エンペドクレス……。
ミューズは、怪物も巨大な鳥篭の中へと閉じ込めた。
鳥篭は怪物が幾ら中で抵抗しても、引き千切られる事はなく、縮小していって、怪物の全身を貫いていく。
それを見て、ブエルは諦めたように、溜め息を吐き出した。
「アサイラムか。……僕の研究はまだまだ未完成だというのに……」
酷く悔しそうに、ブエルは此方を睨んでいた。
……。
カルネイジに突入して、三時間弱が経過していた。
オレ達五人は夜明けと共に、アサイラムへと戻る事になった。

　青い悪魔を倒す事。
　ブラッド・フォースを倒す事がドーンの目標の一つであるのは明白な事実だ。
　しかし、誰もそれを公には公言しない。また、勝てないのだと、宣言する者は意外に少ない。彼らにはプライドがあるからだ。ハンターの誇り、殺人者としての誇り、暗殺者としての誇り。そして、何よりも能力者としての誇りだ。
　もし、ブラッドの名前を出せば、戦おうと見栄を切らざるを得なくなる者が出てくるだろう。そして、そのまま戦わずに侮辱されるか、戦って殺されるか。
　そのような結果が待っているからこそ、ブラッドの名前を口に出す者は少ない。
　さて。
　ブラッド・フォースを探し出さなければならない。
　オレは少し苛立ちのようなものを覚えた。
　青い悪魔、ブラッド・フォースはオレの友人だった。
『アイス・エイジ』の一件、以来、親しい仲となっている。
　オレがあの殺人鬼に会って思った事、感じた事は、彼はもうどうしようもない程に、“他人が怖い”という事だろうと感じた。
　人の視線、人の敵意、人の悪意、人の殺意が怖い。
　とにかく、人から傷付けられる事が怖い。
　おそらくは、彼は傷付けられるのが怖いから、傷付けるのだろうと。
　それに気付いた瞬間に、オレは彼に対する恐怖や嫌悪が無くなった。
　何処か人間らしい感情や感覚は壊れているとはいえ、ブラッドを、青い悪魔を一人の人間として見ようと思ったのだった。

†

　ベスティアリーとその配下及び雇われの殺人犯を数名拘束する事が出来た。
　ベスティアリー、ブエル、アミィ、プルソン、ボティス、マルファスの六名だ。
　オレ達は、一人も死者を出していない。民間人の被害も出さなかった。
　好成績と言っていいだろう。
　……。
　あれから、数ヶ月程、経っただろうか。
　彼ら六人は、数日の手続きを得て。これからアサイラムに収容される。
　アサイラムには、能力者の能力を封じる為の能力者が沢山、雇われているという。そして、収監の際、能力者の能力を封印する為、頭蓋の部分に能力を封じる装置を埋め込む。その装置を埋め込むと、能力者は自由に能力を行使出来なくなるらしい。
　能力者の研究は進められている。能力者とは一体、如何なる存在であるのかと。

　アンブロシーは、カルネイジの内部構造を知っていた。知っていた上で、オレ達には情報をまるで与えてくれなかった。リレイズいわく、貴方達五名ならば難なく攻略出来る事を見越していたとの事だと。こういったドーンにおいての、依頼主による標的の情報隠蔽は日常茶飯事らしい。それで、特に強い大きな問題に発展する事も無いという。
　所長アンブロシーがベスティアリーを狙ったのは、彼が研究していた対能力者用の戦闘型ヒューマノイドをどうにかして、アサイラムに有効に活用させたかったとのだと云う。
　この数ヶ月間の間、チェラブから渡された写真に写った賞金首を狩っては、アサイラムへと閉じ込めていた。ノルマの賞金首はほぼ、消化されたといっていい。
　オレはネオ・アーカム・アサイラムの施設内を見学させて貰う事にした。
　此処は、刑務所と精神病院が一緒になった場所だ。
　表層的な印象としては、此処に入れられた囚人達は、好きなように遊んでいるだけだった。囚人服らしき物は無い。中にはブランド服で身を固めた者も存在した。
　中庭のテラスでは、囲碁、将棋、チェス。トランプで遊び。外のグラウンドでは、テニスやサッカーにまで興じている囚人達もいる。陽気な歓声を上げてフットサルをしている囚人もいた。彼らの顔に邪気は無い。
食事も自由に、好きな物を食べる事が出来るらしい。この施設内では、ステーキ、寿司、ハンバーグ、ラーメン、キャビアやフォアグラ、自由に注文して食べる事が出来る。
　酒も煙草も自由だ。ただ、一部のドラッグは制限されているらしい。
　天国のような場所なんだな、とオレはウォーターに言った。
　何しろ、此処にいる囚人は超ＶＩＰ扱いのような物だからな、と彼は答えた。
「しかし、天国とは思わんな。俺なら発狂して死を選んだ方がマシだ」
　ウォーターは韜晦を含めて、そう言った。
「どういう事だ？」
「俺達は誰にも何にも縛り付けられない。能力者なんだ。生きる事、食べる事、あらゆる事が監視、管理されている生活の何が幸福なのか？　俺なら死んだ方がマシだ。実際、俺はハーデスに拘束された時、此処に閉じ込められそうになった。うんざりだった。だから、俺はそれくらいならドーンで働く事にしたんだよ。ドーンのメンバーには元犯罪者も比較的多く混ざっている。彼らはこの刑務所に入る事を拒んで、ドーンで働く事に決めたんだな。フェンリル。オレはお前と違って、ドーンを抜け出す自由が無いんだぜ？　俺はお前が羨ましい」
　ウォーターはそう、毒づいていた。
　オレは施設内を見学する事にした。
　ネオ・アーカム・アサイラムの刑務所は、全部で十六の施設から成り立っている。
　まず、オレはカウンセラー・ルームへと向かった。
　カウンセラー・ルームには、何名もの囚人が椅子に座って待っていた。
　彼らは支給されるコーヒーや紅茶を飲んで、新聞や雑誌に目を通していた。望めば、定期的に向精神薬や安定剤を配布してくれるらしい。性犯罪者やカニバリズム嗜好のあるものは、半強制的にカウンセリングが行われるとの事だった。

図書館に向かうと、大量の本が並んでいた。オレは一通り、目を通す。蔵書の中に、ハンス・ヴェルメールの写真集や死体写真集も見つけて、少しだけ驚いた。特にタブー視される種類の本など無いらしい。司書に言えば、十八禁雑誌も借りられるらしい。
労働用の施設もあると言う。資格も習得出来る。
庭掃除、施設の工事、衣服の手縫い、工場での単純作業、清掃、図書館司書、古着屋、雑貨屋店員、美容師、看護士、様々な職業に付く事が出来る。
労働は強制ではないが、毎月、ベーシック・インカム制度として与えられる生存権としての最低賃金に上乗せして、賃金を貰える事が出来る。それで、ブランド品や施設内での高級レストラン、バー、更に施設内において慰安婦も存在し風俗街みたいな場所もある、それらの場所で豪遊する為に余分な金が必要だった。
施設で働いている者の大半は、収容された囚人ばかりだった。
一人一人、個室が与えられており、寮が存在した。流石に、男子寮と女子寮に分かれているが、基本的に恋愛は自由だった。結婚も認められており、子供を産む事も認可されている。私物も自由に与えられている。
この施設は、小さな街のコミュニティようにも思えた。
それを意識して作られているのだろう。
何よりも、このアサイラムの目的は、囚人に普通の人間らしい人生を与える事だ。
此処を天国だと言っている者も多いと言う。だから、入りたがる人間も多い。
週に二度ほど、刑務所教戒師がやってくる。公演を聴くのは自由だ。時には、アンブロシー自らが聖書について語る事も多いという。
ふと思い付いて。
オレ達が収容したのは、ベスティアリー、ボティス、マルファス、プルソン、ブエル、アミィの六名だ。オレはベスティアリーとアミィに会いに行こうと思った。
リレイズに頼む事にした。
そういえば、この男の役職は正確には何なのか分からない。
興味は無かった。
面会がしたいと告げると、二つ返事で了承してくれた。
ベスティアリーの収監されている部屋に向かった。
刑務所とは思えない、マンションの中のような部屋。
そこにベスティアリーはいた。
ポロシャツにジーンズといった部屋着を着ている。
髭は整っており、品のあるオーディコロンのような匂いがした。
マフィアのボスという威厳は今の彼には無い。
穏やかな目をしていた。
人間はこれ程までに変わるものなのだろうか。
「フェンリルと言ったかな」
「ああ……」

「私は今、満たされている。もう、殺し合う必要など無い」
「……」
「アンブロシーは言った。君の罪は、神に赦されたのだと。私は生涯、不安に悩まされる事は無いんだ。能力者であり、殺人犯である事から解放される事が、こんなにも楽だとは思わなかった」
　今、とても幸福で穏やかな気分だ、と彼は言った。
　オレは部屋を出て、別の部屋に向かう。
　アミィ。
　アミィは口の傷を縫われて、すっかり痕が見えないくらいに回復していた。
　今度は、新しいヌイグルミを気に入って、抱き締めながら話していた。
　彼を担当しているカウンセラーは、驚く程、彼が優等生である為、気が楽なのだと言う。
　オレも十数分、彼を眺めていたが、飽きて、部屋を出た。
　そして、オレは最後にブエルに会う事にした。
　カルネイジの本当の支配者であるブエル。
　ベスティアリーとは違った扱い。アサイラムはＡランクのベスティアリーよりも、Ｂランクのブエルの方を重要視したみたいだった。
　別棟に、彼の部屋はあった。
　コンピューター・ルームだ。
　ちかちかと点滅する明かりが眼に痛い。
「ああ、君か……」
　ブエルは淡々と答える。
「久しぶりだな……」
「噂に聞いていたが、凄いな。此処の施設は。凶悪犯罪者達が、まるで犬のように従順だ。特に暴力を行使したわけでもなく、薬漬けにしたわけでもない。けれども、カウンセラーや宗教、哲学などを教え、娯楽を与え、欲望を与えて、管理している。それで、大人しくなる能力者が数多い。僕は不思議で溜まらないが、皆、牙を抜かれてしまう、何故だと思う？」
「能力者には敵が多いからか……？　殺す事は出来なくなるが、殺される心配も無くなる。此処に居れば、一生を安泰に暮らせる。巨大な壁自体が、実は一番、自身の命を安全にする防御壁となってくれている、そうなんじゃないのか？」
　彼は一気にまくし立てる。話し相手が欲しかったのだろうか。
「皆、後ろめたいのだろうな。人を殺し、人の人生を壊してきた人生が。この前、ベスティアリーに会ったが、もぬけの殻だった。顔付きを見ると、何だか、これでやっと安心して眠れる、といったような感じだった。みんな、馬鹿者だよ。命が惜しければ、初めから、何もするべきではない。そうじゃないのか？」
　オレは部屋中の機械を、眺める。
「お前は何をさせられているんだ？」
「何。カルネイジでの研究の続きだよ。対能力者用の研究。署長アンブロシーは、おそらくはベ

スティアリーではなく、僕を拘束したかったんじゃないかな。そして、手飼いにしたかった。ところで、僕の能力『ノース・デザート』は封印されていない。頭蓋骨に装置を取り付ける手術は僕には施されなかったよ。どうやら、僕の方がベスティアリーよりもＶＩＰ待遇らしいね」
　オレは少し気になって、ブエルに訊ねた。
「頭蓋骨に装置を付けるだけで本当に能力者の能力を制御出来るのか？　信じられないな」
「……実はその装置なんだが。調べてみると、どうも副署長のチェラブが関係しているらしい。彼の能力はどうも、能力者の能力を封印する能力らしいね。副署長の能力を刻印した装置らしいよ。フェイルセイフ……多重安全装置として、アサイラム中にも彼の能力が結界のように行き渡っているから、君も能力を自由に使えないんじゃないかな？」
　言われてみると、確かに思うように、空間把握が使えなかった。
　瞬間移動はまだ試していないが、おそらく巧く飛べないだろう。
「この施設、アサイラムで本当に行われている事は、能力者の研究さ。僕とカルネイジが行っていた事と同じだ。実験場なんだよ、此処は。それは公だってバレないようにしている。もっとも、それを考えているのは、アンブロシーとチェラブの方で。看守長のハーデスは、本気で、能力者達の矯正のみを考えているみたいだけどね。ところで、アンブロシーには会ったかい？」
「……いや、まだだけど。大体、チェラブかリレイズのどちらかがオレ達に指令を下す。ああ、そうだ、音声越しには話した事がある」
「ああ、そうかい。一度、会ってみるといいよ」
　何か、含みを持たせるような調子で彼は言った。
「それにしても、お前は此処に入れられた事が相当、憎憎しいと思うんだが。実際の所、どうなんだ？」
「冗談じゃない。僕は自由に此処で研究を続けられる。これ以上の幸せは無い。他の能力者達と同じように、僕は此処の生活に適応するよ。一生、研究を続けていたい。僕は功績を残したいんだ。後の世の為にもね。ああ、そうそう、先ほど暴力も薬も使っていないといったが、やはり例外はあるようで、アサイラムの奥底には、一応、薬漬けにして監禁している囚人も一部、いるらしいよ。目標としては、後々、そういった囚人を完全に無くしていく事らしいんだけどね」
　と、ブエルは煙草の煙を吐き出す。
　そして言った。
「さて、今日は寿司でも食べようかな。何だか、此処に来て以来、飽食になってしまった気がするよ、カルネイジにいた頃は、もっと質素だった気がするんだけどね」

†

　残りのＡランクは二人だ。
　彼らと対決する。
　書かれている名前を見る。
『アヌビス』。『デス・ウィング』。

片方は、ジャッカルの頭をした大男。もう片方は、くすんだ長い金色の髪をした女だった。
ベスティアリーの賞金は２５３０億円だった。まあ、こんなものだろう。
炎猫は４０００兆円以上。ブラック・スペルは六億。Ａのバラ付きは本当に酷い。
まあ、炎猫は複数の国家から懸賞金を掛けられていたから当然か。
ベスティアリーに賞金を掛けた者達も、武器商人や軍人、政治家といった人物みたいだった。もしかしたら、アンブロシー自身が掛けたのかもしれない。
それよりも、アヌビスとデス・ウィングの二人。
ウォーター曰く、とうとうアサイラムはこの二人の討伐に踏み切ったのだろう、と答えた。

アヌビス、賞金総額８０００億円。
アヌビス、推定殺害数６００万名以上。
アヌビス、能力の名前は『スペクター』。
影を操る。影に捕らえられた者は死ぬ。能力の全貌は不明。

デス・ウィング、賞金総額２２兆円。
デス・ウィング、推定殺害数２億。
デス・ウィング　能力の名前は『ストーム・ブリンガー』。

別名、水月翔子という名前を持っている。裏・原宿の一階層に古着屋、
骨董屋を出している。竜巻を操る。剣使い。殺しても死なず、再生する。
不死身の肉体を持っている。多くのハンターが返り討ちに合っている。
幾つかの国を滅ぼした事があり、本人の証言によると本人自身でさえも
能力のコントロールを仕切れないという。

オレは庭園でケルベロスと会った。
彼は花やそれに群がる蜜蜂を楽しそうに見えていた。
「なあ、フェンリル。会って欲しい人がいるんだ」
「うん？」
「俺の師のハーデスだ。この刑務所の看守長もしている」
「ハーデスか……」
ギリシア神話の冥府の王の名。
「ハーデスというのは、本名ではなくて通り名だな。本名はジョージという。ファースト・ネームだ。本人はその名前で呼ばれる事を好んでいる」
と、ケルベロスはオレに彼の居場所へと案内した。
アサイラムの隅の方にある場所だった。
チェラブの能力が届いていないのか、空間把握が使える場所だ。

　そこは、アサイラム内の道場の中だった。
　見た処、七十に届いた老人に見える。
　彼は拳法着を着て、木刀を持って構えていた。
　こちらを見ていないが、オレ達が部屋に入った事に気付いている。オレもケルベロスも足音一つ立てていない筈だった。
　彼の持つオーラはとてつもなく静かだ。
　けれども、まるで隙が無い。どうやっても打撃や斬撃を与えられそうに無かった。背後からの銃弾も掃射も難なく対処してしまうだろう。
　そして、彼の握り締めた木刀。
　その切っ先に、吸い込まれそうになる。
　しかし。
「彼がハーデスか？　ケルベロス」
　オレはケルベロスに声を掛けた。異様な空気の重さに耐えられなかったからだ。
　ケルベロスは口を開いて何かを言おうとした。
「ジョージって呼んでくれないかの？　わしの冥府の王の名は本名じゃあない。仇名だよ」
　オレは気配にまるで気付かなかった。
　いつの間にか、ハーデス……ジョージは、オレの真後ろにいて、木刀を布で磨いていた。
　オレの額から冷や汗が流れ出す。
「おお、お前さんがケルの言っていたフェンリルかあ。これはこれは、とても別嬪さんじゃなあ」
　穏やかな微笑を浮かべている。
　とてもアサイラム最強の能力者には見えない。
　しかし、本当の実力者は見た目で判断してはいけない事をオレは知っている。
「ケルベロス……」
「何だ？」
「いや、ジョージ。手合わせ願えないか？　勿論、能力を使ってもいい。アンタと立ち会ってみたい」
　オレは唾を飲んだ。
　ジョージは少し考えてから言う。
「いいぞ。木刀でいいかい？　お前さん、二刀流なんじゃろう？　二本使っていいぞ。それにわしは能力は使わん。絶対じゃ」
　邪気の無い声音だった。
「……アンタを殺すつもりでやりたいんだがいいか？」
　ジョージは軽くウインクをした。
　オレは二本の木刀を渡された。
　ケルベロスがオレ達の間に立つ。
「女々しくて悪いが、ハンデが欲しい。それならオレは能力を使っていいか？　……」

「いいとも。わしの能力は人に使うべきものじゃない。わしは自身の能力を厭っている。ただの殺人の道具じゃからな」
「ありがとう。それでも、オレなんて相手にならないだろうが……」
　オレはジョージから５メートル程、間合いを開いた。
　真ん中にいるケルベロスが上げていた右手を下げた、始まりの合図だ。
　オレはその場で左手の木刀を地面へと力強く叩き付けた。
　そして、斬った衝撃をそのままジョージの目の前に瞬間移動させる。
　そして、オレ自身も飛んだ。
　やはり。
　オレのいた位置に、ジョージは木刀の突きを打ち込んでいた。
　オレは彼の動きがまるで見えていない。
　オレは彼の背後に飛んで、頚椎の辺りに蹴りを入れる。
　彼は身を捻って、一瞬でオレの足首を掴んで地面に叩き付けた。
　オレはそのまま、彼の肉体ごと空中に瞬間移動する。そして、もう片方の足を顎に勢いよく入れる。首を捻られてかわされた。が、オレはその衝撃をそのまま彼の背中へと瞬間移動させる。
　気付けば、オレは地面へと簡単に叩き伏せられていた。頭にダメージがいっている。けれどもオレはすぐに、地面から離れて空中に飛んだ。ジョージを見失っている。
「フェンリル、お前じゃ勝てない」
　ケルベロスの声が聞こえたような気がした。
　オレは壁の隅へと飛んだ。
　道場の中央にケルベロスが立っているだけだった。オレは右手の木刀を振るう。
　ケルベロスの背後だ。
　案の定、ジョージが姿を現した。
　オレはもう一度、彼の顎下に蹴りを打ち込む。
　その際に、二本の木刀を全力で放り投げた。
　彼はそれを、腋で二本とも掴み取る。
「どうした？　もう御仕舞いかい？」
　彼は自分の木刀をオレに向ける。
「……掴んだな」
　ジョージは一瞬だけ、オレに隙を見せた。
　木刀がそのまま、オレの手元に転移して戻ってきて、それに引き摺られるようにジョージの肉体もオレの目の前へと移動していた。オレは勢いよく膝蹴りを彼の顔面に向けていた。彼は後ろに勢いよく仰け反る。膝蹴りの衝撃を転移させ、ジョージの背中を撃った。
　彼の顔が歪む。
　オレは彼の身体から即座に数メートル程、離れた。
　ケルベロスが呆気に取られて、オレを見ている。
　大体、試合開始から数秒程、経ったのだろうか。

「……じいさん、アンタの動きが見えてきた」
　本当はまるで見えていないが、試しにそう牽制してみる。
　ジョージは楽しそうにオレを見ていた。
「若いの。御主、見かけによらず……。ケルよりも筋が良いかものう。何か拳法でもしていたのかい？　それに、お前さんの能力、ちょっとワケが分からん。攻撃の軌道がまるで読めん」
「拳法は昔、少しだけ。じいさん、アンタも能力使っていいぜ？」
「わしの能力はお前さんを殺してしまうよ」
　ジョージはオレに木刀を二つとも、放り投げて返す。オレはとっさにそれを掴んでしまう。一瞬の視覚の緩み。
　また、彼の姿が見えなくなった。オレの瞬間移動の能力とは違う、彼は異様なまでに俊足なのだ。高速体術と云った処か。
　オレは迷う事無く、飛んだ。場所はまた隅だ。
　今度はジョージの姿を確認する。
　オレは勢いよく、宙を切り付ける。
　当然、命中しない。難なく、横に衝撃を避けられる。
　オレはジョージの足元へと飛んだ。そして、足首に回転蹴りを入れる。
「剣技より、足技の方が得意なんじゃな？」
　彼はこれも、ジャンプして難なくかわしていた。当然のようにオレは蹴りの衝撃を彼の頭部へと移動させる。
「御主の攻撃は、追跡ミサイルか？」
　左手の掌で、彼はそれをガードする。
　オレは地面を廻り続ける。何度も衝撃を彼の側頭部、後頭部、喉元へと飛ばしていく。
　彼は掌底だけで、それらを弾き飛ばしていた。
　もう、二人とも木刀は使っていない。
　ジョージの方は、かろうじて片手で木刀を握り締めてはいるが、アクセサリーのようにぶら下げているだけだ。オレは彼の掌底により発せられる、エネルギーを、彼の背中へと飛ばした。
　激しい衝撃。電気が走ったかのようだった。
　どうやら、オレは腹に木刀を打ち込まれたらしい。
　気付くと、オレは道場の壁に勢いよくめり込んでいた。
　ジョージは一筋の汗を流して、数メートル先で笑いもせずオレを見ていた。
　オレは立ち上がる。
「……オレの負けだ」
　勝負は終わった。
　時間にして、一分も経過していない。
　それから、数分程、オレ達三名は無言だった。
「フェンリル、お前、最後に一瞬だけ師匠を本気にさせたぞ……」
　オレは服の埃を払う。

「関節技も使いたかったんだけどな。まるで隙を与えてくれない。それから欲を言えば、能力を出させたかったんだけどなあ」
「若いの。剣道の試合では剣道をやってくれ」
「オレは剣道の試合を始めた覚えは無いぞ」
　ジョージは苦笑する。
「弟子はこれ以上、取らないつもりだったが、お前さんもケルみたいにわしから武術を習うか？」
「いやいい。オレの方が実はもっと強いからな。意味が無い。オレも全力で戦っていない」
「口の減らない奴じゃ」
　ジョージは破顔一笑した。

†

　ウォーター・ハウスはいつに無く、感情を露にして荒れていた。
　表向きには平静を装っている。しかし、彼は明らかに瞳に強い負が宿っていた。
　オレは彼の事をきっと誤解していた。
　彼は殺人衝動の塊だった。
「ハーデスだけはいつか俺が殺す」
　彼は壁を小突いた。
　強酸か何かでもぶち撒けたように、壁が溶解していた。
「フェンリル。よく来てくれた。俺はお前が気に入っている。そうだ椅子に腰掛けてくれ。酒でも飲もう。コニャックがいいか？　それともスコッチ？　リキュールもあるぞ」
「すまない。オレは酒も煙草もやらない。紅茶は？　アップル・ティーが好物で中毒なんだが」
「無いな。果実酒ならあるが」
「じゃあ、お茶をくれ」
　ウォーターはグラスを二つ持ってきて、それぞれに飲み物を注いだ。
　ウォーターはどうやら、スコッチを飲むみたいだった。
　彼は煙草に火を付ける。
「知っての通り。俺はアンブロシーとハーデスの作ったアサイラムの収容を拒否する代わりに、アサイラム専属のハンターをしている。基本的には人殺しを禁止されてる。……それでも標的を嬲り殺してしまう事も多いが。後でしつこく説教、説法される。迷惑だ」
　オレは出された緑茶を口にした。意外と口に合う。
「アンブロシーは宗教家だ。何でもイエスやドストエフスキーに登場する何とかっていう名前の神父に憧れているらしい。何だったかな？」
「たぶん、カラマーゾフの兄弟のゾシマ長老だ」
「そうか、俺は小説は読まない。宗教も哲学も興味が無い。まあ、とにかくアンブロシーってのはヒューマニストでな。人類愛が好きなんだな。本当の悪人はいないと信じている。だから、従

来の刑務所を嫌ったし、犯罪者の死刑も嫌った。だからこういった施設を作った。元々は刑務所内教戒師だったらしい」
「刑務所内教戒師？」
「まあ、囚人を更正させようって教え説く奴らだな。宗教家を連れてくる、まあ、囚人にとって彼らは刑務所内の救世主ってわけだ。罪を赦して欲しいらしいからな」
「罪を赦して欲しい、か……」
　オレは少し考えた。
　何か言おうとしたが、言葉に詰まった。
　ウォーター・ハウスは、反吐が出るぜ、毒付く。
「フェンリル。俺はナチュラル・ボーン・キラーだ。大体、凶悪犯罪者ってのは幼少期に虐待を受けていたとか。気付いたら、人生の選択を間違えて社会悪に手を染めていたとかそんな奴らばかりだが、俺の場合は違う。俺は一応、精神鑑定で正常とされている。カウンセラーが手を焼いていた。俺からは何も出てこなかったからな。普通に中流階級で育って、素行も良く。親も友人もマトモだった。ただ、俺が異常だったらしい。能力が発現する前から、人殺しになった。何となく、人間をいたぶって殺してみたかったんだな。俺は多分、先天的に他人の痛みが分からないんだ。でも、自分の欲望には正直らしい。始めて人を殺したのは十四歳の頃だった。家にあったスコップで友人を殴り殺して死体を刃物やら何やらで当時の自分で可能な限り、損壊して埋めた。昨日まで一緒にサッカーをしたり映画館に行っていた仲間だった。何となく、こいつが苦しむ姿を見たら面白いだろうなあと思ったから殺した。彼は行方不明扱いされたよ」
　彼は饒舌に捲くし立てる。
「二十歳を過ぎて能力者になってから。俺は沢山、人を殺し続けた。知っての通り、俺の能力は毒を操るモノで俺の人格がそのまま投影されたんだな。気に入らない奴も気に入った奴も殺したし。俺を嫌いな奴も好きな奴も楽しい時も気分が沈んでいる時も殺した。もしかしたら、俺は人を殺す瞬間に人を愛せるのかもしれない。ムカ付く奴もその時は全てが赦せる。この退屈で苛立つ世界をぶちのめせるような感覚。自分自身が生きているという確かな実感。そして俺は誰かを殺した時にまったく罪悪感が無い」
　彼は二本目の煙草に火を付けて、飲み干したグラスに新たに酒を注ぐ。
「そういう俺の存在はどうやら、社会や世界はとても困るらしく。俺が拘束された時、心理学者や精神科医の奴らは本当に困ったような顔をしていた。俺が何か嘘を付いているんじゃないかって。本当は俺に殺人願望の原因が何かあるんじゃないかと引き摺りだそうとしていたが何も出なかった。俺は思うに、俺はこの世界にとって純粋悪って奴じゃあないのかな？　精神科医の誰かが言っていたが、『時計仕掛けのオレンジ』のアレックスに俺は似ているらしい。俺はその映画を見た時、何も感じなかったが」
　彼は冷蔵庫からブロック型のピーナッツ・チョコレートを取り出して、オレに差し出した。オレは礼を言って一欠片、それを口にする。彼は三つ程、一度に口にほうばって酒を流し込む。口元から涎のように酒が垂れていた。
「お前はたとえば、ケルベロスと違って不快な顔をしないんだな？」

「ケルベロスにも、こういった話をしたのか？」
「あいつはクソ真面目だ。ストイックなのかもな。師匠に憧れているせいか余り殺人を肯定したがらない。俺みたいなシリアル・キラーの気持ちなんて分からないだろうよ。ルサールカも内心では俺が嫌いかもな。フェンリル、お前は殺人は嫌いなんだよな？　快楽殺人犯も嫌いか？」
「嫌いじゃない。友人に最悪で最強らしい殺人鬼がいる。オレが人を殺さないのは自分の問題であって、他人の価値観なんて正直、どうでもいい」
「そうか、……人間の命の価値って何だと思う？」
「……ウォーター。お前はどう思うんだ？」
「無いな。俺以外の人間の命は無に等しい。俺が楽しむ為の道具だ。ほら、ＴＶゲームとかで人殺しまくるだろう？　拳銃を使って撃ち合うゲームとか、刀で斬りまくるゲームとかあるだろ。多分、他の奴らはあれで殺してスカッとしているのと同じ感覚で、俺は人を殺しているんじゃないのか？　……そんな事を殺す相手の前で言うと外道、屑、悪魔、色々、言われたけどな」
「それは言われるだろう」
「……フェンリル。お前、大切な友人とか恋人とか俺とか俺でなくても誰かに殺されたら、やはり憎悪に燃え上がるのか？　相手を殺したいって思うのか？」
「オレには大切な友人も恋人もいない。……って言いたい処だけど、普通に憎むだろう、それは。でも、それ以上にオレが殺されそうになるなら、もっと相手を憎んで、最低でも半死半生くらいにはするんじゃないかな」
　ウォーター・ハウスはテーブルを叩いて笑う。
「ははっ。しかし、殺した人間の家族は相当、俺を恨んでいるんだろうなあ。俺が生きているという事実だけで苦痛で仕方無いかもなあ。俺を呪い、罵倒し、毎晩、魘されているかもしれないなあ。俺を何度も何度も残虐な方法で殺害する事ばかりを毎日、毎日、イメージして神に祈りを捧げているのかもなあ？　もし、死後の世界があるとして地獄があるのなら、無間地獄に落ちて永劫に苦しんで欲しいと思っているかもな？　それを想像すると、食が進むんだ。肉料理のスパイスが薄くても許せるようになる。安物のテーブルワインの味も濃厚になる。あれだな、人一人を殺すってのはそいつの家族の人生もぶち壊す事になるんだってな。友人も恋人も酷く悲しんで、世界が不条理だってのを突き付けられる。だから、人殺しはやめられなかった」
　彼は何かを思い出したように、陶然とした顔をしてスコッチを喇叭飲みし始めた。
　そして一気に、酒瓶を空にするとそれをテーブルに叩き付ける。
　酒瓶に亀裂が入り、粉々になった。
「アンブロシーは馬鹿だな！　俺のような人間はどう考えても生きるべきじゃないだろう？　この世界の為にさっさと殺した方がいいんじゃないのか？　人間には愛が必要？　愛があればどんな凶悪犯でも改心する？　馬鹿じゃないのか？　本当の悪人なんていない？　俺がそうだ。ハーデスさえいなければ、俺はいつでも以前のようなシリアル・キラーに戻る。なあ、フェンリル、この世界の人間が殺人を厭い、避けようとするのは人間に善性があるからじゃない。更なる暴力があるからだ。人を殺したら、刑務所に行く。死刑になるかもしれない、拷問されるかもしれない。社会的な弱者になる。人間が人間を殺さないのは愛からじゃない、恐怖からだ」

　ウォーターは冷蔵庫を開けて、もう一瓶、同じ酒を取り出した。
　そしてグラスに注ぐ。
「アサイラムの囚人を矯正しているのは、アンブロシーの無償の友愛なのか。それともハーデスの暴力なのか。俺はそれが知りたい。アンブロシーはハーデスをアサイラムから無くすべきだな。囚人に宗教観だとか何だとかを説くのはそれからじゃないのか？」
「……ウォーター・ハウス」
　オレは貰ったチョコレートを全部、食べ尽くしていた。
「お前は偽悪的なのか？　それとも本当は正義感が強いのか？　もしくは、本当は過去の罪に対して懺悔したい気持ちでいっぱいなのか？」
「……どれも違う。おそらく俺は前提が嫌いなんだろう。……始めて人を殺した時、大切な友達を殺そうと思った時。俺、何でこいつといてこんなに居心地がいいんだろう。たまに喧嘩もするけど、凄いイイ奴だよなあって思った。でも、それも長くて数年で終わって、別々の人生を歩んで。普通の仕事をして、家庭とか持って。せいぜい、年に一、二度顔を合わせて飲むくらいだな、と思って。だから、殺した。友情を永遠のモノにしたかったかもな。言っておくが、俺は同性愛者じゃないぜ。こんな事言うと、精神科医はよく分からない用語を持ち出してきて、何とか説明付けしようとするんだよな」
　彼はすぐに新しい酒瓶も空にする。
「今日は話し過ぎた。多分、お前だから安心して話せた。そうだ、これから飯を食いに行こう。何がいい？　肉料理か？　魚料理か？　麺類もいいな。日本食もいい。とにかく、俺は腹が減った」
「ウォーター・ハウス……」
　オレは少しだけ含みを持たせるように言う。
「オレもお前が気に入ったかも。でも、相棒や親友にはなれないだろうな。お前の感性にはとても付いていけそうにない」
「人間関係なんてそれでいい。分かり合う必要なんて無いんだ。分かり合ってしまった、その瞬間に俺は相手を殺してしまうのかもしれない」
　ウォーターはあれだけのアルコールを摂取していたにも関わらず、平気な顔をしていた。
　オレ達は結局、中華料理で落ち着く事にした。
　彼はよく食べた。炒飯と餃子をまず、すぐに四人前は平らげる。
「フェンリル、やはりお前は食が細いんだな？」
「体型を維持したいんだ。太ったら着れなくなる服もあるから」
「お前らしいな。確かにその綺麗な顔が少しでも醜くなるのは避けるべきだ」
　そして、ウォーターは、まるで思い出したかのように言う。
「そういえば、ハーデスに会ったのか？」
「ああ。手合わせて貰ったよ。彼は強いな。多分、オレが知っている中で、最強の一人かも。まるで勝てる気がしなかった。オレは全力で挑んだんだけどまるで歯が立たない。何ていうか、化物だな。体術だけでも、オレは勝っていない。いつか、あいつを殺す予定なのか？」

「そうだな。しかし、俺が全盛期の頃はあいつと対等以上に戦えたが、老いた今もなお格闘技術と能力が成長してやがる。いつか殺そうと思うが、まだ先になる。俺は無念だよ」
　本当にうんざりしたような顔で、ウォーターは烏龍茶を飲み干す。
「しかし、ハーデスすら一目置くレッドラムにお前は勝っているんだよなあ。能力者同士の相性ってのは分からん……」
「隙を突いただけだ。バーにいたあの老人の方は、隙だらけだ」
「あれでも、レッドラムはハーデスと比較される程だぞ。もっとも、レッドラムは悪名の方が名高いが。レッドラムは暗殺者としてはトップクラスだ。フェンリル、お前、あれで恨み買っているかも。気をつけた方がいい」
「それは怖いな。……」
「冗談だ。あいつも仕事以外では殺しはしない。けれども、今頃、酷く悔しがっているに違いない」
　オレ達は二人して笑った。
「処で、ハーデスの話に戻るが。アイス・エイジが消滅したのは分かるか？」
　オレは箸を止める。
「聞いている……」
「アイス・エイジの王をしていた炎猫だが、彼女はアンブロシーとハーデスに黙認されていた。アイス・エイジはこの世界の触れてはいけない場所だった」
　ウォーター・ハウスは、何かを思い出したようだった。
「覚えているか？　青い悪魔と知り合いだ、と以前、言っていたな？　いや、友人といったんだったか？」
「……ああ」
「今なら信じる。きっと、お前はオレが理解出来ない何かなんだろうな」
　しばらくして、食事が終わる。
　ウォーター・ハウスは全額支払って、オレに飯を奢ってくれた。

†

　オレは『自室』へと瞬間移動する。
　この場所はオレだけが知っている空間で、オレだけが入室出来る場所だ。
　あらゆる次元の隙間に存在して、何処にでもあり何処にも無い場所に設置した部屋。
　鳥篭の内部を象ったイメージで創り上げている。
　部屋中には、噎せ返る程の薔薇の香が焚かれている。
　部屋の前に立て掛けてある二本の剣。オレはこの部屋からいつも武器として愛用しているツイン・ソードを取り出している。
　部屋には内部がこの部屋の倍以上の空間が広がっている、大きなクローゼットが置かれている。隣にはシャワールームが設置されており、向かいにはベッドと冷蔵庫が置いてある。四隅の壁にあるランプが部屋に明かりを放ち、そして、まるで部屋の主であるかのように中央には全身を映す姿見が掛けられている。鏡の隣にはカーテンに包まれた窓があり、窓の向こう側には何も無い暗黒空間が広がっている。天井は赤黒いベルベットの暗幕で覆われている。床は白と黒のチェック・トートの絨毯だ。
　オレは服を脱いでシャワールームに入った。
　服を綺麗に畳んで、コルセットと下着も取り外す。
　三十分後、全身をくまなく洗った後、シャワールームを出る。
　そして、バスタオルに包まれながら、クローゼットを開いた。
　中には何百着とある衣類と、広大な空間が広がっている。うち、アミュレット・コーティングという魔術的防具が施されている衣類は十数着、オレは何の防具にもならないアンジェリック・プリティーのゴシック・ロリィタ服を取り出す。色は闇に近い漆黒だ。
　オレは下着を着けて、鏡の前に立つ。
　細身で女性的だが、どう見ても男の肉体だった。
　解いた髪は、腰元まで伸びて淡い金色をしている。
　腰をキツくコルセットで締め付けると、オレは選んだ服を身に付けた。
　そして、薄く化粧する。
　鏡の前に映るのは間違い無く女だ。美少女と言っていい。大抵の場合、他人はオレの見た目に騙されてる。それでいい。
　今、オレは最高に自分に酔っている。水面に映ったナルシスのように、自分自身に恋心を抱いて放せない絶対感情。
　オレは鏡の横に置かれた小さな小物入れを開く。中からは薔薇を象った指輪が現れた。
　そして、儀式は始まる。
　赤黒い薔薇の指輪を嵌めて、鏡へと向ける。
　すぐには変化が訪れない。
　なるべくは自分自身の顔。髪。骨格。立ち振る舞い。全てに酔うように、自分自身の全てを慈しみ赦すようにイメージする。

やがて、鏡の背後に影が映った。
その影は女の姿形をしている。彼女はドアを開いてこの部屋の中へと入ってくる。
オレ以外に唯一、この部屋の入室を許可された者。
彼女は鏡の元へと近付いていき、オレの肉体を透過して鏡の中へと入る。
鏡に映る像と彼女の本体の像が重なり合い。
やがて、彼女は鏡の中から姿を現す。
彼女がこの世界に実体として辿り着く瞬間だ。
淡い萌黄色のボブショートの髪。黒のローブの上から白いローブを重ねて着た、ゴシック・ロリィタに似寄る衣装。手に持ったユニコーンを象った杖。
「久しぶりね。元気していた？」
そう言って、レイアはオレを強く抱き締めた。
『エタン・ローズ』のレイア。
彼女は別世界におけるオレと同じ波長を持つ人間であり、傲慢な性格とナルシズムの権化のような性格の少女だった。
あらゆる次元軸は存在し、奇妙な捩れた世界として実体する。
レイアはオレが十代の頃に描いた小説の登場人物の一人だった。
オレが創作して作った物語は、どうやら何処かの世界で現実に存在し、その世界の方がオレに波長を送って、実在を証明するかのように創作物として書かせた。
どうやら、世界中における創作物は何処かの世界に本当に実在するみたいで、小説や漫画、映画などの形を取って波長を送り続けて、他の世界に誕生させようとする意志を持つらしい。
そういった多次元世界の存在とその構造に気付いたのは、オレの持つフェンリルという次元移動の能力故の特性で、レイアの方もその能力の性質上、オレの存在に気付いたらしい。そして、互いに出会うべくして出会ってオレ達は同じ世界に存在するという“奇跡”を果たした。
レイアはまるでオレのさかしまの影のような性格をしていた。
オレの深層心理を体現したような性格。
強い自己嫌悪の塊であるオレとナルシズムの塊であるレイア。
あるいは同じ物の別側面を照らし合わせたに過ぎない所謂、存在。
オレは自身の能力で、彼女をこの世界に呼び込み、彼女は彼女自身の能力によって、この世界に自身の肉体を実体化する。
「この肉体は凄く便利ね。いつまでもこの世界にいたいわ」
「そうするといい」
そういって、彼女はオレの身体を透過する。
彼女が現実において暮らしている世界は、次元砂漠アイス・エイジのように近しく臨在する次元とは違って、おそらくは大宇宙の裏側くらい遠い次元によって隔たれているので、彼女とオレの能力によって、やっと彼女は実体化出来る。
「さて。早速だけど、レイア、君に頼みがある。オレではとても出来ない」
「何？」

「ブラッド・フォースの居場所が全然、分からない。君のタロット・カードで占ってくれないか？」

†

　原宿の裏路地を何度もある歩数によって行き来出来る場所。
　何度も路地を曲がるうちに、その場所は現れる。
　昼が数十分足らずで夕闇が差して、夜闇へと変わる。
　蝙蝠などが現れてくると、原宿の隣に多い尽くされた異世界『裏・原宿』に行く事が出来る。
　しばらくすると、骸骨で出来た桟橋が見えた。
　不気味な街が広がっている。路地の所々には影の奥から得体の知れない生き物が手を伸ばしている。
　レイアは物珍しそうに、この光景を見ていた。
　此処の地下層四階に、ブラッド・フォースがいる筈だった。
　オレは幾つかある、地下へと続く道の路地を曲がって進んでいく。
　思えば、この世界は夢の中のようだった。悪夢のような、楽しく幸せで安息感のある世界を体現したかのような。あるいは子供の頃、思春期の頃、この世界の摩訶不思議さを感じた時の想像をそのまま体現したかのような。
　夢の迷宮の中を進んでいくような感覚。
　深層心理の奥底へと向かっていくかのような階段。
　階段は竜の背骨の形をしていた。それが螺旋状でくるくると下へと回っている。
　不可思議な事象だが、この『裏・原宿』の中においてはオレのフェンリルの空間把握が使えない。もしかすると、この裏・原宿とは人間のイメージ世界の中において実体化された場所なのかもしれない。ゴシック芸術、死への憧憬、怪物のイメージをそのまま実体化させた空間こそがこの世界なのかもしれない。
　原宿というファッション街、ゴシック・ロリィタの聖地からこの場所へと向かえるのは、原宿はおそらくはそういった人間の魔物への世界への憧れと波長が合って、次元同士が重なり合う事が出来るからなのかもしれない。
　レイアは何回か占い続けて、迷路と化しているルートの一定の道を進んでいき、地下四階にあるその場所へと辿り着いた。
　そこには中央に朽ち果てた大聖堂が聳え立っていた。
　周囲にはボロボロの巨大建築物と枯れた樹木が並んでいる。
　空には薄っすらと明かりが輝いていた。
　オレはレイアに誘われて、大聖堂へと向かう。
　大聖堂の中は朽ち果てたパイプオルガンが置かれていた。
　そして、砕け散った球体関節人形の部品が大量に転がっている。
　頭が消失したキリストが磔刑にされた、ボロボロの十字架が壁に張り付いていた。

「いるわ」
　レイアはそれだけ静かに告げた。
　オレも肌で感じる。
　居る。
　オレ達はパイプオルガンの元へと向かう。
　オルガンの近くの壁に切れ目がある。
　レイアはそれを押すように言った。
　隠し扉になっており、オレ達二人はその部屋の中へと入った。
　凍える冷気に刺されるような感覚。
　射抜く視線が此方を向いている。
　暗闇だ。眼が慣れるにつれて、次第に輪郭がはっきりとしていった。
　わずか四メートル程、離れた場所にいる相手。
　近付くだけで、心臓をナイフで刺されるような感覚。
「此処の場所を何処で？」
　相手は静かにそう問い質した。
「此処にいるレイアの力で」
　見えないが、確実に空中に何かが浮かんでいる。触れると死ぬであろう何かがだ。
「此処は僕が一時的に家にしている場所だよ？　せめて大聖堂で話そう」
「分かった、部屋を出る……」
　彼にすれば、面倒臭く払っただけなのだろう。けれどもオレは強い激怒を向けられて、殴られたような気分になる。
　素直にオレ達二人は大聖堂へと戻る。
　しばらくすると、彼はちょっと待って着替えるから、と言って数分後、大聖堂の中に姿を現した。
「部屋着を着ていたんだ。それに、知っている通り僕は人が怖くて。でも、久しぶりだね」
　青い悪魔、ブラッド・フォースは水色のサックス・ロリィタに全身を針金のような物を巻いた姿でオレ達の前へと姿を現した。
「久しぶり。最強の殺人鬼」
「その呼び方はやめてくれないかな？　僕は本当に迷惑してるんだけど」
「そっか、すまない。ブラッド」
「そこに比較的綺麗な椅子があるから、それ使って。それからお茶やお菓子とか何も用意出来ないけど……」
　オレ達は埃を浴びていない、比較的綺麗な椅子に座った。
「しかし、何故、此処を？　普通は辿り付けられないようになっている筈だけど」
「隣にいる彼女の能力だ。レイアって言う」
「なるほど」
　それだけ聞いて、ブラッドは特にそれ以上、興味を持つ事はないみたいだった。

「処で、今日は相談があってきたんだけど。ドーンいるだろ？　能力者同士の傭兵組合。彼らが君をまた討伐したいらしい」
　ブラッドは眉間に皺が寄り、露骨に嫌そうな顔をした。
「彼らはまた僕に人殺しをさせたいのか。いつもそうだ」
「君がアイス・エイジを滅ぼした事で憤っている人間がいる。面子の問題かもしれないが。あの件で、数百万人以上の人間が死んだ。インソムニアに頼まれたとは言え、君はまたドーンの怒りに触れる事をしてしまったらしい」
　ブラッドは顎を手で触れて、少しだけ考えているみたいだった。
「僕があの連中が余り好きじゃないのは。僕を殺人鬼としか思っていないからなんだけど。昔からそうだった。眼の敵にして狙ってくる。理解が出来ない。僕は殺意や敵意を向けられなければ、殺すつもりは無いのに」
「君が圧倒的に強いのと。殺す時の規模が酷いからだろう。いつも万単位で殺すか、その界隈で最強と呼ばれている奴を簡単に殺してしまう。それが恨みを買う原因じゃないかな？」
「だから、僕は人間が嫌なんだ……。もう殺したくないのに、また僕に人殺しをさせようとする。それに僕の能力は僕自身でも完全に制御出来ているわけじゃない。おそらく、……おそらくは殺人鬼ブラッド・フォースの伝説はドーン側の責任もあると思うんだ。別に僕は最強でも冷血でも無い……。『クラシック・ホラー』が強過ぎるだけで、僕自身が強いわけじゃないのに……。僕の身体は老化現象が止まっている事以外は、身体能力に関しては特に普通の人間で。刃物で切られれば血が流れるし、風邪も引く。僕は化物じゃない」
「オレはそう思っている。そう思っているから、君に普通に接している。そして、君がとても傷付きやすい事も知っている」
「僕は……、僕は人形だよ。感情が無い。他人の痛みが分からない。喜びとか悲しみとかの実感が出てこない。僕はずっと感情が無くなったままだ。能力者になった時から。もしかしたら、あの時から……」
　あの時。それは彼の生い立ちに深く食い込んでいる心的外傷だ。
　そして、彼の能力が発現したのもその事に深く関わっている。
「処で、此処の大聖堂から出て数百メートルの建物の中に、今、メビウス様がいる。会っていくかい？」
　ブラッドが唯一、尊敬している者。円環、メビウス・リング。
　そいつはこの世界における概念上、神と呼ばれる存在だった。
　いつからか、誰が言い出したか分からないが、神を指す言葉は、そいつを指す言葉だった。
　神話でもなく、宗教でもなく、それらの概念ではない、とにかくそいつは『神』だった。
　この世界の秩序を維持している神だった。
　ドーンに所属している者達は何故か、そいつが神である事を知っている。
　大聖堂の裏に、巨大な四つ首の邪神のような姿をした像を象った建造物があった。
　ブラッドはそこに案内する。
　中は真っ黒なタイルが並んでいた。仄かな光が建物の中に差し込んでいる。

　そこに、一人の女が立っていた。いや、女の姿をした者というべきか。
　くるくると捩れた縦ロールの金色の髪。他の不純な色が一切、混ざらない漆黒のゴシック・ロリィタの衣装。年齢は十代の少女のようにも見え、四十代の淑女のようにも見える。
　絶世の美女のようにも見え、女装した美男子にも見える顔。
　メビウス・リングがそこに立っていた。
「おや、お前はいつかの」
　メビウスは物珍しそうに此方を見ていた。
　レイアが不可思議そうにオレに問うた。
「あれは何……？」
「オレにも分からない。ブラッドに聞いてくれ。取り敢えず、この世界の神か。もっとも神に近い何からしい。オレにも分からない」
　オレがメビウスについて知っている事は、空間を捻る能力者である事と、生身ではなく球体関節人形の肉体を有しているという事だけだ。
　そして、何故か皆、そいつが『神』であるという事実を知っているという事だけだった。
　レイアはオレにだけ聞こえるように囁く。
「闘ってみたいわね。面白そう」
　レイアは何処か好戦的だ。自分自身が何処まで強いのか試してみたいのだろう。
　オレは止めておけ、とだけ言った。
　ブラッド・フォースとも戦ってみたいとレイアは言った。
　オレは少しだけ呆れ返った。
　レイアはなおも楽しそうにオレに聞く。
「あの二人、どっちが強いの？」
　オレは少しだけ考えてから答えた。
「メビウス・リング……をブラッドは尊敬しているが。多分、ブラッド・フォースの方が強い。……しかし、メビウスの力は何処まで強いのか未知数だな」
「じゃあ、メビウスの方と機会があれば手合わせして貰おうかなあ」
　そして、オレは元々の目的を思い出して、メビウスとブラッドの二人に聞いた。
「なあ、お前らさ。フレイム・タンの居場所を知らないか？」
　彼らはオレの質問に首を傾げる。
「フレイム・タン……？」
「ほら、アイス・エイジで会っただろう。ブラッド、君にも何か色々言ってなかったっけ？」
「忘れたよ」
「そうか……」
　話はそれっきりだった。

†

オレはブラッドに、なるべくドーンの連中と戦わず、身を隠すように言った。
ブラッドは面倒臭そうにしていたが、了承してくれた。そしてそのまま、彼らとは別れた。
レイアは元の世界に戻る気はなく、しばらくこの世界の連中と戦ってみたいと言い出す始末だった。
オレはウォーター・ハウスと会って、残るＡクラスのアヌビスとデス・ウィングの二人の拘束を検討する事に決めた。
裏・原宿の地上にまで戻る。
適当に服を見ようと思って、ファッション街へと向かった。
此処では様々な魔術具が売られている。レイアは強く興味を示した。
此処には様々な能力者が自身の能力を道具に込めて流通させている。
普通の服に『アミュレット・コーティング』と云う防御壁の魔力を込められるのも、この街が一番、一般的だ。此処には武器や防具などにエネルギーを込める能力者達が集まっているからだ。
オレは適当に店に入って、何かよい品物が無いか探した。
武器や防具でなくとも、単純に生活品や娯楽品で面白いものがあるかもしれない。
街に近付く。商店街だ。建造物はヨーロッパの街並みそのものだが、何処か不気味で不可思議な趣をしていた。
魔女の服を着た骸骨が楽しそうに売り子をしていた。
何でも骨片ジュースというものらしい。
空を見れば、蝙蝠が沢山、舞っている。赤い満月が地上を照らしていた。
ベンチには亡霊の恋人同士が睦まじく七色のアイス・クリームを食べていた。
何処からか悲鳴のコーラスが聞こえてくる。
ナイフをくるくると回している道化師が玉乗りを行っていた。
その隣では女道化師が小さなガーゴイルの飛び出す喇叭を吹いている。
空には骸骨鳥が赤青緑の風船を抱えて飛び回っていた。何処かの店のバーゲンセールの開催を示す看板を首に抱えている。
オレ達は取り敢えず、ドアが真っ赤に血塗られたヴァンパイア・カフェの中に入る事に決めた。
カフェでは口の中から牙を生やした給仕が注文を聞いてきた。
オレ達は取り敢えず、スパゲッティー・ミートソースの大盛りとアイスティーを頼む。
しばらくして、注文した物が運ばれてくる。スパゲッティーもアイスティーも、何処か赤黒い血の色をしているように見えた。そういえば、店中が赤と黒によって彩られており、カーテンもテーブルも証明も真っ赤だった。ラベンダーのインセンスが焚かれている。
レイアはすぐに大盛りを平らげると、追加の注文を行った。
待ち時間の間、彼女はタロット・カードを引いていた。
「処で、ブラッド・フォースだけど。彼を狙っているドーン。戦う事になるみたいよ」
「戦いは避けられないのか？」

　彼女はケルト十字法というスタンダードな占い方で占っていた。
「運命がいずれそうなるみたい。だから、早かれ遅かれそうなる。宿命みたいなものね。ブラッドを狙っている、……彼は、おじいさんなのかしら？　いずれそうなる」
「そうか、ハーデスが年寄りって事まで分かるのか。君のタロットは何処までこの世界を把握出来るんだ」
「さあ？　とにかく、引いた図に出ている。私はそれを読んでいるだけね」
「いつ、戦うんだ？」
　彼女は、今度はホロ・スコープ法という十二枚で占うやり方へと変えた。
「すぐね。来月くらい？　やっぱり避けられないみたい。来月避けても再来月。その運命を捻じ曲げるように変えても次の月。引き伸ばしていくだけでいずれ、戦わないといけない。ねえ、このおじいさん、何か病気？」
「病気？」
「ええ。余命幾許も無いみたい」
「……成る程な」
　自分自身の命の価値、おそらくは老人はそれに関して思考している。
　そして、過去の人生を思い浮かべて。今、何を為すべきかを考えているのだろう。
「あら、お嬢さんと一緒なのね」
　オレはぎょっとする。
　見ると、ルサールカだった。
「……こんな所で会うなんて珍しいな」
「そうね。私は此処に買い物に来たんだけど」
　嘘だろう。彼女の能力を考えれば、オレを見張っていた可能性はある。
　自分自身のドッペルゲンガーを作り出す能力者ルサールカ。
　彼女のドッペルゲンガーは、オレの空間把握の能力でも感知しきれない上、此処はオレの空間把握が通じない。
　オレは至って平静を装って、適当に話を合わせる事に決める。
「しかし、本当に偶然ってあるんだな」
「偶然じゃないかも。ねえ、此処にデス・ウィングの偵察に来たんだけど。貴方もそうじゃないの？」
「デス・ウィング？　残るＡランクの名前だよな」
「そう。デス・ウィング、日本の名前では水月って呼ばれているらしいわ。彼女は、此処、裏原宿の屍峠の近くにひっそりと店を出しているのよ。ファイルにも明記されている。だから、貴方も彼女の偵察に来たのかと」
「ああ。そう、その通りだ」
　そうだった。ウォーター・ハウスから聞かされた、ハーデスのブラッド・フォース討伐の事で頭がいっぱいだった為、その事をつい忘れていた。
「たまたま、貴方がこの店に入るのを見て。私は用事を済ませた後、貴方が入ったこの店に入っ

たのだけど」
「用事？」
「アリス・アウアアの新作が出たのよ。だからそれを原宿の方で買って。此処、裏・原宿でアミュレット・コーティングを施して貰ったんだけど」
「ああ、そう……」
「お嬢さん、隣、いいかしら？」
「お断りするわ」
　そう言って、レイアはオレと同じ席に料理ごと移動した。
　ルサールカはレイアが座っていた場所へと腰を下ろす。
「あら、嫌われたものね」
「ああ、彼女はオレ以外には余り好意を持たないんだ。気にしないでくれ」
「他人が嫌いなのよ。男は気持ち悪い。女は胸糞悪い。それだけよ」
　レイアは淡々と二皿目のスパゲッティーと追加したチキンナゲットを食べ続ける。
「フェンリル。貴方のガール・フレンド？　とても綺麗な子ね」
「まあ、相棒だな」
「もしかして、貴方達、……」
「そう恋人よ、お付き合いしているわ」
　レイアはいけしゃあしゃあと言い放つ。ルサールカに対して露骨に嫌そうな眼を向けていた。ルサールカはからかいがいが無い子ね、と詰まらなそうな顔をする。
　オレは何かフォローを入れようと思ったが、面倒臭いのでやっぱり止めた。
　ルサールカは苦笑する。
「貴方達、何だか兄弟みたい。姉妹かしら？　でも恋人と言われても納得する。だって、二人共、性格が合いそうなんだもの」
「そう、オレ達は性格良いからね。明晰で繊細で優しい者同士、気が合うんだろう」
　オレはアイスティーを追加で注文した。
「羨ましいわ」
　ルサールカはカルボナーラとアイス・コーヒーを注文する。
「フェンリル。貴方はおそらく不思議な可能性を持っているのかもね。貴方は自分では気付かないかもしれないけれども、ひょっとすると、人間が嫌いな者の心に入り込む事が出来るのかもしれない。驚いたわ。ウォーター・ハウスが気に入るなんて。あの男も散々、私やハーデスを嫌っているっていうのに」
「ヒネくれた者同士、惹かれ合うものがあるんだろう。ウォーター・ハウスか。彼も最初は正直、面倒臭かったけれども、面白い奴だった。オレは彼のような奴は好きだよ」
「あの、人を人ともまるで思っていない奴が？」
　ルサールカはアイス・コーヒーにミルクと砂糖を入れる。
「そういう処が気に入ったんだ。オレは破壊的、自滅的、虚無的、あるいは狂人が大好きなんだろう、多分。世界は全部、俺の敵だとか、人間は生きるに値しないとか、自分の都合の為なら他

人なんて幾ら死んだって構わない、っていう事を有限実行している奴は比較的、オレは好意を持つな。そいつなりの人生観、思想を持っているなら最高だ」
「あら、それなら私は普通過ぎるかも。残念だわ」
　ルサールカはオレの今の言葉を吟味して、レイアの顔を眺めながら、一人頷く。
「言っておくけど私は性格良いわよ。他の人間はみんな性根が腐っているわ」
　レイアは険のある眼で彼女を見据えていた。
　そして、おもむろにタロット・カードを取り出す。
　そして、何枚かカードを引き当てて、そのうちの二枚をルサールカに向けた。
　レイアはクスリ、と笑う。
「太陽の逆位置と死神の正位置が出ている。貴方、近いうち気を付けた方がいいわ。貴方の人生において、決定的な敗北が訪れる」
　ルサールカは破顔一笑する。
「占い？　お生憎様。先ほどこの辺りで、よく的中する事で評判の占い師に相談してきた処よ。ルーン・ストーンも使って貰った。すると、私は此処、三ヶ月間は健康、金銭、様々な面で付いているらしいわ。でも、恋愛運が悪いみたい、それだけよ」
「そう。でも、一応、警告はしたわ」
　レイアはそう言うとタロットを仕舞った。
　レイアのタロット・カードの事をルサールカに言おうかどうかオレは考えた。
　彼女のタロットは、オレのフェンリルの能力を媒介にして、彼女自身の能力エタン・ローズを掛け合わせて占っている、時間軸、空間軸を視る力を持っている。単なる“裏無い”ではなく、この世界の法則を能力によって演算的に導き出している。
　ひょっとすると、レイアのタロットは適当に選んだ札をそのまま、世界全体の可能性に影響させる力を持っているのかもしれない。運命を捻じ曲げる力、それが彼女とオレの能力を掛け合わせて生まれた能力なのかもしれない。
　そのまま、適当な談笑が続いた後、オレとレイアはルサールカと別れた。
　ルサールカは何かとオレ達と共に行動したがっていたが、レイアが露骨に嫌そうな顔をした為、彼女は仕方なく折れたといった処だった。
　ルサールカと別れて、十数分後、レイアはぽつりと言った。
「あのおばさん、気持ち悪いわ。ストーカー趣味まであるみたい。私達、視られているわよ」
「知っている。彼女の能力は自身の分身を生み出す。何処に潜んでいるのかオレには分からない」
「その分身だけど、倒す？　私には位置が分かるわ」
「そうか、裏・原宿ではオレの空間把握は使えない。でも、倒すのは止めよう。放っておいた方がいいんじゃないのか？」
「馬鹿よね。自分で自分の首を絞めているわ」
　オレ達は彼女の前で、一切、ブラッドの事について触れなかった。
　あのメンバーの中では、ウォーター・ハウスはいい。ケルベロスも嫌いじゃない。けれども、

彼女は正直、不快な処もあった。周囲の人間全てを監視しているかのような。
　オレ達は屍峠の辺りに行く。
　そこは草原で、山脈へと続いていた。
　腐臭が漂っている。所々に、ゾンビがうろうろしている。ゾンビ達は此方に関心を寄せず、腐った鼠の死骸を取り合っていた。
　レイアは、甘名、私から離れないでね、と小さく呟いた。
　沼があちらこちらに口を開いていた。足を踏み入れると、おそらく底無しに沈んでいくだろう。瘴気が一面に満ちている。
　そんな場所をしばらく歩くと、一軒の店がぽつりと立っていた。
　二階建ての塔だった。石畳で積み上げられた店だ。
　入り口には商い中と書かれた看板が吊り下げられている。
　オレ達は店の中へと入った。強烈な香が漂ってくる。幻惑剤のような香りだ。
　そこはガラクタばかりが並んでいた。
　埃臭いわね、とレイアは言う。香と共に、万年溜まった埃の香りも充満していた。
　カウンターでは店主が開いた本に突っ伏して寝ていた。
　オレ達は店主が起きるまで、適当に店の品物を手に取ってみる事にした。
「このナイフ。危ないわね……」
　レイアは何の装飾も無い何気ないカッター程の大きさのナイフを手に取る。
「持ち主の生気を吸い取る。持っていると、体力がまず落ちる。内臓もやられるわ。抗体も減って、変な病気にかかるかも。持ち主に取り憑くみたいだから、捨てたりしても戻ってくるし、並みの魔力じゃ壊せない。でも、これ、危ない能力を持っているみたい」
「危ない能力？」
「切りたい物体を切るようにイメージするだけで切れる。相手の強度無視。強いわ」
　オレは変な鎧の上に乗っかっている、髪飾りをレイアに見せた。
「これもヤバイ。もし自分の頭に付けたら、自分自身の周囲の人間が死ぬ、何だこれ？」
「多分、それ周りの人間の幸運を吸い取るのよ。個人主義者にはぴったりかも、買おうかしら」
「オレがいない時に身に付けてくれよな。この本なんてどうだ？　なんだこれ？　ページが無限に増えていくんだけど」
「それ、ページの中に大量の怪物が封印されているみたいね、貴方の言っているドーンのメンバー程度で勝てるのかしら？」
　見れば見るほど、胡散臭い物ばかりが、無造作に並んでいた。
　店主は相変わらず、起きやしない。
　しばらく店内を物色しての感想は一緒だった。
「此処の店の品物は買いたくないわね、頭がおかしいとしか思えない」
「よっぽどの狂人なんだろうな、あそこで眠りこけているあいつは」
　オレは店主に近付いた。
　店主はゆっくりと顔を上げた。

髪の長い女だ。くすんだ飴色がかった金髪を腰元まで伸ばしている。
ブラッドやメビウス、それにオレに引けを取らない程の美貌だ。
まだ、眠そうな顔で彼女は此方を見ていた。
「すまない。眠っていた。今は……、」
彼女は壁に掛かっている柱時計を見る。
「おかしいな、時計が戻っている。……」
そう言いながら、カレンダーの日付を見た。
「なあ、つかぬ事を聞くが。今日は十二日の夜だろうか？」
「……十五日の夕方よ、馬鹿じゃないの？」
レイアは呆れた顔をする。
「そうか。もう三日も眠りこけていたのか。何しろ、食事も排泄も私には必要無いからな。店内に時計とカレンダーを無くしてしまうと、本当に時間の止まった世界の中に閉じていってしまう。客人、何かお求めか。勿論、見物だけで一向に構わないが」
写真と同じ顔だ。
デス・ウィング、水月翔子は汚いニット帽に汚いセーターを着込みながら、何か面倒臭そうな顔で此方を見ていた。
「あんたがデス・ウィングか。オレはドーンの刺客なんだが、取り敢えずお前を拘束して、ネオ・アーカム・アサイラムにぶち込まなきゃならないんだが、来てくれるか？」
「ああ。アンブロシーか。ハーデスの『アトミック・ソード』でも私は死ぬ事が出来なかった。アサイラムの全能力を動員しても私は生きている。だから、アサイラムにもう用は無いよ」
「成る程……。ハーデスと戦ったのか？」
「ああ、……」
水月は面倒臭そうだった。
「私は別に人殺しが楽しいわけじゃない。私はもう返り討ちにする事すらする気が起こらないから、放っておいて欲しいと伝えてくれ」
「ああ、そうする。オレも正直、ドーンは馬鹿だと思っている。ハーデスはブラッド・フォースを倒すと息巻いているらしい。お前、ブラッドよりも弱いんだろ？　でも、ハーデスよりはよっぽど強いんだろ？」
水月は首を縦に振る。
「ブラッド・フォースか。懐かしいな」
水月は顎に手を置く。
「一度、全力で戦った事がある。もう二十年以上前だろうか。ブラッドは数日間、私を殺し続けて、私を殺せなかった。私もブラッドに傷一つ与えられなかった。勝負としては一応、引き分けなのかな？　でも、ブラッドは私を殺している間も勝手に食事し出すは、眠りだすわ。酷い奴だった」
「当たり前だろ。お前はおかしい」
「でも、あんなに死んだのは始めてじゃなかったかな。死ねると思ったんだが、無理みたいだ

った」
　レイアは眉を顰める。
「不死身なの？」
「ああ、うん。それも私よりも不死身の能力者には会った事が無い」
「ああそう。そう言うなら、試してみるわ」
　レイアは有無を言わせなかった。
　彼女は水月の背後に回り、躊躇も無く水月の頭を両手で掴むと、首を異様な方向へと捻じ曲げる。そしてそのまま、腹を全力の拳撃でぶち抜いて貫通させる。
　血がまるで出ない。
　レイアは感心したような顔をした。
　ぶち抜いた腹は、血の代わりに霧が流れ始めた。
　首の方も、霧が溢れ始める。
　いつの間にか、レイアはオレの隣にいた。
「少しくらい、抵抗したっていいじゃない」
「すまんな。お嬢さん。貴方の速度に付いていけなかった」
　水月の首は徐々に戻っていく。腹の孔も、服ごと復元されていく。
「今度は本気で私と戦わない？　表に出て」
「興味無いよ。また、今度でいいかな？　今日はそんな気分じゃない。私は闘争心が余り無いんだ」
「つまらないわ」
　水月の肉体は完全に完治していた。
「霧なのね。……血の代わりに」
「そういう事。私の肉体は霧で出来ている。あるいは、酸素などの大気で出来ている。今みたいにブラッドに散々、バラバラにされたり、膾にされたり、孔だらけにされたけど治った」
「なるほど。アンデッドだとかゾンビだとかそんな次元を超えているわ。羨ましいわね」
「そうでもないよ、途中から死にたくなってくる。自殺も出来やしない」
「永遠の若さと美しさがあるじゃない。羨ましい限りだわ」
「レイア」
　オレは呟いた。
「君もこの世界じゃ、不死身に近いぞ。オレと君の能力の掛け合わせで君は精神エネルギーとして実体化しているからな。っていうか、君も不老不死に近い。この世界に居続ければ、永遠の若さだ」
「そう。元の世界に戻らずに、此処に居ようかしら」
「でも、オレから離れられないぞ？　いいのか？」
「そうね……」
　彼女は満更でも無さそうだった。
「貴方が私の行きたい処に付いて来て、付き合ってくれるのならいいかもしれない」

「世界の果てだろうが異次元だろうが別にいいぜ。どうせ、オレ達は一卵性双生児のように、性格が似ているらしいからな」
　水月は笑い出す。
「婚約指輪でも買わないかい？　安くしておく、ただし、呪われているけどね」
「どんな風に呪われているの？」
　水月は、棚から小物入れを取り出す。
　中には、蛇の形をした二つの指輪が入っていた。
「持ち主二人の魂を繋ぐ。異なった精神同士を融合させる。まあ、脳と脳を結合させるような感じかな？　お互いの記憶情報が漏れ出す、隠し事なんて出来なくなるけれども、誤解も無くなる。どうだい？」
「あんた、いつもこんな悪趣味なものばかり客に売り付けているのかよ」
「悪趣味じゃない。需要があるから供給として提供しているだけだよ」
　今度はオレが水月の首をへし折りたくなってきた。

†

　オレとレイアは水月の店の二階を、今日は宿にする事になった。
　水月は何故かオレ達二人が気に入ったらしく、悪意しか感じない品物を売り付けようとしたが、丁重に全て断った。ひょっとしたら、自分を殺しに来た殺し屋に嫌がらせしたいだけかもしれない。
　そんな風にして、オレ達二人がいい加減、彼女の悪ふざけに付き合いきれなくなってきて、帰ろうとすると、今度は泊まっていかないか、と提案された。
　オレは正直、帰りたかったが、レイアが断る理由が無いからと了承した。
　そして、二階へと案内された。
　二階には、畳が敷かれていて、丸テーブルの上に急須が置かれていた。
　そして、古びた８０年代頃のＴＶが置かれている。
「パソコンが欲しいんだが、使い方が分からない。オークションで品物を売りたいんだけどねえ」
「……此処の店って物買いに来る奴っているのか？」
「いるよ。『セフィロト・ロード』のアミュレット・コーティングしたワンピースも入荷する。それはすぐに売れるけどね。それから古書。これもよく売れる。他にも、此処でしか扱っていない、特殊な武器もよく売れる」
「呪いのアイテム系は？」
「それも売れる。この世界には意外と物好きが多いんだ。大抵、この店に来る者は大金叩いてでも、何か買って帰る」
「意外と狂人はそこら辺に転がっているのよね」
　レイアが感慨深そうに言った。
「処が一見、まともに見える者程、狂った品物を買っていく。人間の心は暗黒の海溝だと思うよ。女の生首とかもよく扱うけど、普通の人間が買いに来たりする。あとは好きな相手を虜にする薬かなあ。相手は実際は発狂しちゃって、薬を与えた者以外、人間と認識出来なくなっちゃうわけなんだけど。他の人間は怪物とか植物に見えてしまう薬だ。他には、死んだ人間をゾンビとして甦らせる香水、実際は動く魂の無い肉人形なんだけれども、これは本当によく売れる。普通の人間ほど、そういう品物を欲しがる。嫌いな奴を呪殺する護符とかもね」
　人間の心は限りなく美しいから、私の店が儲かるんだと水月は言った。
「そうか、意外だな。なら、店の中はちゃんと掃除した方がいいんじゃないのか？　埃だらけで客に失礼なんじゃ？」
「埃？　違うぞ。あれは品物の魔力を封印する強力なパウダーだ。他にも、床に幾重にも魔方陣を描いている」
「魔方陣はともかく、パウダーは気付かなかったわ」
　レイアが舌打ちした。
「単なる埃に見えるように調合しているんだよ」

「私ともあろう者がって事よ」
　相変わらず、レイアはプライドが高かった。彼女くらいプライドが高いと生きていく事そのものがストレスになるんじゃないかと心配してしまう上、オレの影の部分に確実にあるかもしれない感性だという事実に驚愕してしまう。
　がちゃりと。
　玄関の扉が開く音がする。
「ああ、また客人が来たようだ。待っていてくれ、接待する」
　水月は階段の下の辺りでオレ達を呼び付けた。
「友人だよ。君達も一緒に顔を合わせないか？」
　オレ達は一階へと赴く。
　玄関の前では、二人の人間が立っていた。
　一人は十代半ばくらいの少年で、もう一人は二十代半ばくらいの青年だった。それぞれ、何処のものとも知れない民族衣装を身に纏っている。
「やっほー、水月」
「会いに来たわよ」
　水月は嬉しそうだった。
「へえ、貴方達は見ない顔ねえ。始めてみるわ、あたしはナーギャ。この子はエイジス。二人共、水月の店の常連よ」
　ナーギャと名乗った短髪の青年は女言葉だった。
「あたし達は近くのサーカスで、ダンサーをしているわ。ドラァグ・クイーンのダンサーなの。よかったら見に来ない？　沼の中で蜃気楼のように漂うサーカスよ」
「そうかい。気が向いたら行くよ」
　ドアがまた開く。
「今日、五人目の客か。珍しいな」
　水月は言った。
　黒い影の塊のような大男だった。眼だけが異様に光っている。
　大男は棚から幾つか商品を取ると、水月の元へ向かって、精算を済ませた。
　そして、何事も無かったかのように店を出て行った。
「ふう、そろそろ。店仕舞いするか。今日は色々、あの客人に買って貰ったし。君達四人とも、二階に上がらないか？　お茶は用意している。茶菓子は無いが」
「ケーキだったら買ってきたよ」
　エイジスは袋を水月に見せた。
「おお、気が利くな。では、行こう」
　オレ達四名は水月と一緒に、階段を上がった。
「そういえば、先ほどの黒い男は何者だ？」
「客の素性に私は関知しない事にしている。素性を語りたがる客も多いけどね。でもまあ、買っていった品物はと言うと。人間を数百人単位で呪殺する為のマジカル・オイルと、魔力増幅用の

アサメイ。それから幻惑剤と筋弛緩剤。撃った相手を確実に腐らせて殺す傷が治癒しない弾丸に詰める火薬と、人口式神が何体か。蠱毒で生き残った仮死状態の百足と蜘蛛とゴキブリ。結界用の針。……呪術師か何かだろう。人でも呪い殺すんじゃないかね」
「そういう客ばっかりなのね」
　レイアは言う。
「ああ、そうだね。今回は比較的安い物ばかり買っていったよ。粗悪品も多かったから、副作用で返りの風って言う、呪術の際に自身や周囲にも災厄が振り抱えるタイプの物ばかりだったなあ。もっと高い品物買っていけばいいのに」
「ねえ、私も何か買おうかしら？」
「置いてあるものなら何でも売るよ」
　レイアはにっこりと満面の笑みを浮かべて、此方を見た。
「ねえ、甘名。貴方の貯金って今、幾らくらいあるの？」
　オレは唇を引き攣らせる。
「レイア、お前……。ドーンに登録してこい。そして上位ランクの相手を狩りまくればいい。その賞金で買ってくれ」
「そう、それもいいわね。でも、いざとなったらお金、貸してくれない？」
「どうせ返さないつもりなんだろ？　……オレの生活及び、服の購入、武器防具の購入に支障の無い程度だったら、やるよ。どうせ金なんて幾らあっても使い道が無い」
　オレはレイアに自分の預金の大体の額を言った。
　そして、水月に店に置かれている上位の品物の金額を訊ねた。
　とてもオレの今の貯金では買えない事だけは分かった。
　レイアは残念そうに、地道にドーンに登録して、賞金首を狩り続ける決意をした。
「そういえば、この店に来る途中、沼の大木の陰に人が隠れているわ。この店を監視しているみたい。此処から見える大木よ」
　ナーギャがふと、それを口にする。
　ルサールカだろう。正確に言えば、彼女の分身か。
　水月は窓を開ける。そして沼の辺りを見た。
「確かにいるな。しかし、害は無いようだ」
「始末しておいた方がいいんじゃない？　後々、面倒な事になるかもしれないわよ？」
　レイアは冷ややかな眼で言った。
　それもそうだな、と水月は指先をくるりと回した。
　途端、沼の辺りから悲鳴が上がる。ルサールカの悲鳴だ。
「何をやったの？」
「ああ、ちょっと私の能力を使った。心臓の辺りが抉れているだろうね」
　そう、とレイアは出されたお茶を啜った。
　エイジスは茶菓子の袋を開いた。
　お茶会は楽しく続いた。

†

　ナーギャとエイジスの誘いでサーカス小屋へと向かった。
　臓物の草原にあるサーカス小屋だ。
　一面に暗い光一つ無い草原が広がっている。遠くには山々が見えた。
　地面にはバラバラになった人間の肉片が散らばっている。肉食動物が徘徊しているのだという。此処の草原は、徘徊する獣除けの臭いを放つ香水を身に纏って、歩くらしい。
　水月は言った。此処は自殺者の草原でもあるのだと。
　自分自身の人生において、価値を見出せなかったと思い込む者が此処にやってきて、肉食獣の餌に為りたがるのだという。
　そして、この草原は微生物が極端に少なく物が腐る速度が異常に低いという。
　だから、腐敗臭が一面に漂っていた。
　エイジスは冥府への案内人のようにオレ達を誘導する。
　その隣に、ナーギャと水月が楽しそうに歩いていた。
　オレとレイアは神妙な顔をしながら彼らに付いていく。
　大体、水月の店から３キロほど歩いた場所だろうか。
　それはサーカス小屋だった。
　大きなサーカス小屋だ。幾つかのテントが並んでいる。
　テントの隣では、象やライオンの檻があった。
　それから、よく分からない得体の知れない生き物も沢山、檻の中に入っていた。
　ナーギャとエイジスは舞台に上がるからと言って、オレ達と別れた。
　サーカスへの入場料は千五十円だった。１０ドル紙幣などでも支払えるようだった。ドリンク付きだ。安いのか高いのか分からない。浮浪者風の男達が値段を見て、残念そうな顔で帰る客もいた。オレは彼らに二、三千円程、配ると彼らは飛びついて喜んだ。
　レイアが怪訝な顔をする。
　ドリンクは、オレは紅茶、レイアと水月はコーラを選んだ。ホットドッグとポップコーンも付いてきた。日本円の感覚で言うならば、かなり得だ。
　レイアと水月は食べ物をそれぞれオレに渡す。いらないらしい。
　オレは太ってしまうので、半分は持ち帰る事にした。
　十数分して、サーカスが始まる。
　舞台上には妖しげな色の霧が流れ込む。
　まずは、ピエロとピエロッタの玉乗りだった。
　小さな玉に乗りながら、幾つものボールを投げる。やがてボールは松明とナイフに替わる。玉に乗った一人のピエロの頭の上で別のピエロが玉投げを始まる。更にその上にもう一人。
　続いて、象が現れた。象の上を、何頭もの馬が飛び越える。
　それから、一時間ほどサーカスは続く。

知り合いの顔を目にした。
ナーギャを見つけた。
彼は沢山の踊り子に混ざって、女装した姿で一緒に踊りを踊っていた。
幾人もの女の中で、ナーギャはまるで違和感なく溶け込んでいた。
踊りはエロスとタナトスをモチーフにしたものとの事らしく。女性の肉体美と死に化粧をした暗黒舞踏家達の共演といったようなダンスだった。肉体が艶やかに輝き、不気味な異様さと、生の持つ荒々しさが同時に存在している。
ナーギャの後に、人体切断の手品があり、その後、空中ブランコが行われた。
エイジスは美少女の姿をしていた。
彼は美少女を演じながら、空中ブランコに乗っていた。エイジスはブランコに乗って、何度も空中で回転する。エイジスの肉体はしなやかだった。
会場にスポットライトが当たる。ライトは、虹色に輝いた。
客の歓声が溢れる。
ふと、オレは観客の中に二名ほど知った顔を見つける。
知った顔といっても、リストの中だ。オレは暇さえあれば、何度もドーンの賞金首の顔写真を見続けた。
一人は西側のよく見える席。特等席みたいだ。
Ｂランク賞金首、『フリーク・リーチ』だ。
ワニと深海魚を合成させたような顔をしている。
もう一人は、東側のオレ達の近くにいるマントを深く被った異様な体格の男。
顔見れば分かる。亀の怪物である同じくＢランクの『タラスク』だ。
オレはレイアに向けて、囁く。
それは水月にも聞こえていたみたいだった。
「ああ。あの二人なら、いつもサーカスに来る。常連だよ。タラスクの方は、私の店にも来るから勘弁して貰えないかな？　よく甲羅の改造に来る。甲羅にミサイルを設置したいと」
「だそうだ、それにフリーク・リーチの方が遥かに賞金は上だ。レイアどうする？」
「わかったわ」
そう言うと、レイアの姿は消えていた。
水月は最後までサーカスを見ると言った。
オレはレイアを探しに会場を出る。
売店の方だった。既に、レイアとフリーク・リーチの戦いは始まる寸前だった。
オレは物陰に隠れて、観戦する事にした。
「お嬢さん。あんたは俺が何なのか分かっているのかなあ？」
「さあ？　貴方を倒せば、ドーンっていう組織は貴方の賞金を私にくれるのでしょう？」
フリーク・リーチは鼻で笑った。
「……お嬢ちゃん。あんたは相当、強い事だけは分かる……。そして残念だが、俺もこんなグロテスクな見た目だが、強いのよ」

「そう、雑魚に見えるわ。イメチェンしたらどう？」
「考えているが、どうもそういう気分にはなれない。人体改造でもしたいとこだが、俺は俺でこの姿を気に入っているのさ。女の子にはモテないがね」
　フリーク・リーチの姿は異様だった。
　ワニと深海魚の中間のような顔。太鼓のように大きな腹、四本の手。カバやサイのような胴体に四本の足。両手の爪は異様に伸びている。口からサメのようならんぐいの歯を覗かせている。そして、四つの眼。腹にも二つの眼があるので六つの眼か。
　纏っているオーラが異様だ。
　ベスティアリーと対峙した時のような。自身の強さに揺るぎ無い眼をしている。
　まるで隙が見当たらない。一撃目が命中する気がしない。
　オレならば、戦いを挑まない。
「お嬢ちゃん、あんたの能力の名は？　俺の能力の名は『ダブル・フェイス』だ。効果は秘密だが、あんたが言うならば言う」
「そう。私の能力の名は『エタン・ローズ』。貴方の能力がどういうものなのかなんて、どうでもいいわ。貴方は私に殺される事は決定しているもの。どうせ、貴方が私に届く事なんて無いのだから」
「そうかい」
　フリーク・リーチは哂っている。
「自信過剰な能力者と女の能力者は嫌いじゃない」
　二人は動かない。
　フリーク・リーチは既に、攻撃に移っているようだった。
　レイアは構えもしなかった。
「俺を相手にする前に彼らを相手にしてくれないかな？　どうやら、お嬢ちゃんを好きになってしまったみたいだ」
　オレは気付いた。……何かが変だ。
　サーカス小屋にいた筈なのに、建物の形が気付けば変わっている。
　足元を見ると、歪んだ紫と黒のチェック・トートのタイルへと変わっている。
　フリーク・リーチの前にあるタイルから、細長い男達が出現する。
　全員、ぐしゃぐしゃの肉体をしている。ゾンビだ。それぞれ、槍や剣、斧や弓を持っている。ゾンビの兵隊は次々と現れる。
「彼らはピット・マンと言う。まあ、仲良くしてやってくれ。それから、天井のミラー・ボールは見ないほうがいい。万が一、見てしまったらお嬢ちゃんの負けだ」
　ミラー・ボール。オレは天井を見ていた。
　大きな眼球だ。眼球が浮いている。
　途端、オレの指先は少しずつ石になっていく。足の靴もだ。
　レイアは天井を見ない。淡々とピット・マンを見て、無言のままだ。
　ピット・マンはレイアの元へと向かっている。

　しかし、レイアの元へと届かないみたいだった。
　どれ程、歩いてもレイアへと届かない。彼らはぐるぐるとレイアを探し続ける。あるいは、レイアの元へと一直線に歩いていこうとする者もいるが、見えない何百メートルもの距離が開いているのか、一向にゾンビの兵隊は辿り着けずにいるみたいだった。
「何か、発動させたみたいね？　……私も同じなのだけども……」
　レイアはエタン・ローズを使っている。使っているから、ゾンビの兵隊、ピット・マン達はレイアの元へと辿り着けない。レイアは只、同じ場所に立っているだけだ。
　いつの間にか。
　レイアの脚が、フリーク・リーチを蹴り飛ばしていた。
　フリーク・リーチは勢いよく、壁に叩き付けられる。
　そして、彼は起き上がった。
　彼は両手から、何かを飛ばす。レイアはそれを難なく避けた。
「つまらないわ……。このまま、倒してしまいそうで怖い」
　フリーク・リーチが飛ばした何かは、壁に命中して、どろどろに溶解していく。
「そうかい、ダブル・フェイスのフリーク・リーチを前にした者は、大抵、俺を最後まで追い詰める。けれども、やられるんだよ。どれかにね」
　オレの石化は解けない。今や、足首まで石へと変わっている。
「これなら、どうだい？」
　レイアは立っていた場所を、即座に移動したみたいだった。
　彼女が立っていた地面が、角砂糖みたいな細切れのブロックへと変質する。
「困ったわね。……貴方、私が能力による攻撃を仕掛けてきたら、弾き返すシールドを張っているわね？」
「よく見抜いたね。『シールド・ハート』と言う。ちなみに、今のお嬢ちゃんへの攻撃は、『タワー・クライム・メルトダウン』と『パラレル・グラス』だ。みんな強い能力者だった。次の技はかわせるかな？」
「なるほどね」
　レイアは容赦無く、フリーク・リーチに廻し蹴りを入れる。そして、止めた。
「困ったわね……」
　レイアのブーツが切り裂かれていた。
　フリーク・リーチの頬から、何本もの刃物が生えたのだった。
「『マーダー・チェンソー・ブラスター』。この使い手も強かった。シールドを張れる能力者を倒す前だったから、肉体を切り刻まれて酷い目にあった。でも何とか倒せた、お嬢さんの能力、今度、使わせてもらうよ」
　フリーク・リーチは右の二つの腕を振るった。
　レイアはそれを難なく避ける。
　しかし、地面に足が触れた瞬間に、勢いよくレイアの両足が裂けた。地面から回転するチェンソーの刃が生え出ていたのだった。

　思い出した。フリーク・リーチの能力。
『ダブル・フェイス』。彼が食べた能力者の能力をコピーとして自分の中に取り込む事が出来る。そして、幾つもの能力を使う事が出来る。今や三十近い能力を有している筈だ。その中に、ドーンのハンターも少なからず存在しており、強いハンターも食べられている。
　レイアは更に、傷だらけの足でジャンプした。そして壁に飛ぶ。壁も既に、刃ばかりだった。レイアの背中が切り裂かれる。
　レイアは背中を切り裂かれながらも、拳で思いっきりフリーク・リーチを殴った。フリーク・リーチの歯が何本か砕ける。同時にレイアの拳も砕けた。
「おかしいなあ。よく撃ってこれるね。凄い精神力だ」
「残念ね……。貴方は私の能力を理解する事など出来はしない」
「そう、残念だ。もう終わりかい。お嬢ちゃんの能力なんて、食った後に理解するよ」
　フリーク・リーチは手から、何かを撃ち込んだ。今度は先ほどよりも大きな弾丸だ。レイアの顔が砕け散る。
「貴方は理解していない、貴方は私に傷一つ与えていない事に」
　レイアの背中は無傷だ。拳も傷が出来ていない。それに、フリーク・リーチは気付く。
「全部、あれは私の存在の影。貴方は私に辿り着く事なんて永遠に無いわ」
　レイアの拳から、漆黒の炎が生まれる。
『修羅蓮華』と名付けている彼女の必殺技だ。腕に纏った燃え盛る蓮。闇の中に咲く蓮だ。あれは、レイアの何者をも貫く矛だ。
　そして、その拳でフリーク・リーチの頬をこそぎ取った。
　敵は、一体、何をされたのか理解していないみたいだった。
　レイアはそのまま、拳で右腕を捩ぎ取る。
　敵は絶叫する。
　彼の目の前には、無傷のレイアが立っていた。
「何で？　シールドを張った。確かに傷を与えた。……幻覚か？　分身？」
「さあ、何ででしょう？　でも、貴方に勝ち目なんてまるでない」
　フリーク・リーチはもう片方の手で、頬と無くなった右腕の傷口に光の弾を撃つ。見る見るうちに傷口は修復されて、失った手は復活していった。
「どのような能力でも私に届く事なんて無い。私に触れられない。私と他者には永遠の距離が開いている。他者は私を掴めない。そうやって死んでいけばいい。私を見れない、私に触れられない。私に届く前に死ぬ」
「強いよ。お嬢ちゃん。俺が戦った相手の中で最強だ。どういう攻撃なんだ？　幻覚ではないようだけど。分身かい？」
「分身が近い。でも、本体なんていない。それが私の能力。他人は、私を視認したと思い込んで、私でない私を追い続ける。貴方は永遠に私を殺す事なんて出来ない」
　フリーク・リーチが攻撃を仕掛けた。
　レイアの全身が、キュービック・ループのようにバラバラの角砂糖になる。

　レイアは笑いながら、別のレイアがフリーク・リーチの肉体を天井にぶち当たるまで蹴り飛ばした。
　フリーク・リーチは地面に落下する瞬間、停止する。
「畜生。間違いなくお嬢さんが最強だ。俺はＡランクを倒したと自負する相手も屠ってきた。けども、お嬢さん程、強くなかった。ドーンの奴はとんでもない者を抱え込んだものだな？」
「ドーンねえ。所属なんてしてないわ。ただ、友人が所属しているだけ。私はドーンには興味ない。そして、賞金首にも。ただ、強い相手を倒す。それだけの為にこの世界にいる」
　フリーク・リーチの全身が赤く発光する。
　部屋中が火の海になった。床や柱がぼろぼろに焼け崩れていく。ただし、何故かカーテンに火が点火していない。
　フリーク・リーチの胴体が、上半身と下半身に分断された。
　レイアが拳で分断したのだった。
　そして、そのまま首も叩き折る。そこに、何の容赦も無かった。
　気付くと、オレの石化は解けていた。
　そのまま、数秒すると、元のサーカス小屋の中へと戻っていた。
　後には、無傷のレイアとフリーク・リーチの死体が転がっていた。
　……エタン・ローズ。反則的な効果を持つレイアの能力。
「ねえ、甘名いるんでしょう？　私は“最強”よね」
「……。君が最強だ。誰も君に到達出来る能力者なんていない」
「そう、私が一番、強い筈よ。誰も私に触れる事さえ出来ない」
　レイアは言う。彼女は絶対者になりたい、その願い故に彼女自身を強くしている。
　レイアは自分自身に陶然としていた。そこには何処か果敢無さすら覚える、胸を刺すように痛い。気付くと、オレは涙が零れそうになった。美しいと思った。そう、どうしようもなく歪な美しさがそこにはあった。ドス黒い闇に似寄るかのような美だ。
　花弁が舞っていた。レイアのエタン・ローズが作り出す存在しない筈の花々だ。
　レイアは強さを願い続ける。彼女自身の弱さを殺す為。
　レイアは美を願い続ける。この世界の寒気がするような嫌悪故に。
　ふと、彼女は笑っているように見えた。オレは彼女の笑い顔を見た記憶が無い。あっても思い出せない。
「……青い悪魔、ブラッド・フォースとまた会おう。そして戦うといい。きっと君なら」
　彼を彼の篭の中から出して上げられるかもしれない。
「分かってるわ。流石、甘名ね」
　レイアは凛然とした表情をする。泣いているようにも笑っているようにも思えた。
　そして、次の瞬間、嫣然とした冷酷で残虐そうな顔になる。
　少女性の残酷さだ。無邪気なまでに虫けらを潰すような顔。
　まるで確実にオレの中に存在する自分自身を見ているような錯覚。
　そう、オレも狂人なのだと。その時、ふと思い出した。

「次はタラスクを殺しに行くわ」
　淡々と彼女は告げた。
「ああ、戦うのか？」
「そうね」
　レイアはそう言って、タラスクの元へと向かっていた、オレも一緒に付いて行く。
　そして、亀の怪物であるタラスクの前へと立った。
「先ほど、フリーク・リーチっていう奴を倒したわ。次は貴方を殺していいかしら？」
　亀の怪物は蒼褪めた顔をする。
「……旦那を倒したのか？　オイラは知らない。オイラに関わらないでくれ」
　亀の怪物は半泣きの顔をする。
　レイアの目を見る。完全に獲物を狩る肉食動物の目だ。あるいは処刑人の目。彼女の冷酷さが膨れ上がっている。こうなると、オレはもう止めようとは思わない。
　タラスクは背中の甲羅を開く。
　それは発射口になっており、そこから棒状のミサイルが飛び出してきた。
　それは、レイアに向っていくが、彼女は避けようともしない。
　弾丸は、レイアを擦り抜けるようにまるで命中せず、彼女の背後の壁を爆破炎上させた。
　タラスクは恐怖の余り、口をあんぐりと引き攣らせて開いている。
「もういいかしら？」
　再び、小型ミサイルの発射。
　今度こそ、レイアの額に命中する。
　しかし、命中した筈が、やはり彼女の背後の壁を破壊する。
　まるで、攻撃が当たらない。
　レイアは薄ら笑いを浮かべている。
　そして、右腕から、消滅の黒い蓮を生み出す。
『修羅蓮華』だ、殴った物質を破壊していく蓮型の黒い光。
　その瞬間。
「待ってくれないかな？」
　聞き覚えのある声だった。
　そういえば、もうサーカスが終了しており、観客達が次々に帰路へと向かっている。
　その中から、響いた声だった。
　デス・ウィング、水月。
　彼女がタラスクとオレ達を挟んで、立ちはだかった。
「『裏・原宿』の治安は一応、私が守っているんだ。戦意の無い相手を殺すのは止めてくれないかな？　たとえドーンでリストに入れられていたとしても」
「正義の味方面？　貴方ってそういう人間だったのね、見損なったわ」
　レイアは明らかにおかしい事を平気で言った。
　なので、訂正する。

「正義の味方はオレ達だろう。一応、オレ達はこいつデス・ウィングを倒さないといけないだ。こいつは、Ａランクの悪党だからな」
「そうだったわね、丁度、今、まとめて倒そうかしら」
　オレは一応、ドーンの立場としてタラスクを倒す必然性を説いてみた。
　水月は露骨に嫌そうな顔をする。
「甘名、……お前って本当は性格、相当に悪いだろう？　そこのお嬢ちゃんの暴走を止めている者だとばかり思っていたけれど……とにかく、此処にいる者達は私が守る。だから、今回は諦めてくれないか？」
「ええ、そこの亀は諦めるわ。だから、貴方戦ってくれない？」
　レイアの眼の色が変わった。
　レイアはいつの間にか、右手から黒い炎を放っていた。
「私の前では、貴方が何者だろうが死ぬ」
「いいよ。けど、ここじゃ駄目だ。沼地へ行こう。そこでやろう。此処だと犠牲者が多くでる」
「そう、処で水月。私はこの戦いで貴方を“超える”つもりで行くわ」
　彼女が何気なく口にした言葉で、彼女の能力が発動した。
　水月の眼の中に映ったレイアの姿が、何か凶悪な姿へと変貌する。

†

『ストーム・ブリンガー』の水月に、『エタン・ローズ』のレイア。
　レイアは水月に勝てると思っている。だから勝負を挑んだ。
　一面は沼の湿地帯によって覆われている。所々に歪に捩れた木々が犇いており、ゾンビ達が彷徨い歩いていた。
　レイアも水月もいつの間にか、両者共、姿を消していた。
　水月はまだ能力の全貌を出していない。それはレイアも同じだった。
　オレは遠くから、二人の戦いを観戦する事にした。そして考えていた。
　レイアの性格の歪みは、オレの性格の影に確実に存在する。だから、オレの中の闇を体現したかのようにレイアは、悪意的な発言をよく口走る。
　そして、飽くなき好戦的な意欲。オレは正直、戦いは嫌いだし、殺人はもっと嫌いだ。しかし、オレの中にも確実にあるのだろう。闘争と、自惚れと、殺人衝動と、敵意と、傲慢さとそれらを含めた自己愛が。
　だから、レイアを見ていると清々しく感じる。
　おそらく、オレの中に確実に存在しているのだろう。この世界の誰もを何もかもを叩き潰してしまいたいという願望が。
　レイアと水月の姿が、沼地にぼうっと現れた。
　レイアは水月に接近戦を持ち込んだ。
　レイアの拳から、黒い炎が湧き上がってくる。

　水月は無造作にレイアの前に両手を広げていた。
「来ないなら、行くわよ？」
　レイアは拳を振り上げるフリをして、廻し蹴りを入れた。
　それが、水月の左側頭部へと向かっていく。
　水月は唇を歪ませた。
　レイアは蹴りを寸止めする。
「成る程ね」
　そして、全身を捻ると、再び拳を撃ち込んで、その拳も寸止めする。
「ふふっ、君は相当、戦闘慣れしているみたいだな」
　レイアは水月から距離を取る。
「顔を見えない風の膜でガードしているのね。切り裂かれる処だったわ」
「私にどうやって、撃ち込むんだい？」
「こうするわ」
　レイアは掌から、光に包まれた弾を撃ち込む。光は闇を吸い込んで、毒々しいまでの花々の形へと変容していく。
　それは、水月の周りで止まると、一気にレイアの元へと弾き返した。
「こうなる。君が私に勝てる要素なんて無い」
　レイアは打ち返された光弾を難なく避けた。
「しかも、風のカマイタチ付きで返されるとは。楽しいわ、どうやって、貴方をぶちのめそうかしら」
「君じゃ私に勝てないよ。もっとも、殺す事はより不可能だが」
　水月は指先を軽く廻した。
　レイアは一瞬にして、数センチ横に飛ぶ。
　レイアのいた地面は、大きく縦に裂かれていた。
「上昇意欲が強いのは認める。君は才能のある戦士だ。しかし、優秀とは言い難い、優秀ならば私と戦うという考え方が致命的なミスだ」
「五月蝿いわね。ブラッド・フォースっていう奴に負けた癖に」
「恥じゃないさ。私はブラッド・フォースの次くらいに強い」
　水月はまた指先を廻す。それだけで、レイアは全身を使ってかわすのが精一杯だった。
　まるで、空間を削り取るかのように、水月の力は圧倒的だった。
　水月は指の動きだけでレイアを圧倒している。
　しかし、オレからしてみれば、水月の攻撃に反応出来るレイアの動きも常軌を逸していた。水月の風のカマイタチ、空間の断裂は明らかにライフル銃の速度を超えていた。攻撃を受けた場所全てが破壊されているという結果だけが残っている。
「ドーンはあんな奴を狩ろうとしていたのか。ルサールカやケルベロス程度じゃ勝てないだろうな」
　ベスティアリーごときとは、遥かに次元が違っていた。ハーデスですら、瞬殺されてもおかし

くない。水月は誰がどう見ても明らかに、手抜きで戦っている。それにレイアが苦戦している。
　オレはサーカス小屋で貰った、ホットドッグを口にしながら、のんびりと観戦する。
「うん、水月さんのあの指先だけで、高層ビルが刺身のように綺麗に切断されるよ。レイアさんは食らったら、一撃で死んじゃうよねえ。文字通り、指一本でどんな相手もバラバラにして倒しちゃうからねえ」
　いつの間にか隣にいた、エイジスが楽しそうに言った。
　そういえば、オレは彼の正体を知らない。もしかすると、彼らも相当な使い手なのかもしれない。
「処で、……水月。いい加減に私を殺せばいいんじゃないの？　さっきから、私を撫でる事も出来ていないわよ？　服くらい裂けないの？」
　レイアは余裕があるかのように挑発する。
「そんなに息を切らしていれば、いつか命中するだろう？　私はそれを待っているだけさ。君の方も一撃も私に攻撃をヒットさせていないじゃないか」
　レイアは汗だくになっていた。水月は涼しい顔をしている。
「処で、貴方はブラッド・フォースって奴相手にダメージを与えられたわけ？」
　水月の顔が少しだけ引き攣った。聞かれたくない事を突かれたみたいだった。
「私の風の刃を相殺する形で、飛んでくる見えない刃に合わせて刃物が飛んでくるんだ。馬鹿げているが、私の攻撃に鏡のようにぴったり合わさる形で、同じベクトルの攻撃によって相殺される……。それで、ぴったり風の刃と奴の刃物が合わさる。あれは反則だった……。それから、途中から指を動かそうとする度に、指か腕を落とされ続けた。……」
　レイアはにやにやと薄気味悪く笑った。
「私も少し真面目にやるわ。貴方がもうちょっとやる気を出せるようにね」
　レイアは口の中で何かをぼそぼそっと囁いていた。
　レイアは水月の前から、姿を消した。
　二人共、仕切り直したみたいだった。
　水月はいつの間にか、右手に長い剣を持っていた。
　小枝のように細長い剣だ。簡単にへし折れそうな刃。
　彼女はそれを軽く振るった。
　すると、竜巻が巻き起こり、沼中を引き裂いていく。蠢くゾンビ達が塵のように砕けていった。
　オレは竜巻に見とれて、目を逸らしている間、事態がすぐに変わっていた。
　レイアは水月の背後に立っていた。そして、彼女の肩口に炎の鉄槌を振り下ろす。水月はその動きを読んでいて、竜巻がレイアの肉体をバラバラにしていった。レイアは寸刻みになりながらも、水月に拳をヒットさせる。水月の肉体に薔薇の蔓が巻き付いていき、それはそのまま爆炎となり、真っ赤な薔薇の花へと変わった。
　水月の肉体は崩れ始めた、レイアの能力が地獄の焔のように水月を包んでいる。
　二人共、痛み分けだ。

　水月の肉体は蒸発していく。
　そして、気付くと、二人共、何故か無傷のまま立っていた。
「やっぱり、貴方、死なないのね」
「お嬢ちゃん。君、確かに私が殺したよな？　何で生きているんだ？」
「……貴方、私に攻撃を当ててなかったじゃない？　馬鹿じゃないの？」
　それから、数秒後。
「止めたわ」
　レイアは詰まらなそうだった。
「止めるのかい？　私はまだまだ戦えるぞ？」
「だって、貴方を殺しても意味が無いんだもの。だから、もう私は止めた。馬鹿馬鹿しい。それにこれ以上、やったら私も無傷じゃ済まなさそうだし」
「そうかい。じゃあ、引き分けでいいかい？」
「貴方を一度は殺している筈だから、本当は私の勝ちにしておきたいけど、それでいいわ。馬鹿馬鹿しい」
「私もお嬢ちゃんを一度は殺しているぞ？　君も不死身とかじゃないのかい？」
「だから、貴方がそう見えたのよ。これ以上、言わなくても分かるでしょう？」
　レイアはウンザリしたような顔をしていた。
　水月は首を傾げていた。
　幻覚か。分身か。意識操作か。
　勿論、そのどれも違うし。ある意味で言えば、そのどれもが正解だった。
　そして、勿論、レイアは不死身の肉体という事でもある。
　それが彼女のエタン・ローズだ。
　水月によって、殺されたレイアは確かに存在した。
　けれども、その結果は存在しないという存在に書き換えられて消滅した。
　レイアは水月と戦う為、二つ程、炎の花を生み出す力以外の力を使った。
『エクスターズ・ワールド』と『リュミエール』。
　フリーク・リーチ相手にはリュミエールだけ使って勝った。
　ひょっとすると、本当にブラッド・フォースですら勝てるのかもしれない。それくらい、彼女の能力は反則であり、異質なのだ。彼女の自信と何者にも屈しないという精神が彼女の能力を形作っている。

　今日は平日の昼下がりで美術館は空いていた。
　ずっと見たかったブリューゲル展に行って、ブリューゲルの版画を鑑賞した。
　同行者がいる。
　ブラッド・フォースと一緒だった。
　彼はたまたまいつもの映画館の前にいた為、オレが誘ったのだった。
　美術館の帰りにカフェに行って、ハムレタスサンドといつものようにアップル・ティーを注文する。ブラッドは紅茶だけ注文した。
「『死の勝利』や『反逆天使の堕落』もよかったけど。『バベルの塔』が見れてよかった。あの絵画は塔の内部を想像出来てしまうくらい素晴らしいな。光り輝いて見えた、音楽が何処かしらか聞こえてくるようだった。遥か高く頂上を目指す神々への反逆の図。それが建造物だってのが面白いよ」
「バベルの塔か。僕は純粋に悪魔達の絵がよかったなあ」
　ブリューゲルの絵画は本当に素晴らしい。
　その美しさは、神々しさと共に、描かれる異郷の地、異郷の悪魔達が人間達に酷く類似している。悪徳そのものが滑稽で、そして滑稽こそがブリューゲルが揶揄した現実の世界なのかもしれない。
「ブラッド・フォース、君は誰よりも高い場所にいて世界を見下ろしているよな？」
　注文した物が置かれる。ブラッドは紅茶にシロップを流し込む。
「そんな事は無い。只、僕は他人と巧く波長を合わせられないだけだよ」
「君自身はそう思うのか。でも、君は最強だって。最強の能力者だって言われているよな？　君は誰よりも高い天空だし。君は誰よりも高い位置から世界を見下ろしているって、神の領域にもっとも近付いた者だって言っている者達は多い。それに対して君は巧く他人と関われないであしらえる。バベルに倣って、言語が通じないという呪いのように思っている。しかし、君の存在は塔そのものだよ。タロットにある『タワー』のカードにすら似ている」
　オレはレキソタンを二錠程、口にしてアップル・ティーで流し込んだ。
　そして、オレはハムレタスを口に入れる。ハムが思ったよりも厚い、肉汁が滴り落ちる。
　クラッカー付きの小さなコーンスープも付属で付いていたので、パン生地の部分に少しだけスープを付けて、それを口に放り込んだ。
「いいな、僕も同じ物注文しようかな。……言っている事が分からないよ。僕は最強じゃない。自分が強いとも思っていない。僕を最強だと言っている奴は狂っている。最強という妄念に取り憑かれている。僕は弱いからこういう能力になった。誰よりも弱いから。僕を傷付けようとする者全てを殺害する能力になった。他人に対する恐怖と過剰な防衛本能の行き着く先が、僕の『クラシック・ホラー』だったんだ。僕なんかよりも、デス・ウィングの方がまだ強い。彼女も何処かおかしい部分があるように思うけれども、僕よりは遥かにマシだろう。本当に強いのはハーデスみたいな人間なんだと思うよ。皆が僕を『殺人鬼』ブラッド・フォースとしてしか見てくれ

ない。君みたいな例外を除いて。本当はずっと友達が欲しかったし」
「まあ、気に触ったら済まない。
「でもまあ、最強か。僕より強い能力者が出てきたら僕の最強は意味無くならないかい？」
「君より強い能力者は現れなかったんだろ？　散々、命を狙われた上で」
「そうだね、笑ってもいいけど。たとえば、僕はフリーザに勝てないだろう？」
「ドラゴン・ボールのフリーザか。子供の頃、好きだったな。あの漫画。また、読み返してみようか。フリーザか、うろ覚えだ。そいつはどれくらい強いんだ？」
「惑星を破壊出来る。それも全力じゃない。軽く小突くような感じで光の弾を放って、惑星を壊せるんだ。それに宇宙で生きていける。放射線とか重力とかの関係で生身じゃ耐えられないな。僕のクラシック・ホラーで飛ばせるナイフは音の速さ、電子の速さ、光の速さを超える力を持っているらしいんだけど。とても僕はフリーザに勝てる気がしない。僕のナイフはフリーザに刺さるだろうか？　フリーザのスピードはもしかしたら僕のナイフより速いのかもしれない」
　オレは苦笑した。
「悟空に倒されたぜ。それに覚えている限りじゃ、トランクスにも剣で真っ二つにされた。オレは悪役じゃセルが好きだった記憶があるな。でも、いい喩えかもしれない。オレもよくやるよ、漫画とか映画とか観て。この登場人物、この敵キャラクターにオレの能力はどれくらい通用するのだろうか？　って。最高のイメージトレーニングになる。勝てそうに無い相手は多い。けれども、ひょっとしたらこいつには勝てるんじゃないかって相手だって沢山いる。机上の空論だけど、意外と対能力者相手に役に立つ時がある。能力者相手に必要な武器の一つは想像力だからな」
　ブラッドは比喩的なものだよ、絶対に勝てない相手だっている事がいいたかったんだと告げた。ドラゴン・ボールにおいて、フリーザという悪役キャラクターは剣などの刃物によって倒れたが、ブラッド・フォースの作り出すナイフ程度の威力ではおそらく刺さらない。つまりはそういう事なのだ。
「まあ、とにかく僕がどんなに強くてもフリーザは倒せない。その程度なんだと思う」
　ブラッドは強く断言した。
「僕の能力の根源にあるのは、他人に対しての恐怖だと思うんだ。他人は僕を害する物でしかない。だから、僕は傷付けてくる他人を傷付ける。そしたら、相手は死ぬ。それを繰り返していたら、殺人鬼と呼ばれた。一つの芸術だと賞賛する者もいるけれども、僕はそうは思わない」

†

　和室だった。
　中央にジョージが足を崩して、茶を啜っていた。
「よう来たな。別嬪さん、まあ茶でも飲んでいかんか？」
　隣にはケルベロスがいる。彼は正座で、真剣な眼で彼の師匠を見つめていた。
　レイアの占いによれば、彼は明後日か三日後くらいにブラッド・フォースと遭遇する。

ルサールカはいずれ、ブラッドの元に行き着くだろう。
オレは以前、彼と戦った場所へと赴く。
心なしか、何処か重苦しい。
ジョージの隣には、一冊の本が置かれていた。『涅槃教』と書かれている。
この部屋には、小さな仏像が置かれていた。
「ケルよ。葬式みたいな顔をするでない。何か辛い事でもあったのか？」
ジョージは相変わらず、発音が外国語じみた日本語で話す。
ケルベロスは黙っている。彼は師匠がブラッド・フォースと戦う事を好しとしていない。
「煙草、吸っていいですか？　……」
「おいおい、此処は喫煙室じゃぞ？　それに老人の前で煙草はいかんじゃろ？」
「すいません……」
ケルベロスは少し落ち着かない目をしていた。
「安定剤、上げようか？」
彼は礼を言って、オレからエチセダンの錠剤を受け取る。
彼は一気にそれを三錠、口にした。
オレは差し出された茶を啜る。
「美味いな。何てお茶だ？」
「蕎麦茶じゃよ。名の通り、山葵醤油を付けた、ざる蕎麦とよく合う」
「今度、自分でも買って飲んでみるよ」
「確か日本人じゃったな？」
ジョージはオレに言っていた。
「第二次世界大戦中だった。わしはアメリカで生まれた。愛国心があった。しかし、敵国である日本を尊敬していた。日本に自国が原子爆弾を落としたのを知って、とても悲しく思った。被爆の地にも行った事がある。後遺症に苦しめられた人間を数多く見た。わしは彼らの苦痛と、怨嗟となおも強く生きようとする姿に感動した。他にも、神風特攻隊という物を知った。自国の為に、命すら顧みない心をのう。わしの周りでは、彼らをクレイジーだと言っていたが、わしは震えたよ。わしは日本が好きになって、十数年間程、日本に滞在していた事もある。日本語も流暢になった。日本はいい国だ。アメリカで食う寿司は紛い物だが、日本で食う寿司は最高じゃ。鮑と鰻の寿司が好物での、それに鯖も鮪もいい。職人の物静かな主張はよいものだ。それは陶器や書道にも現れている。靖国神社を参拝した、神風を幻視したよ。日本中の神社巡りもした。また機会があれば、あの国に滞在したい」
「そうか。オレは自国よりも、ヨーロッパが好きだな。他国程、良く見えるものなのかもしれない。また今度、ドイツやイタリアの古城巡りでもしようと思っている。アメリカはといえば、住み心地が悪そうだったな、でもハリウッド映画は割と好きだよ」
「なるほどのう。人間は他の世界に憧れるものなのかもしれん」
そうかもしれないな、とオレは苦笑した。
「仏教は好きかい？」

「多少は知っている。宗派の違いは分からないけれど。あと、悟りの比喩を図画で描いた『十牛図』を見て、面白かったような記憶がある。牛の肉体の一部一部だけを見せて、一部のみを見ただけで、世界の全てを理解したような気持ちになって自惚れるな、という事を現した図だったか？　悟る事は様々な角度から考える事が出来る。牛の部分を見て悟る事は出来ないが、想像力は悟りへと至れるとオレは思う。まあ、何にしろ、オレは真理や悟りを得ようとは思わないが」
「君は幾つじゃ？」
　オレは少し笑った。
「オレは能力者だ。オレはいつからか老いない肉体になっている。オレの年齢は聞かないでくれ。ひょっとしたら、貴方よりも上かもしれない」
　嘘だ。オレは全然、若い。老化現象が止まっている事を知らされているが、実際の実年齢もそう年を取ってない。これから、幾つ年齢を重ねても年を取らないという事を予め知っているだけだ。
「そうかい。能力者には不死や不老、それに近しい現象を肉体に引き起こす者も多いからのう。でも、わしの肉体はそのまま自然に老いる事を選んだらしい。能力者となって数十年。わしは老い、生きる事を切実に望んだ。人間は人間のまま死ぬべきなのだとわしは思っている。病や飢えによって苦しむ事の大切さを考えた。欲望に身を囚われる事、自らの意志で欲望を克服する事」
「欲望か。……」
「人間の煩悩は１０８と言われている。いや、もっと数多くあるのかもしれない。わしは人生においてもうすぐ、百歳を迎える。その間に、わしは数多くの命を奪った。昨日も、秋刀魚の塩焼きとアサリの味噌汁を口にした。米粒一つ一つも元は命が宿っていた穀物だった。人は殺生の中で生きている。殺生と共に生きている。わしは思う、わしが生きている事は殺害における奇跡なのだと」
　ジョージは饒舌に話し続けた。
「人間には様々な正義、道徳、倫理が存在する。そしてそれらの総合であるかのように、真理なる概念が存在する。わしは思うのじゃが、絶対的な真理とは無く、真理とは個人が人生の総括として、辿り着く場所で普遍的な真理など存在しないのじゃろう。そして、人間の人生においては、小さな悟りは数多く、大きな悟りも幾度とある。そうして、人間は自身の生の意味についての問いの総括を行うのじゃな」
　今まで積み上げてきた人生を吐き出すかのように、彼は喋り続ける。
「人間は超越した何者かとなって、解脱する事が出来るのじゃろうか？　わしはそうは思わない。生きとし生ける事、それら全てが解脱じゃ。のう、この世界にはあの世は無いのじゃよ。この世界に輪廻転生は無い。しかし、人間が死んだとしても無になるわけではない。輪廻転生とは、物事が起きて、結果が続いていく、その事なのじゃよ。前世とは過去に存在した人物が、現在の人間の意志に受け継がれるという事じゃよ。来世とは意志を未来の何者かに受け継がせる事。わしはわしの生命をまっとうしなければならない、わしが生きた証は、後に何かが引き継ぐだろう

。そうやって、可能性は誕生し、受け継がれていく、人間の意思こそが、輪廻なのじゃ。意思は巡り、天界に行き、畜生道にも行き、餓鬼道にも行き、修羅道にも行き、地獄にも行く。しかし、意思は巡り続ける。それこそが、人間が仏に至る、という概念なのじゃろう。わしの人生はやはり短かった、けれども、その短い人生はきっと未来を巡っていく、それだけは信じておる」
　見ると。
　ケルベロスは落涙していた。男泣きだ。何だか、オレは目のやり場に困ってしまった。
　ケルベロスの気持ちも分かる。
　そして、この老人、ジョージの想いも分かる。
　けれども。
　オレには譲れないものがあった。
「何故、ブラッド・フォースと戦う？」
　オレは単刀直入に、聞きたかった事を問うた。
「彼が殺人鬼だからか？　貴方の話じゃ、憎悪も怒りも捨て去って赦すべきだ。ブラッドを赦すべきだ。彼に殺された者の、彼に大切な人間を殺された者達の、全ての憎悪と怨嗟を引き受けずに、今まで通りの貴方でいるべきだ」
　オレは正しい事を言っているかのようなものは信用していない。
　だから。
　ハーデスの考えに感銘を受けたからじゃない。彼の命を気遣っての事じゃない。
　単純に、オレはブラッド・フォースに人殺しをさせたくない。
　この老人を殺して、一人で抱え込むブラッドを見たくない。
「フェンリル。わしもまた、人を殺している。相手は所謂、罪人じゃった。わしは、ウォーター・ハウスの言い分も理解していると思っておる。悩んだ。彼もまた正しい。アサイラムは人間の意志を殺し続ける機関であるという事も真理だと思っておる。人間は滅亡するべきだという考えも認めるべきだと思っておる。わしもまた、傲慢であるのじゃろう。わしが悟りを考えられるという事すら幸福であった証なのじゃろう。怨嗟の中でしか生きられない者、欲望の中でしか生きられない者、そういう環境によって運命が決定付けられた者は無限に存在する。だから、真理、悟り、それらを風潮する事もまた、一つの傲慢だと思っておる」
　思わず。
　オレは茶碗を床に叩き付ける。
「質問の答えになっていないぜ。何故、ブラッドと戦う？」
　老人はにっこりと笑った。
「若い者達に、わしの意志を継いで欲しいからじゃなあ」
　オレはその言葉で、彼の意図を理解した。
　……この老人は自殺するつもりなのだ。
「それに、わしは勝つつもりじゃよ。どんな相手だって、つねに死の危険が付き纏う。それがドーンの仕事じゃろう？　今更、何を恐れておる」
　オレはもう、何も言えなくなった。

　無言のまま、礼を言い部屋を出る。
　この部屋には西日が差し込んでくる。光の庭のようだ。
　珍しく感傷的な気分になった。彼らに肩入れするつもりはない。そう決めていた。
　しかし。
　……。

†

　部屋の外ではウォーター・ハウスが壁にもたれ掛かっていた。
「よう」
「ああ」
　オレ達二人は無言だった。
「フェンリル。あいつの能力は聞かされたか？」
「まだだ」
　彼は何か考えているような顔だった。
「ジョージ……ハーデス自身は使ってはいけない物だと言っていた。どんな能力なのだろう？」
「暴力って何だと思う？」
　彼は意味深にオレに問う。
　といっても、哲学的な問いではない。彼の事だから、きっと個人的な事だろう。
「オレだったら。……精神攻撃だと思うな。相手の脳を操作したり、支配したりするもの。オレだったら絶対に屈辱だ。それ以上の暴力は思い付かないな。というのも、オレはある種の精神を蝕まれる事が忌々しくて、この世界を飛び越えたいとばかり思っていた」
「なるほど、お前らしい答えだ。俺ならば、俺と類似する能力で俺の上を行かれる物の存在が暴力的で屈辱の極みだ。さて、ハーデスにとっての暴力って何なのだろうな？」
「彼に取ってか……」
「ハーデスは言う。暴力は恐るべきもの。人の人生を壊すもの。忌むべきもの。それを象徴したものは何なのだろう？　それは彼の生涯に関係している、分かるか？」
　オレは首を振った。
　ウォーターは人差し指を立てる。
「そう、奴の能力は。『核』だ。原子爆弾、核爆弾のエネルギーを生み出す事が出来る。広島の跡地で発現したらしい。当時、世界を滅ぼしかねないと考えた物の象徴。奴の能力の名は『アトミック・ソード』。愛剣の先で切ったものを、爆発させるんだ。……ハーデスは絵が下手糞でデッサンが狂っている。でも、奴の描いた絵には鬼気迫るものがあるぜ？　今度、スケッチブックを見せて貰うといい。当時の原爆の後遺症で苦しむ住民の絶望的な表情と光景を描いた絵画が見れる筈だ」
　オレは苦笑する。
「そういえば、水月……デス・ウィングはそれで死ななかったんだよな」

「そう、死ななかった。ハーデスは悔しがっていたっけ。本来ならば最強の暴力である筈のものが通じない化物がこの世界に存在する。それはこの世界を守り切れない象徴でもあるんだとよ」
　そして、俺もまた、暴力そのものだ。とウォーターは言った。
「フェンリル、俺は何故、人を殺し続けるのだろう？　俺は純粋悪だからだろうか？　フロムの本を読んだ。『悪について』だ。俺は夜が好きだからだろうか。フロイト派の連中は俺を解き明かせなかった」
「知るわけないだろう。お前に分からないなら、オレにも永遠に分からない。そして、オレはお前の殺人行為に興味が無い」
　エーリッヒ・フロム、及びフロイトやユングをオレは信用していない。そもそも精神医学で人間の殺人願望を解き明かせるのだろうか。
「お前はお前自身を解き明かしたいのか？」
「ああ、解き明かしたいな。自分が何者なのか。何故、俺は異質なのか」
「誰にも自分自身を解き明かせないよ。他人から見る自分なんて、本質の自分なのだろうか？　それらは言語で形作られる」
　ウォーター・ハウスは図書室へと誘った。
「本の中には人間の叡智が詰まっている。人間の歴史が。けれども、その歴史を壊したいという願いを持つ権利を人間は潜在的に抱えているのかもしれない。それは神と敵対する意思だ。少なくとも俺は歴史を破壊したい。小さな物でも、人間一個の命はそいつの人生という歴史を刻んできた道標だな。俺は道標を消してやりたい。俺の中には無限の悪意がある。暴力に対する意思がある。暴力を行使する権利があると思っている。それは俺自身にも止めようが無いし、誰にも止めさせるつもりはない。俺は俺の意思を行使したいが為に世界を破壊し続ける」
　彼は図鑑を次々とオレに広げて見せた。
　宇宙、ロケット、深海、昆虫、動物、船、工場、都市、車、機械。
「人間の辿ってきた道標だ。それから人間が見てきた世界だ。俺には分からない。これらの世界が素晴らしいものであるという事が。俺には理解出来ない。世界を壊してはならないという理由が。この世界は何の為に存在していて、何で人間は社会を作らなければならなくて、何で人は他人を愛さなければならないのかが本当に分からない」
　本当に当たり前のように彼は言うのだった。
　狂気でも何でもなく、ある意味で言えば、無邪気な子供そのもののように、彼は自分の持論を語り続ける。
　何故、彼がこのような思考に辿り着いたのか。
　彼は言った。当たり前のように、特に単純に考えていくとそうなったと。
　異邦人なんだとオレは思った。

†

　もう十数年も前の事だ。

デス・ウィング、水月翔子は自らの意志でアサイラムへと入った。
ブラッド・フォースと戦った、二年後の事らしい。
水月はアサイラムに現れると、「私を殺せる能力者を探しに来た」と告げて、そのままアサイラムに収容される事となった。
結果、彼女の要望で、彼女を殺せる能力者がいないか、アサイラム中の収容者の能力を試したが、水月は死ぬ事が出来なかった。
あらゆる種類の能力を試したのに、水月に死という結果を与える事が出来なかったのだ。
当時、アサイラムは今ほど、完備されていなく、ハーデスのアトミック・ソードの力に頼っている側面が強かった事は否定されていない。
ハーデスとアンブロシーは決断しなければならなかった。この世界の秩序を取り戻さなければならないと。ブラッド・フォース及び、Ａランク賞金首を狩りつくさなければならない。そうしなければ、この世界に秩序が戻る事など在り得ない事を理解しているから。
アサイラムから数キロの小島で二人は戦った。
勿論、勝負にならなかったらしい。ハーデスはデス・ウィングを殺せなかった、その事実だけがある。ハーデスはその事でショックを隠せなかったらしいし、水月はその時、無感動にアサイラムを後にしたのだという。
水月は相変わらず、指一本でハーデスを圧倒した。水月の指先から発射される衝撃波と空気弾によって、ハーデスは重症を負い、そのまま簡単に逃走されたのだという。アサイラムを囲む滝状の水の壁など、水月の能力で竜巻を呼ばれて簡単に攻略されてしまったらしい。
つまる処、この世界の秩序が崩壊しているのは、どのような機関、組織でさえも、止めようがない化物が存在しているという事実だ。Ａランククラスの賞金首の一部は、神や魔王や神話の怪物などと呼ばれる事もあり、体制側の誰も倒せない相手なのだ。
秩序、体制を作り出そうとする側は、最悪の破壊者達を倒すだけの力が無い。たとえば、ブラッド・フォースを倒そうとする者は無数にいたし、青い悪魔を倒す事によって世界が平和になると信じていた者も無数にいた。けれども、誰も青い悪魔を倒せなかったし、皆、殺された。秩序を維持しようとする有能な能力者は悉く死んでいった為、世界中の無秩序が溢れかえっている。
今回、ハーデスが青い悪魔に挑む事によって、また一つ秩序が崩壊する事を意味している。人間の社会など、最上級、上級能力者にとって、簡単に壊せてしまう砂上の楼閣でしかないのだ。この世界には、世界を滅亡させられるだけの影響力を持つ能力者が余りにも多過ぎる。内部を白蟻に食い破られた建造物の上に、オレ達は住んでいる。
世界はいつ崩壊してもおかしくない。
今にも崩れ落ちてしまうかもしれない砂の橋の上で、皆、生きている。
青い悪魔や死の翼がその気になれば、この世界など簡単に壊れてしまうのだから。

†

少し時間が巻き戻る。

　デス・ウィング、水月翔子と会う前に会った出来事を思い出す。
　裏・原宿でルサールカと別れた途中、オレとレイアはデス・ウィングと会う前に“部屋の中”へと飛んだ。
　オレは冷蔵庫から紅茶を出すが、レイアは口にせず、珍しく話を始めた。
　レイアは目的があって、この世界にいる。
　それは、オレが関知するところではないし、興味も無い。
　ただ、何となく訊ねてみた。
「貴方の世界における神なる者を倒したいと思っているわ」
　と、彼女は妙な事を言った。
「何が目的なんだ？　……君はオレの事が分かる。けれども、オレは君の事がまるで分からない。これはどうしようもない程、ストレスな時もある」
　レイアはベッドで寝転がる。
　そして、徐にタロットを捲り出した。
「ブラッド・フォースと戦ってみたい。あの、メビウス・リングとも戦ってみたい。それから、貴方の組織の……そう、ドーン。ドーンの追い求めている敵とも。アヌビスにデス・ウィングか。アヌビスの方は止めておくわ。……忠告しておくけれども、貴方もアヌビスは止めた方がいい。でも、デス・ウィングとは戦ってみたいわね。ハーデスはまるで興味を持てない。老人と戦って勝ってもねえ」
「何か善からぬ事を考えているのか？　ならオレを巻き込むな。オレは何にも興味が無い」
「甘名、心配しなくていいわ。私は貴方のデメリットになる事はしない。私は貴方が気に入っている。それだけは信じてくれていい。他は信じなくていい。貴方には感謝しているのよ。私は元の世界に余り帰りたくないわ。この世界では老いていく事、死ぬ事、それら全てが無になる。私は人間を超越した。元の世界よりも遥かに今の私はパワーアップしている。精神エネルギーが満ち溢れていく、まだまだ私は強く美しくなれる」
　オレは香に火を付けた。
　サンダルウッドの香りだ。
「ウォーター・ハウスもそうだが、レイア。オレは君やウォーターのようなタイプ、そう、何ていうか、エゴイストにとって、オレの精神構造はどうやら居心地がいいらしい。オレは否定しないからだろうか……。それとも、付け入りやすいのか？　いずれにしろ、オレの性格的な欠点だろうな」
「貴方が魅力的だからよ。弱さと強さを兼ね備えている。私は貴方の強い部分に惹かれた。他の者達は、弱い部分に惹かれるのかもしれない。それに恋愛とか下らない考えで見ない。それもかなり好ましい」
　香の匂いが充満していく。レイアは焚く香りをセージに変えていい？　と訊ねた。オレは首を振った。乳香かペパーミントになら変えてもいい、と付け加えた。
「ウォーター・ハウスね。私と比較してるけど、彼は余り興味が無いわ。それ程、凄い奴なの？」

「むしろ、オレの方が気持ち悪い。オレは彼の過去話を延々聞かされて何も感じなかった。そっちの方が問題だ。一般的に考えて、マトモなら彼の話を嫌悪するべきなんじゃないのか？　どうなのだろう？」
　ウォーター・ハウスの殺し方、殺人の話。
　倫理や道徳を踏み躙るかのような雑談。
「沢山、聞かされた。……色々な殺し方を試したらしい。頭蓋骨に孔を空けて、生かし続ける方法。人の精神的苦痛の与え方。口にするのも気持ちが悪い……」
　そう思った矢先、オレは彼に対する怒りが萎んでいく。何が言いたいんだ？　オレは。
　人として怒るべきだろうが、怒れない。
自己嫌悪ばかりが募っていく。
「ウォーター・ハウスが嫌いなのね……。でも、私には興味が無いわ。甘名、自分自身にマトモな感性を求めようとするのは無意味よ。そんなものは存在しないわ。正気なんて、世界が勝手に形作る。だから、そんなもの抜け出さなければならない。世界に狂気と正気があたかもあるかのように皆は区別したがるけれども、そんなものは存在しない。誰かにとっての正気は誰かにとっての狂気でしか在り得ない。それだけなのよ」
　レイアはサンダルウッドの香を消して、ペパーミントの香に火を付けた。
「甘名、貴方はブラッド・フォースは赦し続けるのに、ウォーター・ハウスは赦せないのね？　もしかして、それに対しての葛藤？　どちらも無差別殺人犯よ？　ブラッドは赦せてウォーター・ハウスは赦せない。その矛盾に苦しんでいるのね？」
　そう言う彼女はとても無邪気だった。
　レイアは本当に楽しそうだ。
　彼女と対峙した時に感じる。
　まるで、脳の中身を見られるような感覚。
　レイアは彼女にとって都合がいいから、オレを選んだ。
　彼女は自分達が、光と影のように同じ物の別側面だと言う。
　オレは特にそう思わないが、少なくとも彼女はそう信仰している。
　その信仰によって、オレのフェンリルとエタン・ローズは融合出来る。
　オレの意思とレイアの意思が、重なり合う。
　レイアはオレの額にゆっくりと人差し指を突き付ける。
「貴方は何も気にする必要なんて無い。知らない相手の死くらいなら、何も感じない人間になればいい。悩む必要なんて無いわ。自分自身の望む事のみを生きる糧にすればいい。私がそうであるように。いい？　この世界は救済する価値なんて無いわ。フェンリルの甘名、貴方は『ソードの女王』。私はさかしまの『女教皇』。貴方はソードを身に纏い、私は大アルカナの知識を司る。樹木のビナー。それぞれの持つ器には限界があるわ。でも、同時に強力なエネルギーと才能がある。けれども残念ながら、どっちも狂人なのよ。貴方は今にも倒壊しそうなソードの女王、本当は敵意と悪意の剣を持って人を殺してやりたいと思っているわ。貴方は本当は一人なのよ。誰かに寄り掛かったり、仲間と共に生きる生き方なんて出来るわけがない。私がそうであるように

。だから、貴方は誰にも干渉しないし、誰にも干渉されたくない」
　レイアは占い道具を取り出した。一瞬のうちに、クロウリーのトート・タロットを何も無い空中に広げる。その上に、ライダー版のタロットを重ねた。ライダーは十枚のケルト十字法、トートは十枚のダイアモンド・スプレッドだ。セフィロトの樹木とクリフォトの樹木を意識して広げているのだろう。
「いい？　甘名。世界に救う価値なんて無い。自分自身を救済するしか無いのよ。何故なら、貴方はそれしか出来ない宿命だから。私と同じように。何故なら、貴方は世界を滅ぼす可能性を抱えてそれを論理で捻じ曲げる。貴方は私と同じように、只の狂人よ。貴方は歪で狂っている。その歪み方は私のさかしまのように狂っている。だから、私は貴方に心を開いた」
　彼女は。
　その歪みに、何処までも真っ直ぐだ。
　彼女と両眼が合う。彼女の瞳にはオレが映っている。
　彼女は光を望んだ故に闇になった。その瞳は緋色で、深い暗黒を讃えていた。
「……オレにはタロット・カードの知識は無い。魔術の知識も。分かりやすく教えてくれないか？」
「甘名。人間は閉ざされた篭の鳥ね。肉体という檻。社会という牢獄。世界という地獄。精神の迷路の中で生き続けている。誰も篭の中を抜け出せない。空高く舞い上がったとしても、いずれ檻に突き当たる」
　何だか楽しそうだった。
　そう、聞くのが憚れる。
「ブラッド・フォースにメビウス・リングか。それにデス・ウィング。……彼らはきっと、到達したのね。人間と言う篭を飛び超えた。私も貴方の能力によって、飛び超えた。けれども、貴方は今もなお人間のままでいようと望んでいるのかしら？　でも、貴方が今、捜し求めている相手は彼らではないのよね」
　タロットの絵柄が、いつになく不気味に映っていた。
　不気味なカードでなくとも、酷く不気味に。
「でも、運命は廻り出すみたいね。貴方に占って上げた。これは訪れるだろう貴方の未来」
　空中に浮かんだ、タロット・カードの未来を象徴する位置にレイアが指を持っていく。
『運命の車輪』の正位置だ。運命を司る大アルカナ。
そして、全体を現す結果の位置にあるカードを彼女は指差す。
『ソードの１０』の逆位置。意味は破滅からの光。
「『フレイム・タン』って奴を探しているんでしょう？　そいつは私と真逆のようね。世界を変えられると思っている。自分ではなくこの世界を反転させようとする意思。そいつは、いずれ貴方と会う事になる。そいつは世界の破壊を望んでいる。この世界に対する憎悪が余りにも深過ぎるのね。世界のロジックを憎んでいるわ。私は彼女とは相容れない存在なのよ。私は自分を超えられればそれでいい。彼女は世界の檻を破壊したい。私は彼女に興味が無い。けれども、貴方は彼女に興味がある。だから、いずれ貴方は彼女と会わなければならないけれども、その時、私は

力を貸す気は無いわ。何故なら、彼女は貴方の運命なんだから」
　オレは話を逸らす。
「レイア。君にとってこの世界は美しいのか？　醜いのか？」
「……どうでもいいわ」
　彼女は吐き捨てるように言った。
　そうなんだろうな、とオレは思った。
　彼女にとって、この世界など滅ぼす価値も護るべき価値も無い。そういうものなのだろう。
　そして、その会話が終わった後、オレ達二人はデス・ウィングの店へと向かったのだった。

†

「師匠は。末期癌なんだ。大腸の辺りと脳の部位に癌があるらしい。……以前の医学では治せなかった。けれども、今は治せる。けれども、彼は治療を拒んでいる。自然と共に朽ちていく事を望んでいる。俺はそれが憤るように苦しい。彼に教えて貰いたい事はまだまだ幾らでもある」
　ケルベロスは六本目の煙草に火を付けた。
　空が夕焼けだ。
「ハーデスは本気でブラッド・フォースを倒すつもりだろうな」
「ああ……」
「最初、自殺だと思ったんだ。でもそれだけじゃない。倒せるものなら、倒したいと考えている。そうだろうな」
　彼はポケットから携帯電話を取り出す。
「ルサールカがブラッド・フォースを発見したらしい。今日の朝、日の出を待って。倒しに行くそうだ」
　ぼそりっ、と。彼は言う。
「……俺は葬列に参加させてくれないらしい」
　彼の顔は忌々しそうだった。
　オレはガラにもなく、ケルベロスから煙草を分けて貰おうと思った。しかし、止めた。煙に噎せ返って、どうせゴミにしてしまう。
　空は気付けば、深い群青の闇へと変わっていた。
　ミューズとルサールカが、ハーデスをサポートするという形になった。

†

　自身を純粋悪だと述べるウォーター・ハウス。
　世界を嘲笑し続ける無邪気な悪意のデス・ウィング。
　自身の世界に閉じ篭もり、自身を絶対化するレイア。
　彼らは自らの意志に迷いは無く、自らを正しいと信じている。

　だからこそ、彼らは強いのだろう。
「そう悩む事は無いわ甘名。貴方は貴方自身が迷うという事に関しては、悩む事は無い。私もずっと悩んできた。そして結論を出した」
　レイアは空中に浮いている。そして、時折、鏡の前を浮遊して、自分自身に見惚れているみたいだった。
「レイア、君は何でそれ程、自己を肯定出来るんだ？」
「世界に価値なんて無いからよ。なら、自分自身で価値を作り出すしかない。たとえ、それが世界と相容れない事になったとしてもよ」
　向う場所は決まっている。
　オレ達は、ハーデスの元へと向かっていた。
　レイアのタロットの能力で、居場所は簡単に把握する事が出来た。
　そして、彼を見つけたのだった。
　ハーデスは、温和で晴れやかな顔をして、一本の刀の素振りをしていた。
　錆びた刀だ。おそらくは日本刀のように見える。
「貴方がジョージ、冥界の王ハーデスね？」
　レイアは誰何する。
　ハーデスは此方を振り向いた。
　此処は、アサイラムの近くにあるデス・ウィングとの戦いで死の島へと変わった小島の近くにある、砂丘ばかりの島だった。
「どうしても聞きたい事があって貴方の元に来たの」
　ハーデスは沈黙している。
　そして、答えた。
「お嬢さんは、何者だ？」
　独特の英語の発音に似た日本語。
「私はレイア。処で、今、貴方は私を視認した。貴方の『アトミック・ソード』とやらと戦ってみたいのだけれどもいいかしら？」
「明日、大事な戦いを控えておる。だから、お嬢さんとの戦いはまた、今度な」
　レイアは極めて、好戦的な視線を老人へと向ける。
「では、少しだけ手合わせ願えるかしら？」
　ハーデスはレイアを凝視している。
「ふふっ。お前さん、強いのう」
「まあね」
「少しだけ、相手になってやるかの」
「さっさと来ればいいじゃない。どうせ、何物も私に触れる事なんて出来ないのだから」
　刹那。
　ハーデスが、レイアの頚椎の辺りを軽く小突こうとしたのは分かった。
　おそらく、彼はこの一撃で、レイアを昏倒させるつもりだったのだろう。

けれども、レイアに命中させるつもりの手刀は、見事にレイアの目の前で空のみを裂いている。
「何しているの？　さっさと、『アトミック・ソード』とやらを使えばいいじゃない？　核爆弾にこの肉体が耐えられるのか、そんな馬鹿みたいな事を試してみたいのよ。言っておくけれども、私の強さは、あそこで呑気に観賞しているフェンリルの比じゃないわよ」
レイアは前に拳を突き出した。そしてそのまま、一回転して、ハーデスの脇腹に蹴りを当てる。
ハーデスは後方に後ずさりした。
老人から少し冷や汗が流れた。
レイアとしては、かなり手加減したつもりだろうが、効いている。
レイアは強い。
彼女の強さを理解しているが故に、この戦いがどうなるか、少々、見たくなった。
「私の『エタン・ローズ』と『フェンリル』で視た、タロット・カードから暗示される未来は、変えられないかもしれない。けれども、貴方が何故、青い悪魔とやらに挑みに行くのか、フェンリルは苦しんでいるわ。聞いておく。貴方、馬鹿じゃないの？」
ハーデスは、一瞬だけ、しかめっ面をする。
しかし、元の温和な顔に戻った。
「お嬢ちゃんには分かるまい。この世界を守らなければいけないんじゃ。何かが、この世界の秩序を作り出さなければ、世界は滅んでしまう。当たり前の事じゃ。生きていくべき者が生きられなくなる。何かを為さなければならないと感じる事が何故、悪い事なのか。わしには分からぬ。老いても、なお、分からんのじゃ」
ふん、とレイアは鼻で笑った。
「別に私は貴方の目的なんてどうでもいいの。貴方と戦おうと思っただけだから。さあて、早く能力を見せる事ね。でなければ、一方的に私が能力を行使して勝つわよ」
彼女は容赦が無かった。
ハーデスが、どのような説得を試みても、レイアには興味が無いだろう。
レイアは気紛れで、自分勝手で、他人を思いやっているフリをしていても、やはり自分のエゴイズムが満たされる事が前提で、そして徹底したナルシズムの塊なのだから。
彼女は、もう目の前の老人を地へと叩き付ける事しか考えてないみたいだった。
老人もしぶしぶ、言葉ではどうにもならない事を悟ったようだった。
気付くと。
ハーデスは錆びた刀を手にしていた。
それを、レイアへと向ける。レイアは鼻で笑った、どうせ届かない。
レイアの能力は、余りにも反則的なくらいに強いのだ。
届くわけがない。
しかし、ハーデスは“自分自身の肉体に、刀を打ち込んだ”のだった。
小さな爆発が巻き起こる。

　小さな、茸雲が空へと舞い上がっていた。
　地面が抉れていた。
　木々が爆風によって、溶け落ちている。
　黒い煙が上がっている。
　もし、爆心地にいたのならば、普通は死んでいる。
　その中で、二人の人影が立っていた。
　レイアは無傷だった。
　しかし、少し呆気に取られているようだった。
「なるほど、それがアトミック・ソードか。確かに、それなら私にダメージを与えられそうだ。最小限の攻撃を行ったわね。爆発のエネルギーを上げれば、私を倒せるんじゃないの？」
「馬鹿な事を言うな。此処の自然を破壊する事は出来ない。放射能に汚染されて、草木が育たなくなる。それにお嬢ちゃんも傷付けとうない」
「はあ……、何処までも頑固ジジイなのね」
　レイアはつまらなそうに踵を返した。
「貴方は私との試合の最中だ。だから、貴方は私との戦いが終わるまで、決して死んではならない。意味が分かるかしら？」
　ハーデスは、また沈黙していた。
　そして、彼女の言葉を吟味する。
「ああ。そうじゃな、わしらは今、試合中じゃ。試合が終わるまで、生きるつもりじゃ」
　老人は笑顔だった。
　レイアは相変わらず、冷淡そうな顔をしている。
　オレはもしかすると、彼女は優しいのではないのかと少し思った。
　もしかすると、だが。
　レイアはぽつりと呟いた。
「私の能力は“発動”した。明日、見に行くわよ」

第六章　滅びる世界　1

　荒廃した砂漠のような瓦礫の街。
　オレはハーデスよりも先に、ブラッドに会う事になった。
　ブラッドはいつものようにオレに笑いかけた。
「あの女は何だろう？　見られていたから、思わず殺してしまった。よかったのだろうか？」
　深刻そうな顔だ。何だか気味悪そうに思っているみたいだった。
「心配しなくていい。あれは彼女の分身だ。何体殺しても構わない。けれども、彼女の本体に居場所を突き止められたみたいだ」
「そう」
　ブラッドは早めの朝食を食べていた。ホット・ケーキとミルクココアだ。
　隣には平然とレイアが立っていた。彼女は暇そうにアロマオイルを焚いている。
　時間は朝の四時半だった。もうすぐ日が昇る。
　まだ、戦いまでは時間がある筈だった。
　止められない戦いなのだろうか。
　オレは思考する。止められるものならば、止めるべきだろう、と。
　ブラッドが散歩に行くと、外に出た。
　すると、彼の周囲に、方陣を組むように幾つもの絞首台が姿を現す。
　予定より早い。……。
　レイアはオレに、逃げる用意を薦めた。
　オレはケルベロスから、ルサールカの能力を聞き出していた。
　ドッペルゲンガーは守りの能力、彼女にはもう一つの攻撃の能力があるのだと。
　あれはルサールカの攻撃だ。あの絞首台の一つ一つがルサールカの分身だ。
　ブラッドは難なく、それに空中から出現させたナイフによって、解体していく。おそらく、今ので彼女の攻撃が発動した。
　ブラッド・フォースの周辺を覆うように、巨大な円形の建物が出現する。それは半透明になっており、中のブラッドの姿が見えた。
「ルサールカ、お前は何なんだ？　お前の能力は一体、どういう構造をしているんだ？」
　いつの間にか、オレとレイアの真後ろに立っていた、ルサールカの分身にオレは問う。
「貴方達がブラッド・フォースと何故か、関わっているのは知っていたわ。デス・ウィングとも。事情には興味が無いわ。ただ、私が始末する。それだけなのよねえ」
「気持ち悪いわ。この女、本当に」
　レイアは強い嫌悪を込めて、ルサールカを見る。
「アミィ、覚えているでしょ？　見えない道具の幽霊を操るアミィ。私の場合も近い能力よ。私の場合は、死のエネルギーを操作する。死の想念、死のイメージを操作するというか。私の分身は私の亡霊なのよ。私は死んでいないにも関わらず、亡霊として出現する事が出来る。あれは防御としての私の能力。じゃあ、攻撃としての死のエネルギーはどうなるのだろう？　今、ブラ

ッド・フォースは、自身の死のイメージによって、あの建物を出現させたのよ。私とミューズはブラッド・フォースやデス・ウィングなどのどうしようもない奴らをぶち殺す為に人為的に作られた能力者よ。アサイラムが生んだ最強の能力者。敵が強力であればあるほど、敵が最悪であればあるほど、私とミューズの能力は強力で、凶悪になる。そう、私の『ギヨティーヌ』の攻撃は、相手が人を殺していればいるほど凶悪な攻撃にパワーアップされる。プルソン程度の小物じゃ苦戦したけど、ブラッドやデス・ウィングじゃ相性ぴったりね」
　ルサールカは楽しそうだった。
　今から、最強を倒せるとかいう考えに酔っているのだろうか？
「アンブロシーは止めたけれどもハーデスは誓った。死ぬ前に、最悪の殺人鬼か不死身の殺人鬼のどちらか辺りを道連れに死のうと。あの好々爺の顔で、ずっと執念をもって考え続けてきた。あたしはそれに手を貸そうと思う」
　オレは気付けば。
　出現させた剣の柄で、彼女を壁に叩き付けていた。
　ブラッドが殺される。それが明確な恐怖となって、オレの脳裏に過ぎっている。
　仲間、……奇妙だがそんな言葉が浮かんだ。
「貴方はドーンの指令よりも。殺人鬼の方を肩入れするのよね……」
　オレは彼女の首を切り落としていた。
　ルサールカは首だけで笑いながらオレを見ていた。
「ああ、クソ。どいつもこいつも。この女も狂っている。最低だ」
　レイアがオレの肩を叩き、淡々と指差した。
　見ると、ブラッドを覆っていた塔がスライスされていく。
　ルサールカは首だけで高笑いを浮かべた。
「勝てるわ！　最悪の殺人鬼に勝てる。攻撃しちゃ駄目なのよ。残念だったわね」
　スライスされた塔は、今度は槍へと変形していき、ブラッドに一斉掃射される。更に、地面から建造物が現れて、彼の周りを覆っていく。以前よりも巨大だ。
　後ろを見ると、ルサールカが自分の首を持ち上げて、切断面にくっ付けていた。
「フェンリル。狂っているのは貴方の方よ。何考えているの？　あのブラッド・フォースに肩入れして」
　こいつは何も分かっていない。
オレはもう一度、切り伏せようと思ったが止めた。
　そして、こいつは分身だ。本体は別の場所でこの戦いを見守っている。
　オレは自分の心が分かった。
　ドーン、ましてやアサイラムの考えなど微塵も賛同していやしない。
　そして、少なくともルサールカは敵なのだと。
　廃墟の壁の一部から人間が現れた。
　大きな竪琴を抱えている。ミューズだ。
　エンペドクレス、彼の鳥篭の能力を思い出す。

　ブラッドは彼と対峙していた。
「もう、君は逃れられない」
　ミューズは冷たく、勝利の宣告をする。
　ブラッドの周囲に、球体状の鳥篭が出現する。内部には大量の針が生えていた。
　かつて、ベスティアリーを捕らえたミューズの能力、エンペドクレスだ。
　どのような怪物も、詩人の言葉によって大人しくさせられる。
　オレは飛んでいた。瞬間移動だ。
　そのまま、ミューズの頭を蹴り上げる。
　気付くと。
　オレも鳥篭の中へと閉じ込められていた。
「フェンリル。ルサールカから聞いています。ブラッド・フォースは倒すべき相手なんですよ。彼を殺す事が我々の使命だ」
　オレは瞬間移動を発動させようとする。
　すると。
　転移出来ずに、間近くまで鳥篭が縮んで針が迫ってきた。
　この篭に捕らえられた者は、何者も逃れられない。それが彼の能力だ。
　あの能力で、彼はベスティアリーとブエルの切り札をいとも容易く制圧した。
　ブラッドを見る。
　すると。
　彼は笑っていた。嘲っているようにも思える。歪んだ笑い。
　感情が胸の奥で、ざわめく。
　オレは彼のそんな顔を見たくなかった。
　殺人への衝動を止めようと努力していたブラッド。
　それが、今日は崩れ去るのだ。
　ミューズの作り出す、鳥篭の檻ごとき通じる筈がないのに。
　何かが光った。
　ミューズの顔面に、氷柱のような物が突き刺さっていた。前頭部から下顎に向かって、綺麗に刺さっている。
　彼はそれが何かよく分からないみたいだった。
　それは、長い包丁のようだった。
　彼は不思議な顔で首を回す。
　今度は背中から腹をぶち抜いて、包丁が刺さっていた。
　次は脳幹から口。次は肩から心臓。次は腰からアキレス腱。
　刺さる度に、ミューズは踊り狂うように痙攣していた。デス・ダンスだ。
　眼は空ろだ。
　エンペドクレスの鳥篭が消滅していく。
　後ろで、ルサールカがへたり込んだ。

彼女は能力を解除したのか、ブラッドの周りを覆っている塔や死刑道具は消滅していった。
ミューズは死んだ。余りにもあっけなく。
にわか雨でも降るように、刃物がミューズの元へと正確に下りてきたのだった。
ブラッドが何をしたのかオレは理解した。
彼はミューズが現れた時、既に攻撃を仕掛けていた。
敵の能力が、おそらくは此方の攻撃を完全に封じ込めるものだろうと予測して、攻撃を封じられる前に、既に先手を打ったのだった。
一度目、二度目が封じられた時の想像も付いていたのだろう。
刃の雨は更に降り注いでいき、ミューズの全身を細切れにしていく。
かつて、『死神の少女』がこの技の名前を名付けた。『ブラッディ・レイン』だ。いつしかミューズの流した血によって、空に赤い雨が撒き散っていく。
後ろめたいが。
心なしか、その光景が禍々しくも美しいとさえ思った。
レイアがオレの肩を叩いた。というかよりも、力強くオレの肩を掴んでいる。
「逃げるのよ。出来るだけ遠くに飛んで」
レイアは真摯な眼でオレを見ていた。
彼女の言葉は有無を言わせなかった。
まず、オレはレイアを連れて、建物の外へと瞬間移動する。その後、何度も移動を繰り返す。その度、レイアはオレにもっと遠くに逃げるように囁いた。
その距離、数キロ。移動に経過した時間は四分。レイアはオレに、もっと一度に遠くに、早く飛べないの？　と悪態を付き。焦りと憤りを隠せないようだった。
何故なら、数百メートル離れた時点から危険が迫っているのが分かったからだ。
空だった。ブラッドの刃の雨に混ざって、小さな灯火のようなものが落下してきているのが見えたからだ。オレは瞬時にそれが何なのかを理解する。
一キロを越えた時点で、それは地面に落下していた。
レイアはその時、オレに毒づいた。
現実の核と同じ威力なのか？　核を生み出す能力なのか、それとも核に類似するエネルギーを生み出す能力なのか。多分、後者だ。灯火の落下速度は比較的、遅い。それに本物の爆弾なら、空中で爆発している。
オレの瞬間移動の能力では限界だった。せいぜい全力を出しても飛べるのは十数メートルから二十メートル前後、更に次の移動に入る前に数秒経過する必要がある。
「甘名、大丈夫。私が私の能力を発動させたから」
気付くと、世界がスローモーションに動いている事に気付いた。
風などの気流が先ほどよりも、異常なまでにゆっくりと動いている。
「昨日、ハーデスに私を『視認』させた。なので、問題無い。私とハーデスは今、『戦闘中』という事になっている。だから、私の『エタン・ローズ、エクスターズ・ワールド』の発動中なのよ。逃げれるわ、甘名。気をしっかり持って、爆発してしまったら、懸命に逃げるのよ。原子

爆弾の爆発のエネルギーは光の速さを超える、絶対に、私の側から離れないでね？」
　爆炎が風となって、光り輝きながら、オレの背中に迫り来る。
　レイアが光弾を飛ばして、それをガードしていた。
　そして、気付くと、三キロ程、離れた地点の廃墟の屋上にいた。
　少なくとも、半径一キロメートルを爆炎が焼き尽くして、天空へと茸雲が舞い上がっていた。オレはレイアを連れて、更に距離を離す事にした。
　七キロメートル地点の廃墟の屋上。
　砂漠を焼き尽くしながら、炎は放射能を撒き散らしていた。
　そして、また閃光。オレとレイアは眼を閉じた。
　核爆発の連撃だ。あれが、ハーデスのアトミック・ソード……。
　茸雲が幾つも巻き散っている。ハーデスはおそらく、此処に生物は存在しないと考えて容赦の無い攻撃を行っている。また閃光。オレ達がいた三キロメートル離れた辺りにも、炎が飛び散っていた。
　結局、数えるに爆発は１７回続いた。
　どう考えてもブラッド・フォースに直撃だった。
　オレは溜め息を吐き出す。
「馬鹿共が……」
　……。
　茸雲に紛れながら。
　それは空に浮かんでいた。
　オレはそれが何かを把握して、嬉しさと強い空しさが襲ってきた。
　アンビヴァレントな感情。
　絶対的なまでの、狂気に満ちた強さ。
　空虚さすら齎すまでの強さ。
　それは、紛れも無くブラッド・フォースだった。
　それは一見、何だか分からなかった。ウニやヤマアラシのようにも見えた。
　それが鎧や装甲だと気付いたのは、時間が掛かった。
　彼の肉体を綺麗に纏って、刃物が覆っている。
　そして、その刹那。
　炎の中から、ハーデスが姿を現した。
　それは、以前見せた温和な老人の顔ではなく、細いながらも筋骨隆々とした鬼の形相をしていた。彼の肉体を、何か膜のようなものが覆っている。おそらくあれで、自身の能力を防いでいるのだろう。
　ブラッド・フォースとの距離は数メートルだ。
　直感。
　オレとレイアは更に、距離を置く為に飛ぶ。
　ブラッドのナイフがハーデスの左足を吹っ飛ばすのと、ハーデスが自身の胸に向けて錆び付い

た刀を突き立てるのはほぼ同時に行われていた。
　黙示録の光景だ。世界は炎の渦に呑まれていく。
　爆発。衝撃。
　何度も、破壊音が鳴り響く。
　結局、アトミック・ソードの攻撃は１２キロ離れた地点まで、影響を及ぼして、一面を炎と放射能で塗り固めてしまった。
　オレとレイアは、必死で逃げてダメージを受けるのを避けた。
　虚しさが、まるで形となって姿を現したかのように、砂漠に風が吹き荒れる。
　どれくらいの時間が経過しただろうか。
　気付けば、日の出の上がる時間になっていた。
　隣ではブラッドが憔悴した顔で廃墟の壁にもたれ掛かっていた。
　ハーデスは首を落として倒したらしい。
「時々、自分が生きている事が嫌になる」
　ブラッドはそう呟いた。
　オレも同意して頷いた。
「何故、僕は死なないんだ？」
　オレは答えない。
　命の重み。
　余りにも、軽過ぎる……。
　人類の作り出した最強のエネルギーでも死なない能力者。……。
「あのお爺さんの顔。しばらく忘れそうに無い……」
「そうか……」
「地獄の鬼の顔だった。……」
　きっと、ハーデスはこうなる事を知っていた。当たり前のように知っていたのだろう。
　事実のみを言うのならば、ドーン最強のハーデスは、ブラッド・フォースに傷一つ付けられなかった。ひょっとしたら、服に埃も付けられなかったのかもしれない。絶望的な事実だけが突き付けられた事になる。
　けれども。
　ブラッドの顔は蒼白だった。
　そういえば、ハーデスが水月と戦ったアサイラムの近くの小島だが、今でも被爆地となって、人間が近寄れない場所になっているらしい。そこは今でも草花が育たないと聞く。
　冷たい何かが顔に当たった。
　それはコールタールのような真っ黒をした水だった。
　それは次々に降り注ぐ。
　黒い雨だ。
　ブラッドはオレとレイアに鉄製の大きな傘を差してくれた。
　真っ黒な雨が降り注ぎ、今もなお黒煙が撒かれ続ける大地に終末のような景色を映していた。

　オレは問いたい。一体、今回の戦いに何の意味があったのかを。オレには理解が出来ない。何故、ハーデスは負けると分かって、青い悪魔に挑んだ。
　命を賭けるに値する物。オレは彼の心情など何も理解出来なかった。彼の九十年以上の人生の重み。それは一体、何だったのか。
　オレは自分自身の命を捨てて、何かを成し遂げる事に対して共感する事が出来ない。
　老人は何を望んでいたのだろうか。
　空は何処までも暗く、黒い。オレには分からない。命を賭けるに値する物、けれども、それに何の意味があるのか。
「まさか、放射能で被爆しないわよね？　私は大丈夫だけれども。二人共、後で病院に行った方がいいわ」
「ああ」
　オレは溜め息を吐く。
　世界など、砂の城ように簡単に壊れてしまう。馬鹿らしいんだ……。
「あのお爺さんは。僕に勝つつもりでいたよ。自殺しに来たわけじゃなかった」
　ブラッドはそう告げた。
「甘名……？」
　少し背の低い、青い色の服をした少年はか細い声で言った。
「何だ？」
「僕は、……生きていていいのだろうか……？」
　オレは強く舌打ちする。何故か憎悪が膨れ上がっていた。
「いや。お前が生きられない世界なんて壊れてもいい。お前が生きられない世界なんて、人間が幾ら死んでもいい世界なんだよ」
「そっか。君は優しいんだよね。でも、僕の中は何もかもが空っぽだ。あのお爺さんには信念があった。あの鳥篭使いにも。でも、僕には何も無い。ただ、人が怖いから。殺す事しか出来ないんだ。僕は人形のように空洞だから」
　彼に何を語りかければいいのだろう？　オレには何も分からない。何故、生きていてはいけない人間が存在するかもだ。ウォーター・ハウスの言葉を思い出す。
「ねえ、甘名。何故、僕は殺人鬼なんだ？」
「お前はきっと……、この世界の代償行為だ。この世界の償いの為に存在しているんだ。飢餓、貧困、権力、搾取、社会、国家。人間が人間を殺すという事実の代償の為に、お前の理不尽な殺人行為が存在している。お前は十字架を背負っているんだ。お前はきっと、ノアの洪水で。神の雷で。黙示録の天使の喇叭なんだ。つまり、お前は神々の下す人間への災厄なんだろう」
「そうだとすれば、僕には……重過ぎる。背負い切れそうにないよ」
「大丈夫だ。お前はオレが守る。もう誰も決して、お前を傷付けないように」
　レイアはブラッドに視線を合わせる。
　もう、彼に人殺しをさせたくない。けれども、またさせてしまった。
　一体、彼を殺人鬼としてではなく、人間として見た者は、これまでどれだけいたのだろうか。

「明日、また会いましょう。次は私が相手だ。勝つつもりでいる」
　レイアは酷薄に笑う。
　ブラッドは彼女を見た。彼は少し辛そうに見えた。
「いいよ。また、明日、会おう。僕も君に勝つつもりでいるから」

†

　日が昇る。
　戦いの場所は臓物の草原を選んだ。
　レイアは疑いも無く、勝つつもりみたいだった。あれ程の圧倒的な強さを見せた青い悪魔を前にして、まるで怖れる様子が無い。
　ブラッド・フォースはいつものように、感情の無い顔をしていた。
　レイアは口笛さえ吹きかねない程、楽しそうだった。
「ねえ、私は貴方を殺すつもりだから。貴方もしっかりと殺すつもりで闘ってね？　死んだ方が負けよ」
　観客はオレと水月とエイジスの三名だった。
　何秒持つと思う？　とエイジスが訊ねてきた。
　普通に一秒でレイアの負けだろう。とオレは答えた。
「処で、ブラッド・フォース。一応、言っておくけれども」
　レイアは淡々と言う。
「私は貴方に逆立ちしても勝てるわけないわ。だから、全力でいかせて貰う」
　前後の文脈が噛み合わない矛盾した言葉を彼女は言う。
「貴方に勝つ為に、『エクスターズ・ワールド』を使わせて貰う」
　レイアは何の敵意も無く、ブラッドの額を撫でた。
　水月が、思わず息を飲む。
　ブラッドの顔が凍り付いているのが見えた。
　一瞬、世界の時間が停止したかのような錯覚。
　エイジスが始まりの合図として、空高くコインを投げた。
　ブラッドのクラシック・ホラーが発動していた。
　オレは肉眼で追いきれないが、草原の長く延びた草が細切れにされていたのを確認する。
　本来ならば、そこでレイアの死体が転がっている筈だが、彼女はその場所にはいない。
　確か、ブラッドの能力は刃を光の速さを超えられる。眼球で視認出来る速度ではない。
　二人がどうやって戦っているのか、正確に観賞する事が出来なかった。既に、何度も、攻防を重ねている事だけは分かる。経過した時間は四秒弱、既に勝負が決してもよい時間。
　ブラッドとレイアが対峙していた。
　レイアは振り上げた拳をブラッドの顔面の手前で止めている。
　ブラッドの顔の先には、数本のナイフが浮かんでいた。

　また、レイアの姿が見えなくなる。
　ナイフが届かない、とブラッドが小さく叫んだのが聞こえた。
　エタン・ローズの派生能力である、エクスターズとリュミエールの相乗効果で、レイアは今、不死に近い状態にあるのだろう。
「フェンリル、……彼女の能力は何なんだ……？」
　水月が訝しげにオレに訊ねた。
「卑怯だろう。あれは」
　オレは溜め息を吐いた。彼女の能力は相棒ながら、馬鹿馬鹿しくなってくる。
「答えになっていないぞ。正確に意味が理解出来るように言ってくれないか？」
「彼女のエタン・ローズの派生である、エクスターズ・ワールドは自分自身を飛び越える。相手の認識に依存するんだ。闘う相手との距離を瞬間移動する。意味が分かるか？」
　水月が呆然とした顔をする。水月はレイアとの戦いを思い出しているようだった。
「まさか……、」
　レイアは確実に、ブラッドのナイフをかわしていた。
「まさか、ひょっとして、相手と同程度の実力に跳ね上がるのか？　ほぼ無条件で？」
「そう。反則だろう、あれは。でも、決して無敵じゃない。身体能力、打撃の攻撃力や動くスピード、耐久力が跳ね上がるだけだ。相手の弱点を自動的に発現させるわけじゃない。相手の能力をコピー出来るわけでもない。基礎的な実力差を同程度まで縮めるだけだ。だから、一度の戦闘が終われば、元の自分の実力に戻る。それに、相手を遥かに上回って跳ね上がる事は出来ない」
「でも、……あんな能力者、見た事も聞いた事も無いぞ？　確かに、飛躍的に身体能力、自身の攻撃力などが上昇する者はいた。それこそ星の数程にも存在する。しかしだ、しかし、青い悪魔ブラッド・フォースは、それらの敵を圧倒的で絶望的な力で殺害してきた。あの少女は何なんだ？」
「以前、彼女とオレの関係については話したよな？　そして、オレの能力の本質が、『空間』だとするならば、彼女の能力の本質は『存在』だ。彼女は精神エネルギーそのもので、いわばオレの能力の一部ですらある」
　レイアの『エクスターズ・ワールド』は、相手がレイアを認識する事によって、発現される。
　レイアが相手と会話をしたり、視線を合わせる事が条件だ。
　その瞬間に、相手はレイアという存在を認識する。
　レイアは相手の意識に依存した状態になる。そこで、彼女の身体能力は相手の身体能力に依存して、飛躍する。
　レイアはブラッドと会話をした。以前は水月とも、それだけで彼女の能力は発動した。
　レイアにはブラッドの攻撃が見えている。
　オレにはとても視認出来ないし、水月ですらブラッドの攻撃を認識出来ないというのに、レイアはクラシック・ホラーの攻撃を見切っているのだ。
　光の速さで飛んでくるナイフを彼女は避けている。
　レイアは自称、最強の能力者と本人が言うのもあながち自惚れからではない。

草原にはブラッドが一人佇んでいる。
レイアの姿は何処にも見えない。ブラッドは次々と空中に刃物を作り出し、それを一瞬にして消滅したかのように見えない速さで飛ばす。
水月は、少しだけ引き攣ったような顔をしていた。
「私のブラッド・フォースとの戦いは何だったんだ？」
「さあな」
それから、十数秒後の事だ。
レイアはブラッドから、二十メートル程、離れた場所に現れた。
彼女は、全身、擦り傷だらけだった。特に、右腕と首筋のダメージが激しく、首からは血が溢れていた。
「もういいよ、勝負はついた」
ブラッドは、冷たく言う。
レイアは口から、血の唾を地面へと飛ばした。
「冗談じゃない。エクスターズとリュミエールを使っても倒せないなんて癪だわ。一撃でも貴方に命中すれば私は勝てる」
ブラッドは一本の刃を握り締めて、彼女へ向かって投げ付ける。
それは、彼女の腹に命中した。レイアは仰け反る。
ブラッドは追撃として、もう一本、ナイフを作り出して飛ばす。
オレと水月は、レイアの額にナイフが命中する事を視認出来た。
命中した筈のナイフは、レイアの額を傷付ける事無くすり抜けていく。
「……レイア。君に最低、６０回は致命傷を与えた。けれども、君は生きている。どういう能力なんだい？」
ブラッドは不思議そうに訊ねた。
「さあ？　何故、でしょう。でも、防ぎきれなかったから、こうやって首とお腹に酷いダメージを負っているのも事実」
レイアは勢いよく、口から血反吐を吐く。
「甘名は私の能力を卑怯と言っていたけれども。……そんなに強い能力じゃない。でも、私は貴方に勝ちたいのよ」
レイアは何かを服の中から取り出した。
オレは水月を見る。彼女はにやにやと笑った。
それは、小さなナイフだった。彫刻刀程の小さなナイフ。
彼女はそれを振った瞬間、彼女の指とナイフの刃が吹っ飛ばされた。
レイアは舌打ちする。対するブラッドは蒼褪めた顔で呼吸していた。
「あれは、『アンサラー』という剣で、うちで扱っている品物だ。振るうと、その瞬間に切ろうと願った相手にダメージが発現する。あれで、大抵の敵は殺せる。もっとも、私も同じ事をして同じように指と刃を飛ばされたがな。昨日、レイアはウチの店から大量の品物を買っていったよ。全部、ブラッド・フォース相手に使うという条件で安くしておいた。フリーク・リーチの首

をドーンに持っていって、三兆二千八百万円も貰ったそうだ。それで了承した」
　水月はくっくっと笑い続ける。
「使い切れなかったら、料金は戴いたまま全て返品して貰うという条件付きだったんだけどね。あの分だと、彼女、全部、使い切るな」
　水月はブラッドを恨んでいるようだった。ブラッドが苦戦している様を見て、彼女は暗い笑いを押し殺せないみたいだった。
　気付くと、レイアはブラッドの手前に屈んでいた。
　地面には、数個の小瓶が置かれている。小瓶からは煙が次々に溢れ出していた。
　煙に触れて、ブラッドのナイフがレイアの前で停止していた。
　そのまま、彼女は空中で一回転してナイフを避けて、円月刀のように肉体をしならせて、ブラッドの顔に飛び蹴りを入れようとしていた。ブラッドの肉体が揺れる、彼の服の中に仕込んだナイフによって、彼自身の肉体を移動させたのだろう。煙が一帯に充満している、ブラッドは巧く彼女にナイフを刺せないみたいだった。レイアの手から何かが弾け飛んだ。癇癪弾みたいだった。それから、花火のような火花が飛び散る。水月はくっくっと笑い転げている。
「あれで、大抵の能力者は行動を封じられるんだけどなあ」
　水月は本当に楽しそうだった。何か、怨念が凝縮されたような目で青い悪魔を見ていた。
　レイアの修羅蓮華の拳がブラッドの顔に迫っていた。
　勢いよく音がして、彼女の腕が吹き飛ぶ。レイアはそのまま勢いを殺さず、切られた腕で思いっきり、ブラッドの顔面に叩き込んだ。その腕も次々と肩先まで切られていく。
　切断された腕が、無い筈なのに、あるかのようにブラッドの顎辺りにヒットした。彼はよろめく。もう一撃、重い打撃を撃ち込んだ音がする。
　そして、彼はそのまま地面に崩れ落ちた。
　レイアは止めを刺すかのように、踵を打ち下ろした。
　レイアの両足に亀裂が走る。
　彼女は露骨に舌打ちをする。
「……私の負けか……でも、二回殴った」
　ぱらぱら、と。レイアは足の下から粉微塵に消滅していく。おそらく、ブラッドが細切れに刻んだのだろう。レイアは粉粒となって、空気に溶けていった。
　後には起き上がれないブラッドだけが存在していた。
　水月は楽しそうに、両手を叩いていた。
「ああ、『イビル・アーム』で打撃を入れるとはね。一番、低価格だった幻肢症を実体化する悪魔の腕が一番、役に立ったってわけか。見事だよ。私から買った品物全部使い切るなんて。後、一撃入れられていれば、お嬢ちゃんの勝ちだったんじゃないのかい？」
「いいものが見れたね。最高のショーだったよ」
　エイジスが同調していた。
　オレは嫌な予感がして、ブラッドの元へと駆け寄る。
　彼は蒼褪めた顔で倒れていた。

ブラッドの肉体は常人の。あるいはそれ以下なのだ。
レイアの打撃を食らって、骨がめちゃくちゃに折れているみたいだった。
顎は腫れ上がっているだけだが、肩に打撃がヒットしていて、鎖骨と上腕骨が明らかに砕かれている。肋骨も酷い事になっているかもしれない。冷や汗が顔中から吹き出して、自力で動くのもキツそうだった。
いつの間にか、水月とエイジスがいない。
オレは異様なまでの苛立ちに駆られていた。

†

レイアがブラッドに敗北して、この世界での肉体は消滅した。
再び、鏡によって向こう側の世界から召喚しない限り、彼女は此方に戻ってくる事は無い。よほどプライドが傷付いたのか、メッセージを送っても何の反応も示さない。
で、当のブラッド・フォースはというと、生死の境を彷徨いながら、オレの寝室のベッドで寝ていた。
レイアは生身の、それも華奢な人間の肉体を殴った事になる。運が悪ければ、ブラッドの顔は千切れて、彼は死んでいたし、肩も抉れていたかもしれない。
能力者はそれぞれ、身体スペックが常人よりも飛躍的に上昇するものだが、ブラッドの場合は老化が止まっているだけで、他は常人と大差無い肉体を有していた。
それよりも、見ていて思ったのはブラッドは容姿も然る事ながら、手足の方も少女のように細かった。寝台の上で魘される彼は、まるで幼い少女が怖い夢を見て脅えているかのように無防備で、弱弱しかった。
オレは姿鏡を見る。どう見ても、女性のそれとしか思えないような顔。手足。オレは自分の容姿が好きで、自分の内面が嫌いだ。
本来ならば、ブラッドを護るべきだったのかもしれない。
ブラッドの肩と胸に巻いた包帯からはじゅくじゅくと血が滲んでいた。時折、苦しそうに添え木に手を置こうとする。回復系の能力者の知り合いはオレにはいない。医者を探した方がいいかもしれない。
姿鏡をじっと見続けた。
オレはどのくらいの強さなのだろう？
能力者としての力。精神エネルギー。知性。意志。何か人一倍優れているものなどあるのだろうか？　無いかもしれない。結局の処、オレは皆のような信念のようなものが無い。
あるのは、多少の自己愛。空虚感。メランコリックな感性。強い女性的な感受性と少なからずある男性的な攻撃性。　　それがオレの精神。
ゴシック・ロリィタの装束に包まれたオレは、女性性を身に纏えるがレイアのような少女性を手にする事が出来ない。無邪気な悪意。
オレはブラッドに絵本を読んで聴かせる事にした。部屋中にクラシックも流している。読む本

はコクトーの小説の絵本だ。
　ブラッドは寝息を立てている為、オレはそっと音読する。木の葉の囀りよりも小さな声で。歌うように。
　……そういえば。回復系の能力者の知り合いが、一応、一人だけいた事を思い出す。
　ウォーター・ハウスは傷を治せる。
　しかし、彼に頼むのは憚れる。何より、ウォーターとブラッドを引き合わせていいものなのだろうか。

†

　アサイラムに戻って、ケルベロスを探した。
　ハーデスが死んでから、此処に戻っていない。オレはパーティーから外れようと考えていた。賞金首狩りはもうやれない。
　副署長のチェラブに相談する事を考えて、アサイラムを訪れた。
　そして、不安だが、やはりウォーター・ハウスに、ブラッドの傷を治して貰う事を考えていた。
　アサイラムの入り口付近。オレは嫌な光景を目の当たりにする。
　透明な防弾扉の向こうには、死が流れ出していた。
　オレは瞬時に気付いた。彼はすぐに決断したのだと。
　以前から言っていた言葉は嘘では無かったらしい。
　冷たい死が、風となって、空間に満ち満ちている。
　既に、沢山の命が奪われている。
「一つ聞きたいんだ」
　おそらく、ウイルスを撒き散らしている。もし、防弾扉が開いたら、迷わず逃げようと決意した。
「何故、人を殺したい？」
　おそらく、オレの声は届いていない。けれども、相手は十数メートル先から、オレの姿を視認したみたいだった。
　細長く伸びた体躯の男は、掴んでいたものを離す。ぐじゃぐじゃに顔半分が腐り、脳が飛び出した副所長のチェラブだった。チェラブはなおも肉体を痙攣させていたが、やがてその動きは止まる。脳が床に飛び散って、溢れ出していく。
　そういえば、チェラブはハーデスに準ずる実力者だった筈だが、彼はコーヒーに砂糖でも入れるかのように、リラックスして彼を見事にぶち殺していた。
　子守唄でも、詠うかのように彼は言った。十数メートル離れた先にも聞こえてくる声だ。
　さながらそれは、神にでも奉げる賛美歌のようでもあった。
「人間は人間らしさの中に拘束されている。人間らしさとは、他人を消してしまいたいという欲望だ。何もかもが欲望の延長線上に過ぎないのに、それが愛だの道徳だの神だの真理だのといった言葉で定義する。全てを意味付けの牢獄に包み込もうとする。理由付け、動機。俺は人を殺したい。そこに理由なんて無い。愛していようが愛していまいが殺す。好きだろうが嫌いだろうが殺す。善人だろうが悪人だろうが殺す。裕福だろうが貧民だろうが、男だろうが女だろうが子供だろうが老人だろうが。地位も民族も関係無く殺す。知り合いだろうが赤の他人だろうが、恩人だろうが好敵手だろうが仇敵だろうが見境なく殺す。快楽でもなく激昂でもなく憎悪でもなく恐怖でもなく嫌悪でもなく只、殺す。理由が欲しければ、分析、説明、解釈を、哲学でも心理学でも社会学でも精神医学でも、何でも使ってやればいい。だが、そこに意味なんて無い。結果だけが残る。人を殺したいという衝動だけが只、在る。いいか、殺人とはつまるところ、そういう事

だな。一個の無を作り続けるんだ。理由が必要なのは社会の為だ。社会は人が殺す事を恐怖する。殺人は社会の外側にあるからだ。戦争も同じだな、戦争は他国家、他民族という外側の恐怖によって行われる。人を殺すエネルギーは認識の外側につねに存在し続ける。他人に対する不気味さ、気持ち悪さ。俺は殺人の感覚を知っている。別に面白いわけでも、胸糞悪いわけでもない。只、目の前にある窓ガラスの露を拭き取るような感覚。感触。俺は……違うな、人間は人間を殺したいという本能が在る、人間は他人の命を、命でなくとも、人格を、実存を、魂を消してしまいたいという衝動がある。他人の命や精神など、不快さでしかないからだろう。それは、監獄や精神病院、あるいはあらゆる社会的装置によって矯正される、封印される。表面上はな。だが、違う。人間は人間を殺したいんだ。理由は幾らでもいえるが、とにかく人間は人間を殺す事を望んでいる。それは本能からだ。自分以外の存在が赦せない。それだけだろうな。それは、人間の一面にしか過ぎない？　いいや、愛、善、何もかもが殺人の要素を秘めている。それに無自覚なだけだな。いいか、愛は独占欲だ。他人の人間性の否定でしかない。善や正義なんて殺人のもっともたるものだな、それ自体が他人の死を意味する。所謂、好いとされているものは美しく糊塗される。幾らでも美化される。なあ、何処までも醜いと思わないか？」

　彼は副所長の肉体をぐちゃぐちゃに踏み潰していく。

　彼の眼には、何の感情も灯っていない。

「と、今からアサイラムの所長アンブロシーを殺しに行くんだが、手伝ってくれるか？」

「……それがお前の解答か。その先に何があるんだ？」

　と、オレは冷めた目で彼を見ていた。

　一面は死だけが撒き散らされている。只、純然たる無だけが続いている。

　アサイラムの職員の何名もが、彼の作り出すウイルスによって、人の形を破壊されて、苦しみ蠢いていた。

「人間は滅びるべきだ。権力、友愛、平和、戦争、道徳、法律、宗教、政治、経済、国家、何もかも気分が悪い。人間の姿自体が醜悪だ。人間という形自体がもう最悪なんだよ。形状、音声、味、臭い、全てがゴキブリ以下だ。俺の人間に対する嫌悪感は無尽蔵に溢れ出してくる。俺は無感動だがこれでも情熱的だ。俺は世界のルールに気付いただけだ。世界の齎す幻想を引っぺがしたいと思っただけだな。俺が人を殺すのは、幼少期に何があっただとか、思春期に友人に裏切られただとか、青年期に酷い疎外を受けたとかじゃあない。ただ、情熱があるだけだ。そこには何かの前提があるわけじゃない」

「なるほどな。芸術は？　芸術も気持ち悪いか？」

「……メタリカのアルバムだけは最高だ。それと料理」

「なら、お前に人間を滅ぼす資格は無いぜ？」

「いいや、駄目だな。今、芸術も料理も嫌いになった」

　オレは無意識のうちに、両手に剣を召喚していた。

　水の館、暴君ウォーター・ハウスは包帯を取って露になった両腕を構えていた。そして、露になった腹、殺人ウイルスを撒き散らす口腔のある腹だ。

　ここから、距離１７．２メートル。

　オレは剣を振るう。
　斬撃を１７メートル先に瞬間移動させた。
　ウォーター・ハウスの両腕は切り離されて吹っ飛んでいく。離れた腕が、壁に激突して、切断面から血飛沫が上がっていく。
　彼はにこやかにオレを見ていた。
「凄いじゃないか。何故、首を狙わなかった？　お前は今、俺を殺していた。でも、俺を殺さなかったのは何故だ？」
「オレの弱さからだ。けれども、次は首を狙う。いつか、オレも人を殺さないといけないのは分かっていた。残念だ……」
　殺さないと、非殺を誓ったのは思想や信念からじゃない。
　只、オレの弱さからだ。もし、オレが本当に強いのならば、非殺に何らかの信念を見出していた筈だ。オレは正義の味方なんかじゃない。
　オレは……。
　こいつときっと、同類なんだ。
「まあ、お前の剣撃なんて避けられる。今ので見切った。お前、攻撃に癖があるんだよ。視線が攻撃のエネルギーを瞬間移動させる方向へ向かうんだ。それに合わせて避ければいい。次、撃ち込んでこい。致命傷を与えてみな」
　いつの間にか、切り離した筈の右腕を、ウォーターは咥えていた。
　そして、口で切断面と切断面を合わせる。すると、彼の右腕は簡単に繋がった。
　気付くと、いつの間にか、左腕も繋げている。
　オレは迷わなかった。
　自分でも怖いくらいの決断だった。
　ウォーター・ハウスの首筋から、大量の血が溢れ出している。
　オレは全身から大量の脂汗をかいていた。
「……畜生……急所を外してしまった……、まだ、オレには覚悟が無い……」
「いや、お前は間違いなく俺の首を落としていた。俺が避けたんだよ。ギリギリだったが。後、一回で完全に見切れる。お前の負けだ」
　ウォーター・ハウスは防弾扉に手を置いた。
　防弾扉が紙屑のように、引き裂かれていく。
　オレは、その瞬間に、上の階へと瞬間移動していた。
「フェンリル。俺はお前と戦う気は無い。この施設を壊したいと考えていただけだ。犯罪者に自由を与えようとな。それで壊れる世界など、幾らでも壊れてしまえばいい」
　クソッ。考えてみれば、オレは彼の行動を止める理由が無い。オレは正義の味方じゃあない。けれども。
「お前は幼稚なんだよ、ウォーター・ハウス。人を殺す理由がまるで駄々っ子だな。精神的に幼いんだ。精神科医から言われなかったか？　まだ思春期、反抗期が続いているだけなんじゃないのか？」

「……んん、……否定はしない。でもまあ、幼少期に何かあったとかはないぜ？　言っているが、只、衝動がある。それだけだ」
「でもまあ。オレも正義の味方じゃないし。ましてや大人でもない」
「なら、何故、俺と戦う？　世界を滅ぼされたくないからか？」
「何でだろうな……？」
　少しだけ考えて、答える。
「自分自身の、気分が悪い、鏡像を見せられているからかもしれないな」
「まあ、言っておくが。大人だの子供だのってのも、人間が作り出した幻想なんだがなあ。そして、幻想に縛られているお前は、いつまでも愚かに、何にも得られずに何にも辿り着けずにいる。お前は、結局、自分が欲するものが何も分からないんだろうよ」
　こいつは、本当にぺらぺらぺらぺらと。
　嗚呼、畜生。
　彼の言説の全てを否定出来る程、オレは人間が出来ているわけじゃない。普通なら、この男の妄言なんて頭ごなしに否定する。でも、オレだって大小なりとも物事の考え方が歪んでいる。
「……気分が悪いんだ。知り合いが死ぬのは。愛着も友愛も何もなくてもな。駄目だな、オレは。オレが人を殺せないのは、その感覚もあるんだろうな」
「まっ。俺もお前に対しての友愛があるから。お前は殺さないでおくよ。これから、アンブロシー殺しに行くから。俺の邪魔をしない事だな」
　オレは奥歯を噛み締めて、苛立ちを覚えた。
「悔しいが、オレは口が巧くない。お前を黙らせる為の思考をしているんだが。物理的に叩き潰すしかないみたいだ」
　オレは再び、覚悟を決める。
　人を殺す覚悟。
　嫌な気分だ。脳神経が侵されてしまいそうな気分。
　妄想が入り込む。これから先も、また殺し続けてしまうかもしれない。
　一人殺した瞬間に、二人目のイメージを思い浮かべる。
　オレは精神力でそれらの妄想を捻じ伏せようとした。
　ウォーター・ハウスの死体を思い浮かべる。駄目だ。
　ポケットからピルケースを取り出して、白い錠剤を大量に口に入れる。
　向精神薬。酷い抑鬱の時に、飲む為の錠剤だ。
　２シート分くらいは、飲み込んだだろうか。
　すぐには、効果が現れない。副作用で肉体がふらふらになる可能性もあるが、パニックを起こすよりはよっぽどいい。
　駄目だ。
　オレは剣の一本の先を睨み付けた。
　そして、自分の左の掌に剣を勢いよく突き刺す。
　激痛。

骨に走る痛み。
けれども、痛みよりも感情が勝っている。
いや。不安定ながらもやってみる必要がある。
オレは、剣を空中に向けて振るう。
エネルギーの瞬間移動を発動させる。
突っ立っているウォーター・ハウスの背中に、斬撃を送り込んだ。
ウォーターは楽しそうに、ステップする。
そして、オレの攻撃を簡単に避けていた。
もう一撃。
オレは近くにあった防犯ガラスを蹴り割った。そして、その破片を瞬間移動させる。
それは、ウォーター・ハウスの前へと雨あられとなって降り注いだ。
彼はふん、とこちらを見て嘲る。
そして。
彼が右手で両目を押さえた。
ガラスの破片を、彼の眼球へと飛ばしたのだった。
勿論、すぐに両眼を治されるだろう。けれども。
オレは屹然としながら、剣撃を飛ばした。
今度こそ、首を真っ二つにしてやろうと。
……剣撃のエネルギーは届く事は無かった。
彼の左腕が、血塗れになりながら勢いよく裂けていく。彼は左手で、自身の首周りを握り締めていた。オレは剣を振るう。彼の左腕が切り落とされる。そして、床に落ちたガラスの破片を飛ばす。それを彼の左手の切断面へと投げ入れていく。体内に異物が入り込んだまま再生するのか、それとも異物を抜き取らなければ、再生出来ないのか分からないが、いずれにしても、彼の防御面は致命的になる筈だ。
オレは断頭台の前で、罪人に死刑を執り行う執行官をイメージする。
こいつの首は絶対に落とす。
オレは彼の右足も切り落とした。
オレの能力の力は上昇していた。以前は、瞬間移動したエネルギーは元のエネルギーよりも弱まっていたが、今はエネルギーの強さを固定して、移動させる事が出来る。
このまま、こいつを倒さなければならない。
きっと、これは試練なのだ。
オレにたった一度だけ、人を殺す意志を持てと。
この世界には、存在してはいけない人間がいるのだと。
「お前と戦うのはもう飽きた。気が済んだか？　そろそろ本当に行かせてもらうぞ」
ウォーター・ハウスは、右手で、首筋をなぞる。
ぽとり、と何かが落ちた。
それは皮膚の形をしていた外殻の一部のようだった。

オレは息を飲む。
何かがヤバイ。
こいつ、もしかして、切り札を隠し持っていたのか？
オレは早めに決着を付けようと、剣を振るった。
ウォーター・ハウスの右手の指の幾つかを吹っ飛ばして、そのエネルギーがそのまま、彼の顔の一部を裂く。後、一撃、後、一撃で決める。
……全身に激痛が走った。
いや、それは痛みというよりも、炎の中に投げ込まれたような感覚。それでもなお、オレは腕を振るって、剣のエネルギーを飛ばしていた。
腕の神経がおかしい。思うように、腕力が出せない。
それよりも。
全身に激痛が走っている。気付けば、地面に倒れこんでいる。
周りには、オレにダメージを与える現象が何も無い。何も見えていない。
すぐに、オレは思い至った。ウイルスに感染したのだと。
何故？
周囲を見渡す。通気口を渡って、ウイルスが入り込んできたのか？　だが、彼との距離は建造物を跨いでいる。
このまま死んでいくのかと思っていたが、どうやらオレの肉体は倒れていた死体のように紫色や緑色に変色してはいるものの、そのウイルスの動きは緩慢だった。確か、すぐに死に至る病原菌であった筈だ。
周りを見る。一匹の蝿が床に落ちて、もがいていた。蝿はまだ生きているが、羽が変色していた。腹が破裂する。
神経系統が麻痺しているのか、オレは動けない。仕方が無いので、自分の肉体を『あの部屋』へと瞬間移動させようかと考えていた。しかし、ウォーター・ハウスに視認されている以上、オレは『あの部屋』へは飛べない。次元から切り離されたあの個室は、人に見られている状況では行けない場所なのだ。
仕方なく、オレは全身を建物の外へと移動させた。
空中。落下していく。
地面に落ちる直前で、更に飛んで、直撃を防ぐ。
土の匂いと、草の匂いがする。嗅覚はどうやら麻痺していないらしい。
見ると、いつの間にか、目の前にオレを今の状況に陥れた人物が近付いてきた。
逃げられない。
「『脊髄』を解放するつもりだったんだが、その必要は無かったな。先ほど、飛ばした蝿に緩和したウイルスを感染させて、お前の方に飛ばしていた。やっと蝿は辿り着いたか。微調整が必要だったんだぞ、蝿がお前に辿り着く前に死なないようにな。それにしても、虫けらってのは使いやすいな。そういえば、ヨーロッパでペストを撒き散らしたのも、鼠ではなくて、鼠に付着した蚤だったって知っているか？」

「……、それくらい、……知っている。ふざけやがって……」
　ウイルスが全身に巡っていく。
　呼吸困難で酷く苦しい。
「さて、俺はハーデスの死が何だったのかについて考えている所だ」
　意味深な事を彼は言う。
「俺はハーデスが死ぬ事によって、何が為されるのかを考えている。アサイラムにとって深刻な損害にしかならない。そして、奴は何故、今頃、青い悪魔に挑んだのか。俺はそれを考察している。おそらく、何かがあるのだろうな。奴が死ぬ事によって、発動する何かが。俺は正直、不自然さが拭えない」
　全身から、冷や汗が流れる。灼熱の炎に焼かれながら同時に、凍える吹雪の中へと投げ出されたような痛覚だ。
「実を言うと、副署長のチェラブだが。最後まで口を割らなかった。ハーデスが死んだ事は一体、何だったのか。さて、人間の作り出した最大の暴力の一つに核というものがある。それを模範してアトミック・ソードという能力は生まれた。それに打ち勝った青い悪魔。そして、死の翼。彼らは一体、何なのか。人間の力では能力者の能力を止める事は出来ない。あの二人はきっと、神の片鱗なのかもしれんな。もっとも、俺は神秘主義者ではないが」
　何かを喋ろうとしたが、声が出ない。
　このクソ野郎をどうにかして、地に伏せてやりたいのに。
「ハーデスは懺悔がしたかったのじゃないだろうか？　そして、もうアサイラムを止める抑制なんて無い。彼は性善説を信じたかったのか？　俺には分からない」
　声が少し出せそうだった。喉の中の呼吸器をイメージして、どうにか小さく声を出す。
「まあいい。アンブロシーに聞こう。ああ、そうそうウイルスは後、三、四時間ほどすれば、身体から抜けていく。その後、二日ほど日常生活に支障を来たすだろうが、まあ、悪く思わないでくれ」
「待て。……お前の能力『エリクサー』は腹と両腕の他に、後、幾つの毒やウイルスを隠し持っているんだ？　……」
「『胸』と『脊髄』と『背中』だ」
「そうか。……お前、オレを……殺さなくていいのか？」
　そう訊ねたが、彼はそれ以上は答えずに去っていった。
　オレは静かに湧き上がる殺意に焼かれながら、彼を憎しみの眼で見ていた。
　そして、誓ったのだった。
　こいつだけは、絶対に殺してやると。

†

「何をされたのかは知らないけれども。僕は、あのお爺さんとの戦い以来、人を殺せなくなった。その後に、レイアと戦った時、彼女は不死ゆえか、クラシック・ホラーは発動したのだけれど

もね。それから、……今、僕は僕の意志を持って、君の腕辺りを傷付けようと思う。覚悟はいいかい？」
　ブラッド・フォースは、その能力『クラシック・ホラー』を発動させる。
　そこら中にある金属を分解して、刃物状に組み立てる。
　刃物の動きが止まった。
　刃物は空中で固定している間に消滅した。
「分かったのは。もうすぐ、僕は能力者ではなくなっていくという事だ。でも、僕はこれでいいと思っている。少しずつ、完全に自身のクラシック・ホラーが消滅していくような気がしてならないんだ。あの少女と全力で戦えた事は幸運だと思う。もし、一日遅れたら、彼女は本当に失望していたんじゃないかな」
　青い悪魔と永遠の少女。
　レイアは全力で、ブラッドに挑んだ。
　最強の能力者とこれ程までに、良い勝負になったのは、レイアが始めてだという。
　運命の輪が変わっていく。
　何もかもが崩れていく。
　あるいは、もしかしたら、新しい世界が始まるかもしれない、とブラッドは言った。
「チェラブの能力封印の能力が、ハーデスの命に刻み込まれていたんじゃないだろうか？　いずれ、君が能力を失った事、人を殺せなくなった事に気付く者が現れる筈だ。なら、君の首を狩ろうとする者が現れるだろうな。オレは君を守ってやりたいと思っている。駄目だろうか？」
　青い悪魔は無言だった。
　オレは、とにかく、この部屋の中にいるように言った。
　決して、外に出てはいけないと。
　この空間から、外に出てはいけないと。
　そして、此処は君がいていい場所。誰も君を傷付けてはいけない場所なのだと。
「あのお爺さんはおそらく、世界中から能力なるものが無くなればいい。能力者の存在が無くなればいいと思ったんじゃないかな」
「なるほどな……」
「おそらくは、まだ先があるんじゃないかな。もし、僕がお爺さんの立場なら、標的は僕だけに絞るのだろうか？」
　人類が作り出したエネルギーで、最悪の力を持つ核爆発を生み出せるハーデス。
　彼は死に、破壊したものから、何かを芽吹かせたとするのならば。
「でも、もう僕は『青い悪魔』じゃない。殺人鬼じゃないんだ。『最強の能力者』でもない。多分、これは喜ぶべきだと思う。僕に感情が戻るかどうかは分からない。僕は人間に戻れるのだろうか？」
　オレは少し考えて言った。
「肋骨が折れているんだ、喋るんじゃない。傷は痛いか？」
　ブラッドは黙った。そして、小さく言った。

「痛いよ、それは」
　少し切なく、彼は哀しそうな顔をする。
　他人を傷付ける事でしか、自分自身を守れなかった小さな少年。
　彼は、今、新しい人生を始めるのだろうか。
　決して、強くなんてなりたくなかったと彼は言う。
　彼の人格を知って、彼に挑んできた者は、これまでどれ程いたのだろうか。
「能力者の持つ能力とはある意味で言えば、呪いなんじゃないのだろうか。けれども、オレは自身の『フェンリル』を意志として使う。どのような目的が、今、あるわけではないのだけれども……」
　誰かを傷付ける者がいる、それは悪なのか。
　オレは、今、Ａランク賞金首としてドーンにて、指名手配を受けている、殺人鬼ウォーター・ハウスを倒そうと密かに決意したのだった。
　……。
　ブラッド・フォースは安らかな寝顔で、ベッドの布団に包まっていた。
　オレはそっと、彼の隣に潜り込み、優しく彼の金髪を撫でた。
　誰にも愛されなかった少年。傷付ける事しか出来なかった少年。
　オレは優しく彼を抱き締めた。